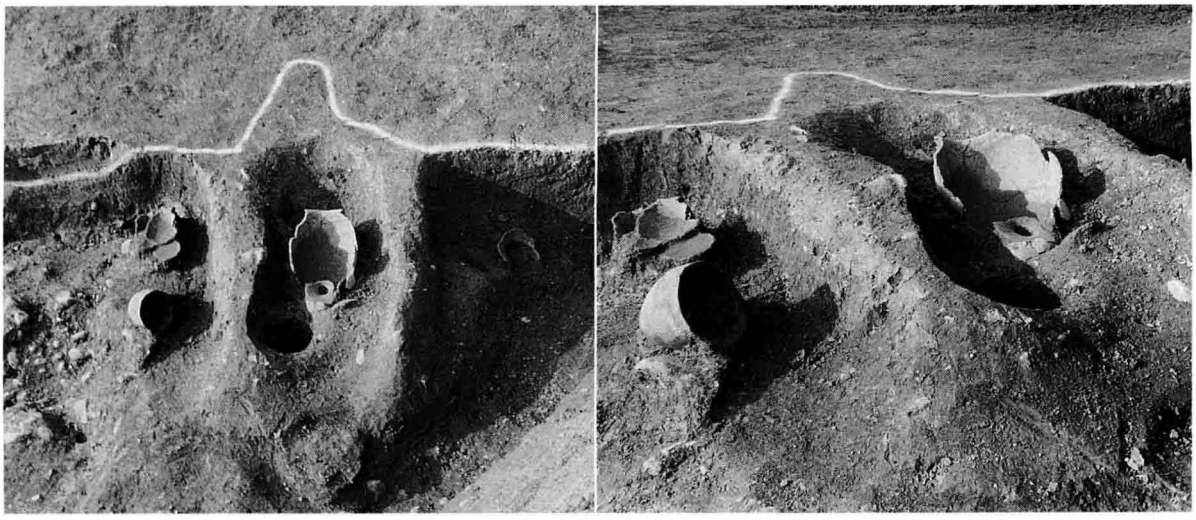
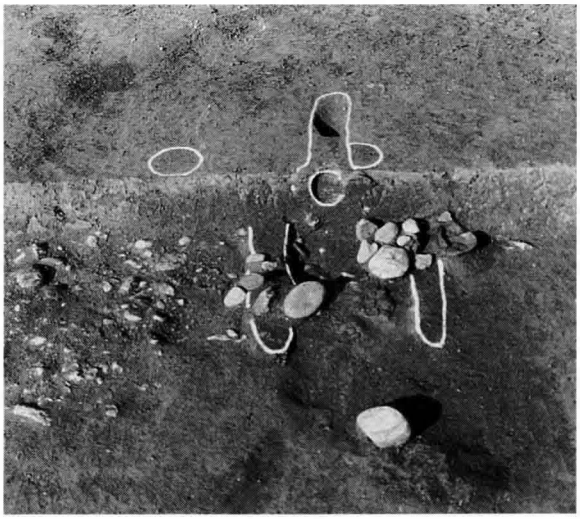
88号住居址



88号住居址カマド

92号住居址　（図161）

確認面からの掘り込みは平均40cm前後と深いが、床面は軟弱である。平面プランは5.80×5.50mの隅丸方形住居址である。主柱穴はP1～P4で、3.40×3.00mの4本方形配列である。P6・P7は下層の住居址の柱穴である。カマドは奥壁中央に位置し規模は両袖間外側で0.90m、内側で0.50m、長さ0.90mである。長さ0.90mほどの煙道も検出している。間仕切り溝はP1・2・4から壁へ向けて各1本の計3本を検出している。また西壁から南壁にかけて、幅20cm・深さ10cm前後の壁周溝を検出している。住居址中央付近を中心とする覆土下層より、多量の円礫が投棄された状況で検出されている。



92号住居址カマド

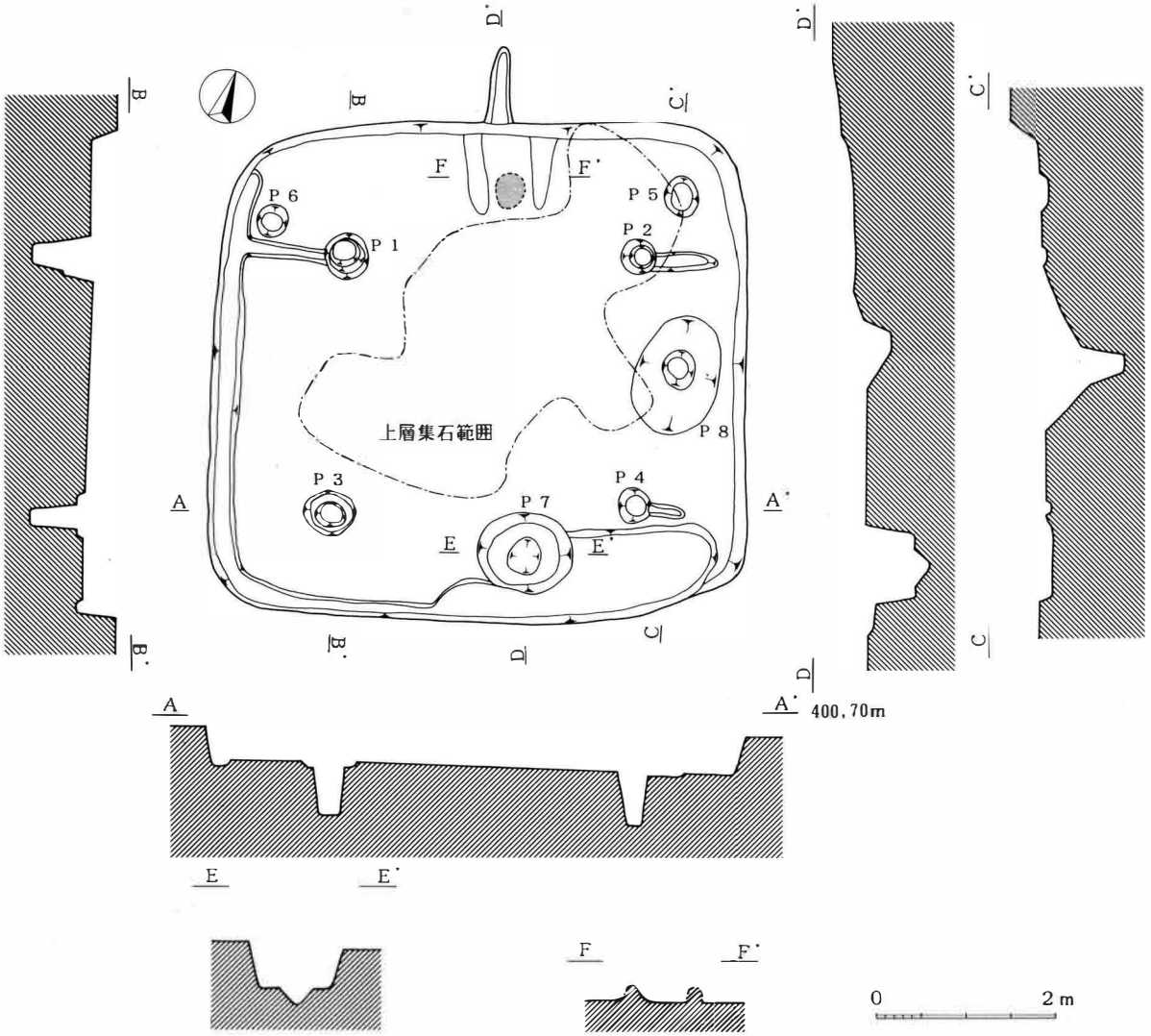


図161　92号住居址実測図　（1：80）

92号住居址

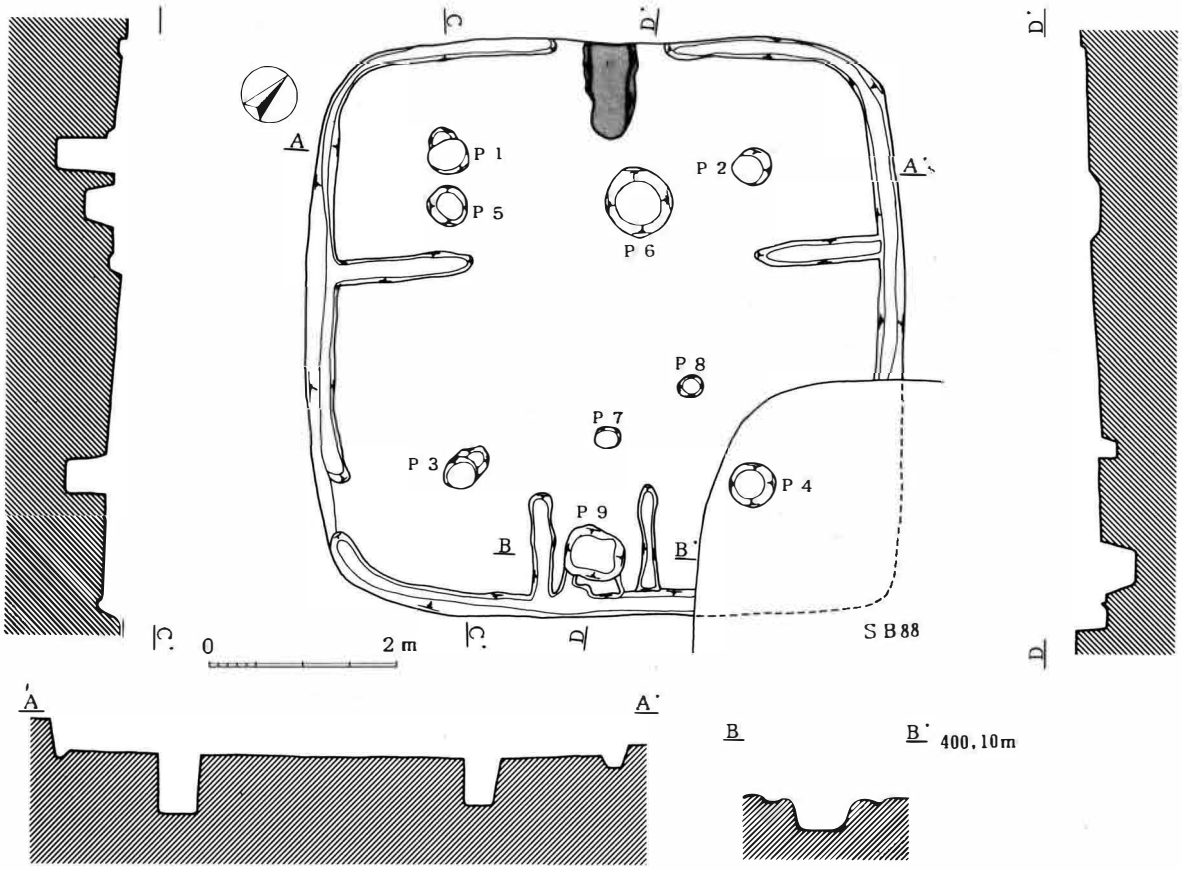


図162　96号住居址実測図　（1：80）

96号住居址　（図162・163）

古墳時代の99号住居址をきって構築されるが、88号住居址に南東隅を切られる。確認面からの掘り込みは平均20cm前後と浅く、床面は全体に軟弱である。

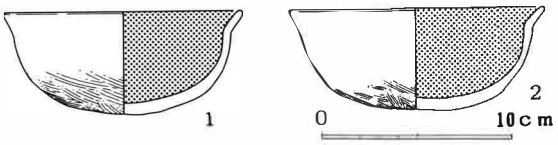


図163　96号住居址実測図　（1：4）

平面プランは6.30×6.20mの隅丸方形住居址である。柱穴はP1～P8まで検出している。主柱穴はP1～P4で3.30×4.40mの4本方形配列である。P9は両脇に間仕切り溝を伴う入り口部ピットで、0.50×0.60mの不整な方形を呈し、深さ31cmを測る。

カマドは奥壁中央に位置するが、両袖部は破壊されており、燃焼部の焼土の堆積を確認したのみである。

間仕切り溝は西壁と東壁の中央に、壁に直交する形で各1本、P9の両脇に2本の計4本が検出されている。

壁周溝はカマド部分と住居址南西隅の一部を除いて全周するようであり、幅20cm・深さ10cm前後である。

カマド燃焼部より土師器坏が2点出土している。

96号住居址

103号住居址　（図164・165）

弥生後期の105号・110号住居址を切って構築される。確認面からの掘り込みは平均40cm前後と深いが、床面は全体に軟弱で不明瞭である。平面プランは5.40×5.50mのやや不整な隅丸方形住居址である。主柱穴はP1～P3で、3.00×3.20mの4本方形配列と予想される。カマドは奥壁中央やや西寄りに位置し、規模は両袖間外側で1.00m、内側で0.30m、長さ1.10mである。両袖先端に石を配している。また住居址中央部に焼土の堆積を確認している。西壁際には幅14cm・深さ5cmの壁周溝を検出している。住居址北西隅から壁に寄りかかった状況で炭化した板材が出土している。実測図中の破線は掘り方を示している。

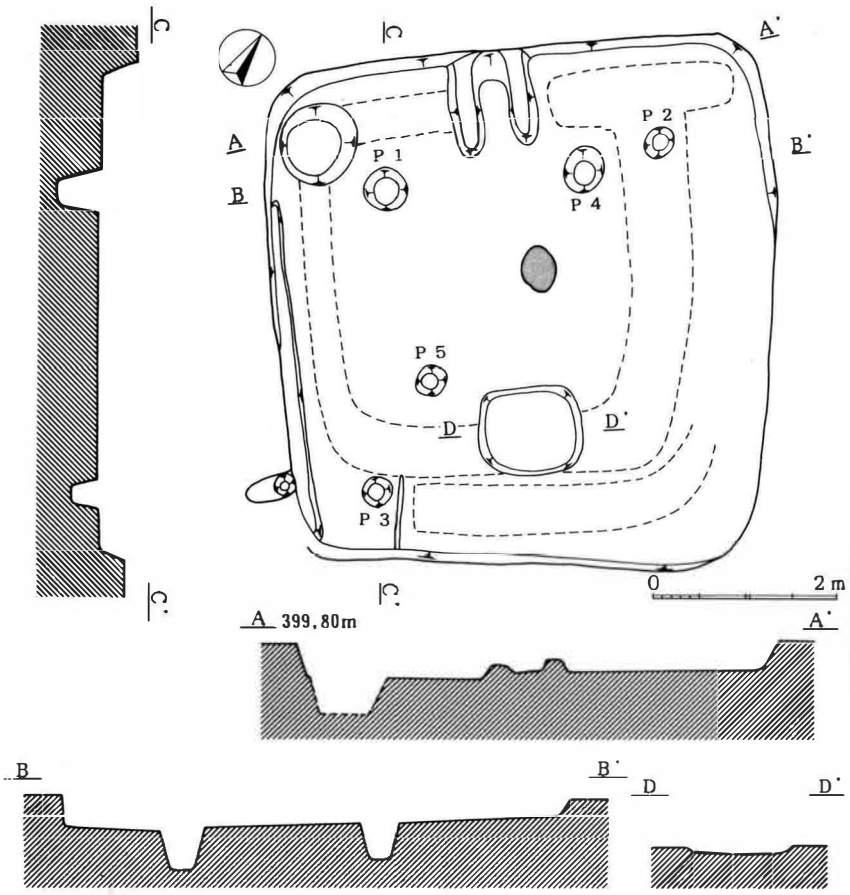


図164　103号住居址実測図　（1：80）

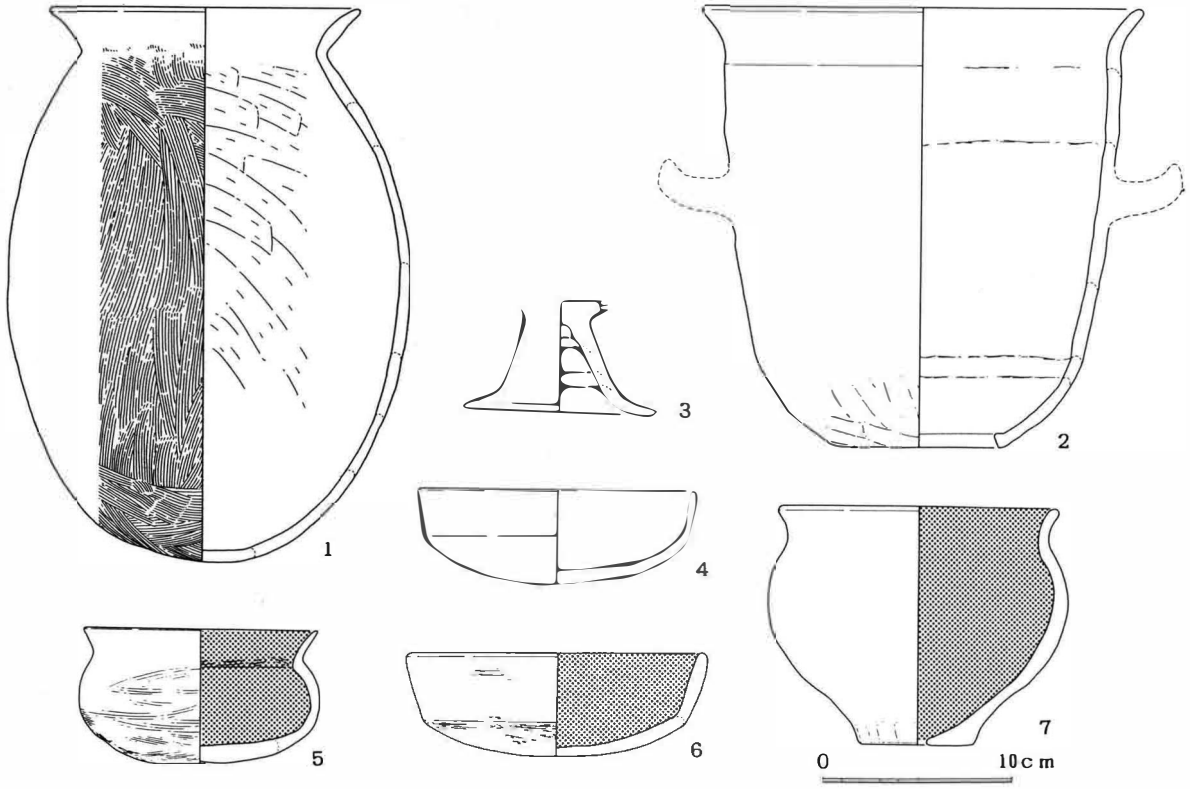
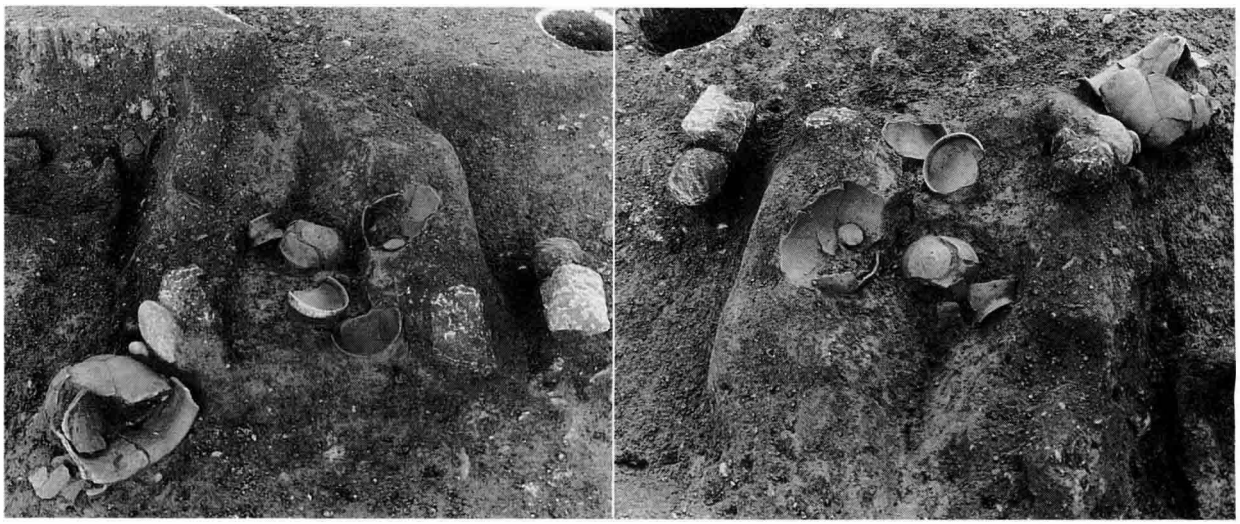
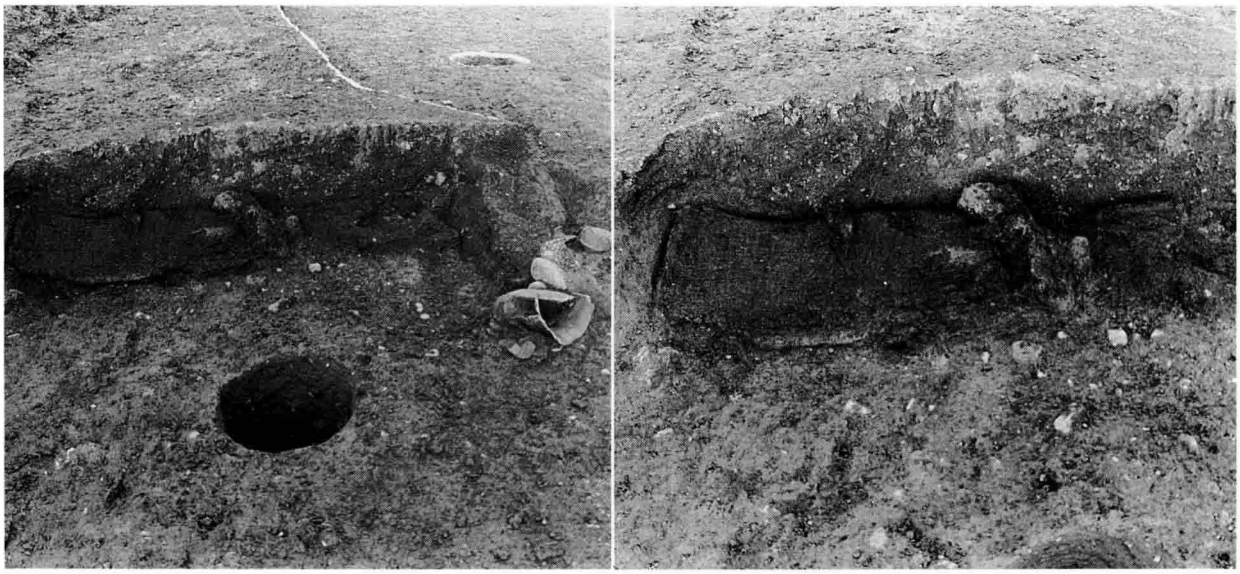


図165　103号住居址出土土器実測図　（1：4）

103号住居址



103号住居址カマド



板状炭化材出土状況

7号土壙　（図166・167）

弥生後期の42号住居址の上層を切る。確認面からの掘り込みは平均10cmと浅い。平面プランは2.20×2.30mの隅丸方形を呈する。床面より若干浮いた位置で、円礫とともに多量の土器群が一括して投棄された状況で出土している。

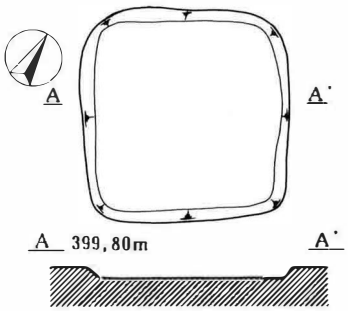


図166　7号土壙実測図

42号住居址上層出土土器　（図168）

弥生時代後期の42号住居址上層からは前述の7号土壙の他に、多量の古墳時代の土師器が出土している。7号土壙のように明確な掘り込みは認められなかったものの、別に住居址等の遺構が存在した可能性が高く、ここではこれらの土器を42号住居址上層出土土器として一括して把握しておく。

7号土拡・土器出土状況

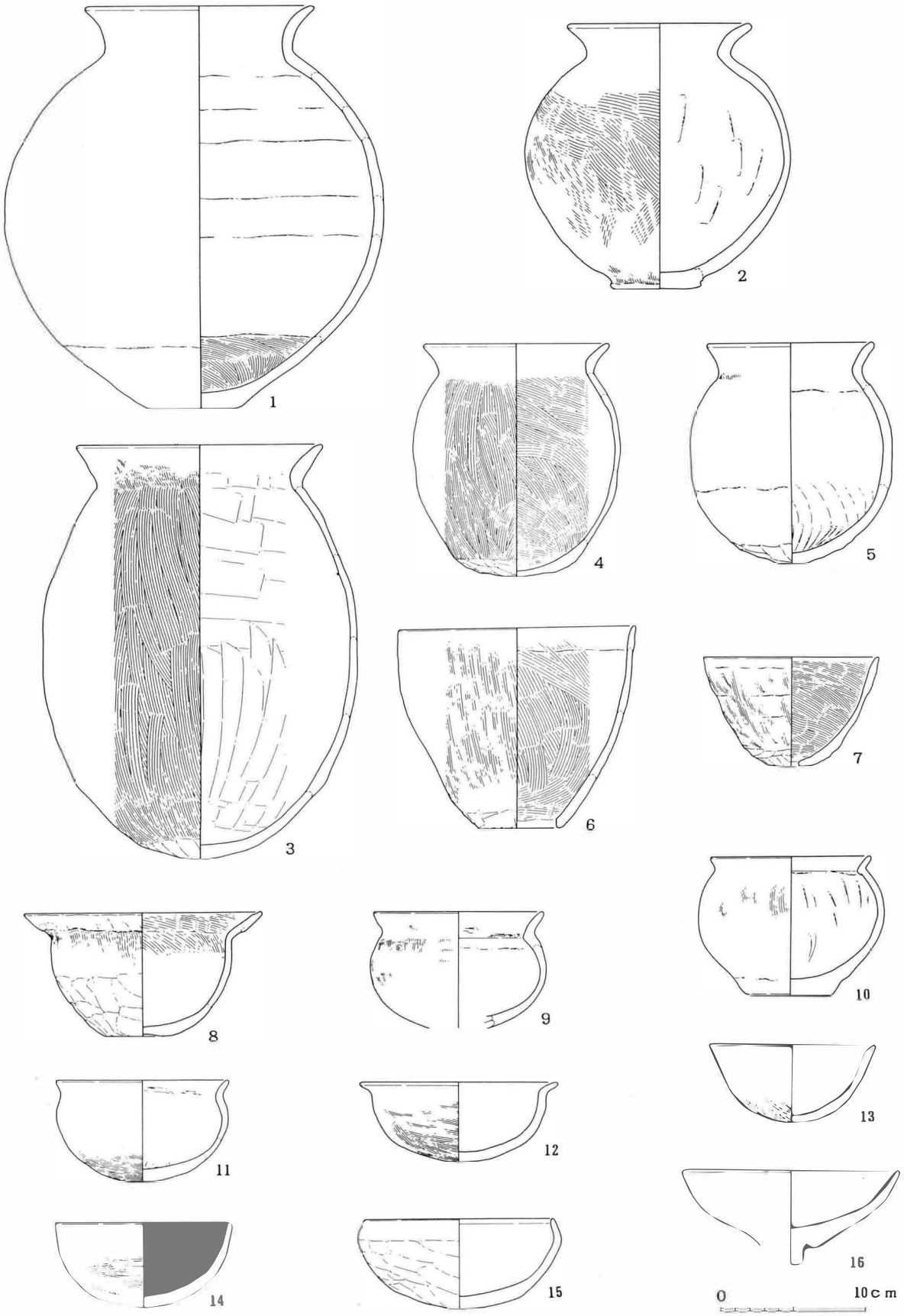


図167　7号土拡出土土器実測図　（1：4）

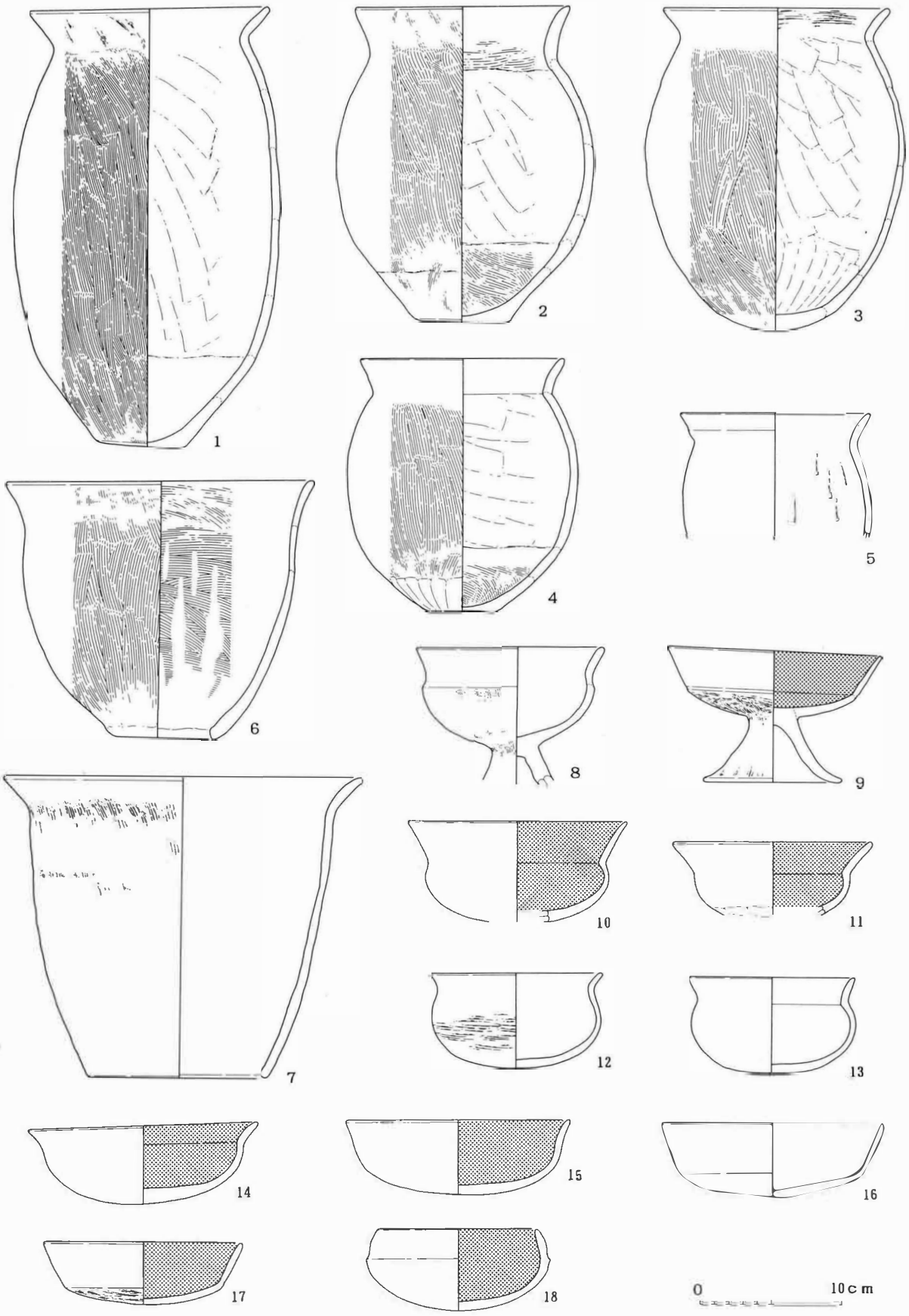


図168　42号住居址上層出土土器実測図　（1：4）

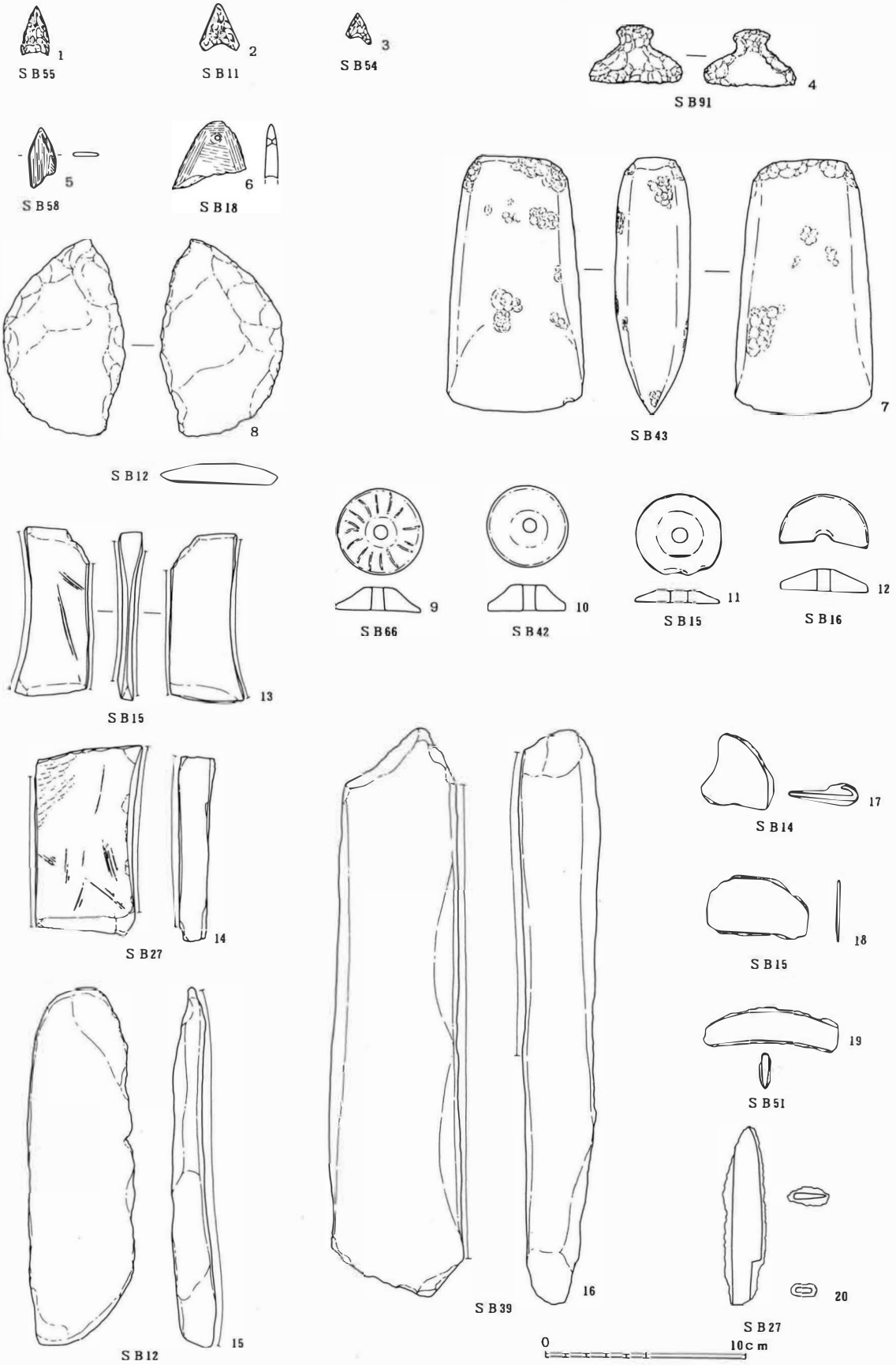


図169　石製品・金属器類実測図　（1：3）

表４　出土土器観察表①

番号	器種	法量（㎝）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
43号住居址									
1	壺	20.0	9.8	39.0	2/3	B	口唇：ＬＲ縄文　口縁：ハケ→ナデ　頸部：沈線区画→ＬＲ縄文充鎮 胴部：ハケ→磨き　底部：ケズリ→ナデ　胴部貼付け文１	口縁：ハケ→磨き 胴部：ハケ→ナデ	床
2	壺	19.2			4/5	C	口唇：ＬＲ縄文　口縁：ＬＲ縄文→笹山　形　斜ハケ 頸部：ＬＲ縄文→沈　線区画	磨耗調整不明	床
3	壺	15.0	1 13	36.1	2/3	C	口唇：ＬＲ縄文　口縁：ハケ→磨き　頸部：沈　線区画ＬＲ縄文充鎮 胴部：ハケ→磨き	口縁：ハケ→磨き 胴部：ハケ→ナデ	床
4	壺	1 54			4/5	C	口唇：ＬＲ縄文　口縁：ハケ→ナデ　頸部：沈　線区画→ＬＲ縄文充鎮 胴部：ハケ→磨き	口縁：磨き 胴部：ハケ→ナデ	床
5	甕	14.9			1/3	D	口唇：ＬＲ縄文　口縁：横ナデ　胴部：ハケ→櫛縦羽　状文	磨き	床
6	台甕	11.5			3/4	D	口唇：笹　刻み胴部：コ　の字重　磨耗調整不明	磨耗調整不明	床
7	甕		12.4		1	C	頸部：等 間隔止め簾状文 胴部：櫛縦羽　状文 磨耗調整不明	磨耗調整不明	床
8	片口	21.0	8.2	10.9	2/3	B	口縁：ＬＲ縄文→２本一対の笹重連弧文　外面全面赤　彩	磨き・赤　彩	床
9	蓋	16.8		7.9	1	D	ハケ→磨き	ナデ	床
102号住居址									
1	壺		6.0		1/3	B	口縁：ハケ　頸部：沈　線区画→波文・簾　状　鎮　ＬＲ縄文→笹　鋸	磨耗調整不明	床
2	高坏	1 60			3/4	C	ハケ→磨き	ハケ→磨き	床
104号住居址									
1	壺	8.8			2/3	B	磨き・赤　彩	磨き・赤　彩	床
2	甕	1 62			完	D	口唇：ＬＲ縄文　口縁：横ナデ　胴部：縄文→櫛縦羽　状文	ハケ→磨き	床
11号住居址									
1	壺	20.0	4.8	19.1	3/4	C	磨き・赤　彩 ２孔一対の緊 縛孔 底部：ケズリ→磨き	口縁：磨き・赤　彩 胴部：ハケ→磨き	覆土
2	壺				1	B	磨き・赤　彩 直　線→波状文→直　線	磨き・赤　彩 ハケ	覆土
3	壺		4.4		1/3		磨き・赤　彩 底部：磨き・赤　彩	ナデ	覆土
4	甕		6.8		2/3	D	口縁：櫛波状文（下　上）　頸部：４連止め簾状文　胴部：櫛波状文（上→下）→縦磨き	磨き	覆土
5	甕	9.6	3.4	1 05	3/4	C	口縁・胴部：波状文　磨耗詳細不明　頸部：等 間隔止め簾状文	磨き	覆土
6	甕				1/10	A	ナデ	ナデ	覆土
7	高坏		20.4		1	A	ナデ→赤　彩 円形透　孔１ 脚端部：笹羽　連続刻み	ナデ	覆土
8	鉢	1 08	3.6	5.5	完	B	磨き・赤　彩 底部：ケズリ	磨き・赤　彩	覆土
18号住居址									
1	壺				1	B	櫛直線文３　磨き・赤　彩	ハケ→ナデ	覆土
2	甕	1 71	7.2	21.9	1	D	口縁：櫛波状文３（下　上）　頸部：３連止め簾状文 胴部：櫛波状文３（上→下）→磨き　底部：ケズリ→磨き	磨き	覆土
3	甕	24.6	7.6	27.9	1	D	口縁：櫛波状文３（下　上）　頸部：４連止め簾状文 胴部：櫛波状文３（上→下）ハケ→磨き　底部：ケズリ	ハケ→磨き	覆土
4	鉢		5.4		2/3	B	磨き・赤　彩	磨き・赤　彩	覆土
19号住居址									
1	壺	23.3			2/3	C	口縁：磨き・赤　彩 底部：Ｔ字文　胴部：磨き	磨き・赤　彩	床
2	壺		1 00		1	C	胴部：横磨き　底部：ケズリ→磨き	ハケ	床
3	壺		7.1		2/3	B	胴部：磨き・赤　彩 底部：磨き	ハケ→磨き	柱穴内
4	甕		5.7		1	D	頸部：等 間隔止め簾状文 胴部：磨き　底部：ケズリ→磨き	磨き	床
5	高坏	25.5			1/3	B	磨き・赤　彩	磨き・赤　彩	柱穴内
6	高坏		1 24		3/4	B	磨き・赤　彩	磨き・赤　彩	床
7	高坏				2/3	B	磨き・赤　彩	坏部：磨き→赤　彩 脚部：ハケ→ナデ	覆土
8	高坏				2/3	C	磨き・赤　彩	磨き・赤　彩	集石内

表５　出土土器観察表②

番号	器種	法量（cm）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
19号住居址									
9	甕	21.4			1/4	C	口縁：櫛波状文３（下→上）　頸部：２連止め簾状文 胴部：櫛波状文（上→下）	磨き	集石内
10	甕	17.7			1/4	B	口縁：櫛波状文３（下→上）　頸部：３連止め簾状文	磨き	集石内
11	甕	14.1	5.4	16.1	3/4	D	口縁：櫛波状文２（下→上）　頸部：３連止め簾状文 胴部：櫛波状文３（上→下）→磨き　底部：ナデ	磨き	集石内
32号住居址									
1	甕	16.4	6.8	19.9	1/3	D	口縁：櫛波状文３（上→下）　頸部：２連止め簾状文 胴部：櫛波状文１　ハケ→磨き　底部：ケズリ→ナデ	口縁：ハケ→磨き 胴部：ハケ	床
2	甕	18.8			3/4	D	口縁：櫛波状文４（下→上）　頸部：２連止め簾状文 胴部：櫛波状文４（上→下）→磨き	磨き	床
34号住居址									
1	高坏	32.5	20.0	29.0	2/3	B	磨き・赤彩三角形透孔	磨き・赤彩	床
2	高坏		17.4		4/5	C	磨き・赤彩	磨き・赤彩	床
38号住居址									
1	壺	27.8			1/4	B	磨き・赤彩	磨き・赤彩	貯蔵穴
2	壺	23.8			完	B	磨き・赤彩	磨き・赤彩	貯蔵穴
3	壺		6.0		2/3	B	磨き・赤彩	剝落詳細不明	貯蔵穴
4	高坏	33.3	22.1	33.5	2/3	B	磨き・赤彩三角形透孔	坏部：磨き・赤彩 脚部：ハケ→ナデ	貯蔵穴
5	片口	9.8	4.8	11.5	完	C	ハケ→磨き　底部：磨き	ハケ→磨きｏｒナデ	覆土
6	高坏	14.7			1/5	C	磨き・赤彩	坏部：磨き・赤彩 脚部：ハケ→ナデ	貯蔵穴
40号住居址									
1	壺	20.1			1/3	B	磨き・赤彩	磨き・赤彩	床
2	高坏	24.3			1/6	B	磨き・赤彩	磨き	床
41号住居址									
1	壺	30.2			1/4	C	磨き・赤彩	磨き・赤彩	床
2	壺				1/6	B	口縁：ハケ→磨き・赤彩 頸部：２本一対のＴ字文	ハケ→磨き・赤彩	床
3	壺				1/3	C	磨き・赤彩	ナデ	床
4	甕	15.7	6.6	24.7	完	C	口縁：横ナデ　胴部：右下がりハケ→左下がりハケ 底部：ケズリ→ナデ	口縁：横ナデ 胴部：ケズリ→ナデ	床
5	甕		5.0		3/4	A	胴部：ハケ→ナデ　底部：輪台技法	ケズリ	床
6	甕	11.6			1/6	D	口唇：面取り→櫛波状文　口縁：櫛波状文　頸部：２連止め簾状文 胴部：櫛波状文	磨き	覆土
7	蓋	13.0		6.1	1/3	C	つまみ部：指頭押捺→ナデ　体部：磨き	ナデ	床
42号住居址									
1	壺	11.8	5.2	24.5	4/5	B	磨き・赤彩 底部：ケズリ	口縁：磨き・赤彩 胴部：ハケ→ナデ	床
2	壺		7.4		1/3	B	磨き・赤彩 底部：ケズリ→磨き・赤彩	ハケ→ナデ	床
3	甕	11.4			1/6	D	口縁：櫛波状文２（下→上）　頸部：２連止め簾状文 胴部：櫛波状文３（上→下）　ハケ	ハケ→磨き	床
4	甕	10.6			3/4	D	口縁：櫛波状文（下→上）　頸部：２連止め簾状文 胴部：櫛波状文３（上→下）　磨き	磨き	床
5	甕	24.0			1/4	D	口縁：櫛波状文（下→上）	磨き	床
6	甕	19.3			2/3	D	口縁：櫛波状文３（上→下）　端部：施文後横ナデ 頸部：２連止め簾状文　胴部：櫛波状文（上→下）	ハケ→磨き	床
7	甕	14.6			1/3	C	口縁：櫛波状文４（下→上）　頸部：等間隔止め簾状文 胴部：櫛波状文４（上→下）	ハケ→磨き	床
8	蓋	12.2			2/3	D	ハケ→磨き・赤彩	ナデ→磨き	床

表6　出土土器観察表③

番号	器種	法量（cm）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
45号住居址									
1	壺	18.4			完	B	口縁：磨き・赤彩　頸部：櫛直線　文	磨き・赤彩	床
2	甕	20.0			1/3	C	口縁：櫛波状　文3　頸部：2連 止め簾状　文胴部：櫛波状　文2	磨き	床
3	坏	8.8	4.4	4.6	完	C	磨き・赤彩　底部：磨き・赤彩	磨き・赤彩	床
52号住居址									
1	甕	23.0			1/8	C	口縁：櫛波状　文4（下→上）　頸部：櫛直線　文 胴部：櫛波状　文(上→下)	ハケ→磨き	床
2	甕	26.0			1/8	C	口縁：櫛波状　文4(下→上)　頸部：3連 止め簾状　文	ハケ→磨き	床
58号住居址									
1	壺		12.1		5/6	B	頸部：2連止め簾状　文 胴上部：櫛波状　文5(上→下) 胴下部：磨き→焼成後赤彩	ナデ→磨き	集石上
2	甕	15.0			1/4	C	口縁：櫛波状　文3　頸部：2連 止め簾状　文胴部：櫛波状　文4(上→下)	磨き	集石上
3	甕	14.1	5.5	19.5	1/3	D	口縁：櫛波状　文2(下→上)　頸部：2連 止め簾状　文 胴部：櫛波状　文3(上→下)　→磨き	磨き	集石上
4	台甕	11.9	7.2	17.7	3/4	D	口縁：櫛波状　文2(下→上)　頸部：2連 止め簾状　文 胴部：櫛波状　文3(上→下)　脚部：磨き	胴部：ハケ→磨き 脚部：ハケ→ナデ	集石上
5	甕		6.9		1/4	B	磨き	ハケ→磨き	集石上
6	甑	13.3	3.5	6.9	1/2	B	ケズリ→磨き	ハケ→磨き	集石上
7	蓋	17.2		8.3	1/3	C	ハケ→磨き	ハケ→ナデ	集石上
8	坏	12.3	3.3	6.6	1/3	B	磨き・赤彩　底部：ケズリ→磨き	磨き・赤彩	集石上
9	高坏	24.6			3/4	B	磨き・赤彩　口唇：山形突起4　脚部：三角形透孔4	磨き・赤彩	集石上
10	高坏	25.0			1/2	B	磨き・赤彩	磨き・赤彩	集石上
61号住居址									
1	壺				2/3	B	口縁：磨き・赤彩　頸部：櫛直線　文	磨き・赤彩	床
2	甕	10.9	4.4	10.8	完	C	口縁：櫛波状文2　頸部：等間隔　止め簾状　文胴部：櫛波状　文1 磨き	ハケ→磨き	床
3			6.6		1/2	D	胴部：櫛波状　文(上→下) ハケ→磨き　底部：ケズリ→ナデ	ハケ→磨き	床
4	高坏	18.0	9.1	13.7	1/3	B	磨き・赤彩	磨き・赤彩	床
5	壺	25.1			1/4	B	磨き・赤彩	磨き・赤彩	集石上
6	壺				1/3	C	口縁：磨き　頸部：櫛直線　文胴部：ハケ→磨き	口縁：磨き・赤彩	集石上
7	壺		7.9		2/3	B	磨き・赤彩	剥落詳細不明	集石上
8	甕	12.0			1/3	C	口縁：櫛波状　文3(下→上)　頸部：2連 止め簾状　文 胴部：櫛波状　文3(上→下)	磨き	集石上
9	甕	15.3			1/2	C	口縁：櫛波状　文2(下→上)　頸部：等間隔　止め簾状　文 胴部：櫛波状　文2(上→下)	ハケ→磨き	集石上
10	甕		4.5		完	C	口縁：櫛波状　文 頸部：多連 止め簾状　文 胴部：櫛波状文2（上→下）→ 磨き　底部：ケズリ→ナデ	ハケ→磨き	集石上
11	甕	14.2			1/3	A	口唇：面取り→ナデ　口縁：ナデ　胴部：斜ハケ	ハケ→ナデ	集石上
12	甕	18.2			1/6	D	口縁：ナデ　胴部：ハケ？	ハケ→ナデ	集石上
13	甕		5.8		1/4	C	胴部：櫛波状　文 ケズリ→磨き　底部：ケズリ→ナデ	ハケ→ナデ→磨き	集石上
14	蓋	16.1		7.1	1/3	B	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	集石上
15	坏	9.3	5.1	6.9	4/5	C	ハケ→ナデ　底部：ナデ	ハケ→ナデ	集石上
16	高坏	30.0			1/3	B	口唇：ナデ　磨き・赤彩	磨き・赤彩	集石上
17	高坏	24.4			1/4	B	磨き・赤彩　2連 止め簾状　文	磨き・赤彩	集石上
18	高坏		12.2		完	C	磨き・赤彩	磨き・赤彩	集石上
19	器台		21.8		1/4	B	磨き・赤彩　擬凹線　文 円形透孔	ナデ	集石上
67号住居址									
1	壺	27.4			1/3	C	口縁：磨き・赤彩　頸部：櫛T字　文 胴部：磨き・赤彩	磨き・赤彩　ハケ	床

表7　出土土器観察表④

番号	器種	法量（cm）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
71号住居址									
1	甕	17.0	5.3	19.4	3/4	D	口縁：櫛波状文4（下→上）　頸部：等間隔止め簾状文 胴部：櫛波状文3（上→下）→磨き	口縁：磨き 胴部：ハケ→磨き	床
2	甕	21.0			完	D	口縁：櫛波状文3（下→上）　頸部：等間隔止め簾状文 胴部：櫛波状文3（上→下）→磨き	磨き	床
3	甕	12.8	4.0	12.2	1/2	D	口縁：櫛波状文3（上→下）　胴部：櫛波状文3（上→下）	磨き	床
4	甕		6.5		3/4	D	胴部：櫛波状文（上→下）　胴部：櫛波状文3（上→下）	磨き	床
5	高坏	15.8			完	B	磨き・赤彩	磨き・赤彩	床
6	高坏	13.6			1/2	B	磨き・赤彩	磨き・赤彩　円板充填	床
7	坏	17.0	5.4	7.7	1/2	B	磨き・赤彩　底部：ケズリ→ナデ	磨き・赤彩	床
77号住居址									
1	壺	27.1			1/3	B	口縁：磨き・赤彩　頸部：櫛直線文	磨き・赤彩	覆土
2	壺				2/3	C	口縁：磨き・赤彩　頸部：櫛T字文	磨き・赤彩　ナデ	床
3	壺		9.3		1/3	B	磨き・赤彩	ハケ→ナデ	覆土
4	台甕	11.8			3/4	B	口縁：櫛波状文2（下→上）　頸部：4連止め簾状文 胴部：櫛波状文（上→下）→磨き	磨き	床
5	蓋	14.0		5.9	2/3	D	ハケ→磨き	ハケ→磨き	床
6	高坏		10.0		完	B	磨き・赤彩　三角形透孔4	ナデ	床
7	高坏		15.2		1/4	B	磨き・赤彩　三角形透孔	ナデ	床
84号住居址									
1	甕	10.0			2/3	B	口縁：櫛波状文2（下→上）　頸部→2連止め簾状文 胴部：櫛波状文2（上→下）→磨き	磨き	覆土
2	坏	18.5	5.3	10.0	完	B	磨き・赤彩　底部：ケズリ→ナデ	磨き・赤彩	貯蔵穴
85号住居址									
1	壺	22.5			2/3	B	口縁：磨き・赤彩　頸部：櫛T字文	磨き・赤彩	床
2	甕	20.5			1/3	C	口縁：櫛波状文2（下→上）　頸部：3連止め簾状文 胴部：櫛波状文（上→下）	磨き	床
3	台甕	14.8			完	C	口縁：櫛波状文2（下→上）　頸部：3連止め簾状文 胴部：櫛波状文（上→下）→磨き	胴部：磨き 脚部：ハケ→ナデ	床
4	台甕	13.4			3/4	C	口縁：櫛波状文1　頸部：2連止め簾状文　胴部：櫛波状文2→磨き	磨き	床
5	蓋	10.4			1/3	D	磨き	ナデ	床
6	蓋	13.1			1/2	D	ハケ→磨き	ハケ→磨き	床
7	高坏	23.3			1/3	B	磨き・赤彩	磨き・赤彩	柱穴
87号住居址									
1	壺		9.4		1/3	B	磨き・赤彩　底部：ケズリ→ナデ	ハケ→ナデ	覆土
2	壺				1/3	B	磨き・赤彩	ハケ→ナデ	覆土
3	壺		7.0		3/4	D	磨き・赤彩	ナデ	覆土
4	台甕	9.6			4/5	C	口縁：櫛波状文2（下→上）　頸部：等間隔止め簾状文 胴部：ハケ→磨き	ハケ→磨き	覆土
5	甕	14.4			1/2	B	磨き	磨き	覆土
6	蓋	14.4		5.8	1/2	B	磨き	磨き	覆土
7	甑	22.6	5.3	13.9	1/2	B	ハケ→磨き　底部：ケズリ　焼成前穿孔1	ハケ→磨き	覆土
8	甑	12.7	5.0	8.5	3/4	B	磨き　底部：磨き　焼成前穿孔1	ハケ→磨き	覆土
9	甑	23.8	4.8	11.2	1/3	B	ハケ→ケズリ？　底部：ケズリ　焼成前穿孔1	ハケ→ナデ	覆土
10	坏	19.5			1/3	B	磨き・赤彩	磨き・赤彩	覆土
11	坏	9.0	3.8	4.2	完	B	磨き・赤彩　底部：磨き	磨き・赤彩	覆土
12	高坏		14.4		1/3	B	磨き・赤彩	ハケ→ナデ	覆土

表８　出土土器観察表⑤

番号	器種	法量（㎝）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
87号住居址									
13	高坏	21.1			1/4	B	磨き・赤彩	磨き・赤彩	覆土
90号住居址									
1	壺				3/4	C	口縁：磨き・赤彩　頸部：櫛Ｔ字文　円形浮文　胴部：磨き・赤彩	口縁：磨き・赤彩 胴部：ハケ→ナデ	覆土
2	壺		7.0		3/4	C	磨き・赤彩　底部：ケズリ	ハケ	覆土
3	甕	21.8			1/2	D	口縁：櫛波状文３（下→売り）　頸部：２連止め簾状文 胴部：櫛波状文（上→下）	ハケ→磨き	覆土
4	台甕	16.6			1/3	D	口縁：櫛波状文　頸部：３連止め簾状文　胴部：櫛波状文４（　上下）	磨き	覆土
5	高坏	22.0	12.3	22.3	2/3	D	口縁：山形突起４　ハケ→磨き・赤彩	ハケ→磨き・赤彩	覆土
100号住居址									
1	壺	26.8			2/3	C	口縁：磨き・赤彩　頸部：篦Ｔ字文　竹管連続刺突　胴部：磨き　赤彩	口縁：磨き・赤彩	床
2	壺	27.2			3/4	B	口縁：磨き・赤彩　頸部：篦切りＴ字文	口縁：磨き・赤彩	床
3	壺	13.7			1/4	B	磨き・赤彩	磨き・赤彩　ハケ	床
4	壺	15.6			3/4	C	口縁：磨き　頸部・櫛Ｔ字文　胴部：磨き	摩耗調整不明	床
5	壺		10.0		3/4	C	磨き・赤彩　底部：ケズリ→ナデ	ハケ→ナデ	床
6	鉢	8.9	5.2	8.2	1/3	B	磨き・赤彩　底部：ケズリ→ナデ	磨き・赤彩	床
7	高坏	36.8			1/4	B	磨き・赤彩	坏部：磨き・赤彩 脚部：シボリ→ケズリ	床
8	高坏	13.7			4/5	B	磨き・赤彩	ナデ	床
105号住居址									
1	壺	21.6			完	C	口縁：磨き・赤彩　頸部：櫛Ｔ字文　胴部：磨き・赤彩	磨き・赤彩　ハケ	床
2	甕	17.8			1/3	C	口縁：横ナデ　胴部：ハケ	横ナデ　ハケ	床
110号住居址									
1	壺				1/3	B	磨き　櫛直線文４	磨き・赤彩	床
2	甕	15.4			1/3	B	口縁：櫛波状文３（下→上）　頸部：２連止め簾状文 胴部：櫛波状文（上→下）	ハケ→磨き	床
3	蓋				1/3	B	磨き	磨き	床
4	壺				3/4	C	櫛Ｔ字文　磨き・赤彩	ハケ	床
5	甕	18.2	6.3		1/2	B	口縁：擬凹線文　胴部：ハケ	口縁：ナデ 胴部：ハケ	床
遺構外出土弥生土器									
1	甕	17.6			1/2	D	口縁：櫛波状文４（下→上）　頸部：３連止め簾状文 胴部：櫛波状文４（上→下）→磨き	磨き	ＳＢ15
2	脚付鉢	18.7			1/3	C	口縁：擬凹線文（櫛）　脚部：磨き・赤彩	鉢：磨き・赤彩 脚部：ケズリ→ナデ	
3	甕	16.5			1/10	C	口縁：擬凹線文（櫛）　胴部：ナデ	口縁：ナデ	ＳＢ15
4	甕	16.2			1/10	C	口縁：擬凹線文（櫛）　胴部：ナデ	胴部：ケズリ	ＳＢ15
5	甕	16.4			1/10	B	口縁：ナデ　胴部：ケズリｏｒハケ	胴部：ハケ	ＳＢ15
6	壺	17.0			1/10	B	磨き・赤彩	磨き・赤彩	ＳＢ15
7	甕	12.4			1/6	D	口縁：ナデ　胴部：櫛波状文	胴部：ナデ	
8	甕					B	口縁：ナデ→櫛状工具先端刺突	胴部：ハケ	ＳＢ15

表9　出土土器観察表⑥

番号	器種	法量（cm）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
46号住居址									
1	壺	13.4			完	C	口縁：ハケ→磨き　胴部：磨き	口縁：磨き　胴部：ナデ	覆土
2	坩	11.8		5.9	3/4	C	口縁：ハケ→磨き　胴部：ケズリ→磨き	ハケ→磨き	覆土
3	器台	10.4			2/3	B	磨き	磨き	覆土
106号住居址									
1	台甕	16.4	7.0		3/4	C	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ→ケズリ　脚部：ナデ	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ→ナデ	床
2	台甕	12.6	8.4	19.8	3/4	D	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ→ケズリ　脚部：ナデ	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ナデ	床
3	甕	12.7			1/4	D	口縁：ハテ→ナデ　胴部：ナデ	ナデ	床
4	台甕		7.2		3/4	C	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	床
5	甑	13.8		6.8	完	C	口縁：ナデ→磨き　底部：ケズリ→磨き　焼成前穿孔	ナデ	床
5号住居址									
1	甕	16.0		28.4	4/5	D	口縁：ナデ　胴部：ハケ　底部：ハケで丸底化	口縁：ヨコナデ　胴部：ハケ→ナデ	覆土
2	壺	11.0	6.1	15.4	3/4	C	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデｏｒ磨き	口縁：ハケ→ナデ　胴部：篦ナデ→ナデ	覆土
3	壺	11.5			3/4	D	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ→ナデ	口縁：ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	覆土
4	甕	16.0	7.0	29.1	完	C	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ　底部：ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	覆土
5	甕	13.7			1/2	D	口縁：横ナデ　胴部：磨き	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	覆土
6	高坏	15.9			完	C	横磨き	放射状の磨き→黒色処理	覆土
7	高坏	14.8	10.1	11.4	3/4	C	坏部：ハケ→磨き　脚部：ハケ	坏部：磨き→黒色処理　脚部：ナデ	覆土
8	高坏	18.9	11.8	13.1	完	C	坏部：磨き　ケズリ　脚部：磨き	坏部：磨き　脚部：篦ナデ→ナデ	覆土
9	坏	15.0		5.5	1/2	C	坏部：磨き　底部：ハケ→磨き	磨き？	覆土
10	坏	15.9		6.4	完	D	坏部：磨き　底部：ケズリ→磨き	磨き	覆土
11	坏	15.5		5.4	1/2	C	磨き	磨き→黒色処理	覆土
12	坏	16.3		6.1	完	C	坏部：磨き　屈曲部に段を意識した沈線	磨き	覆土
13	器台	30.0			1/6		櫛波状文　平行タタキ→擦り消し　長方形透孔5	回転ナデ	覆土
12号住居址									
1	壺	15.7			1/3	B	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→磨き	口縁：ハケ→磨き　胴部：ハケ	覆土
2	壺	18.4			1/10	C	口唇：面取り→ナデ　口縁：横ナデ	口縁：ナデ　胴部：ユビオサエ	覆土
3	甕	17.8			1/3	B	口縁：横ナデ　胴部：ハケ	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ→ナデ	覆土
4	甕	18.5			1/4	B	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	口縁：横ナデ　胴部：篦ナデ→ナデ	床
5	坩	8.6		7.3	3/4	B	口縁：横ナデ　胴部：ハケ・ケズリ→ナデ	口縁：横ナデ　胴部：篦ナデ	床
6	坩	9.4			1/2	C	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	貯蔵穴
7	甑	16.3	4.8	9.8	2/3	C	口縁：折返し・指頭押捺　胴部：ケズリ→ナデ	篦ナデ→ナデ	床
8	高坏	14.8			完	C	坏部：ナデ・ハケ→磨き	磨き	貯蔵穴
9	高坏	17.8			4/5	B	坏部：横ナデ・ハケ→磨き	磨き	貯蔵穴
10	高坏	15.8			完	C	口唇：面取り→ナデ　坏部：ハケ→磨き	磨き	貯蔵穴
11	高坏	16.6			4/5	B	ナデ→磨き	磨き	床
12	椀	13.2		8.1	完	B	口縁：ハケ→ナデ　体部：ケズリ→磨き	篦ナデ→ナデ→磨き	床
13	坏	14.7		6.8	完	C	口縁：ナデ　体部：ケズリ→ナデ　底部：ケズリ	口縁：ナデ→磨き　体部：篦ナデ→磨き	貯蔵穴
14	坏	13.7			完	B	体部：磨き　底部：ケズリ→磨き	磨き	貯蔵穴
13号住居址									
1	甕	16.2			1/8	C	口唇：面取り→ナデ　口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ	床
2	坏	14.0		5.9	1/2	D	口縁：磨き　体部：ケズリ→磨き	磨き	床
3	坏	13.5		4.8	完	D	坏部：横ナデ→横磨き　底部：ケズリ→磨き	横磨き	

表10　出土土器観察表⑦

番号	器種	法量（cm）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
13号住居址									
4	坏	12.8			2/3	B	磨き	磨き	床
5	高坏	17.5	13.5	12.2	2/3	B	坏部：磨き　脚部：磨き	坏部：磨き　脚部：ケズリ→ナデ	床
6	高坏	15.5			3/4	B	坏部：ハケ→磨き　脚部：ハケ→磨き	坏部：ハケ→磨き　脚部：ナデ	床
7	高坏	17.0			完	C	磨き	摩耗調整不明	床
8	高坏	15.6			2/3	C	坏部：ハケ→磨き	磨き	貯蔵穴
9	高坏		16.6		3/4	B	磨き	ナデ	床
14号住居址									
1	甕	18.7			1/10	D	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ケズリ	覆土
2	坩	7.1	3.2	6.9	3/4	B	ハケ→ナデｏｒ磨き	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ナデ	床
3	坩	9.3		8.2	3/4	D	ハケ→ナデ→磨き	横ナデ→ナデ	床
4	坩	9.1		8.2	2/3	C	ナデ　焼成後穿孔１	口縁：磨き　胴部：ナデ	床
5	坩	9.5		6.4	1/3	B	摩耗調整不明	摩耗調整不明	床
6	坏	13.8		7.0	2/3	B	坏部：横磨き　底部：ケズリ→磨き	磨き	床
7	坏	14.0		4.9	1/2	C	ハケ→横磨き	横磨き	床
8	坏	15.6		5.4	1/2	B	口縁：横ナデ　坏部：磨き	口縁：ナデ→横磨き　坏部：磨き	床
9	坏	15.1		6.9	完	B	磨き	磨き	覆土
10	坏	16.4		6.6	3/4	B	口縁：横ナデ　坏部：ケズリ→ナデ　底部：ハケ	ハケ・篦ナデ→ナデ	覆土
11	坏	11.8		5.9	1/2	B	口縁：横ナデ→磨き　坏部：ケズリ→横磨き	暗文状の磨き	覆土
12	器台	13.3	11.2	11.6	完	B	器受部：ハケ→ナデ　脚部：ハケ→ナデ	器受部：ハケ→ナデ　脚部：シボリ→ナデ	床
13	高坏	22.3	15.5	14.5	完	C	坏部：ハケ→磨き　脚部：ハケ→磨き	坏部：磨き　脚部：ケズリ→ナデ	床
14	高坏	17.1	13.1	13.9	3/4	C	坏部：ナデ→磨き　脚部：磨き	坏部：磨き　脚部：ケズリ→ナデ	床
15	高坏	17.0			完	C	磨き	磨き	覆土
16	高坏	21.1			1/3	B	ハケ→磨き	磨き	床
17	高坏	20.5			完	C	ハケ→磨き	磨き	床
18	高坏	21.1			1/3	C	磨き	磨き	覆土
19	高坏		13.2		完	B	ハケ→磨き	ナデ	床
20	高坏	16.0			完	C	磨き	ハケ→磨き	覆土
21	高坏	18.4			1/2	B	縦磨き	摩耗調整不明	床
15号住居址									
1	甕	17.2			1/4	B	口縁：横ナデ→磨き　胴部：ハケ→磨き	口縁：ナデ　胴部：篦ナデ→ナデ	カマド
2	鉢	15.6		10.1	1/2	C	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ　底部：ハケ→ケズリ	ハケ→ナデ	床
3	鉢	12.3	2.4	10.4	3/4	C	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ　底部：ケズリ	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ナデ	床
4	甑	21.7		14.0	2/3	B	口縁：ナデ　胴部：ハケ　底部：ケズリ　焼成前穿孔	ハケ→磨き	カマド
5	高坏	15.7			完	B	縦磨き	磨き	柱穴
6	高坏	14.5			完	B	坏部：ハケ→磨き　脚部：縦磨き	ハケ→磨き	支脚
7	坏	17.0			1/3	C	摩耗調整不明	横磨き	床
8	鉢	17.6			1/3	B	口唇：面取り　体部：磨耗調整不明	覆土	
9	坏	15.2		6.5	完	C	横磨き　底部：「x」状の篦記号	磨き→黒色処理	床
10	坏	15.1		5.4	3/4	B	磨き　摩耗詳細不明	磨き　摩耗詳細不明	カマド
11	坏	15.5			1/3	C	口縁：横磨き　底部：横磨き	縦磨き	床
12	坏	12.4		5.2	完	C	磨き	磨き	貯蔵穴

表11　出土土器観察表⑧

番号	器種	法量（cm）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
17号住居址									
1	甕	20.0			2/3	C	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデ	口縁：ナデ　胴部：ナデ	覆土
2	高坏				3/4	C	縦磨き	シボリ →ナデ	床
3	高坏	16.4			3/4	C	口縁：縦磨き　坏部：ハケ→磨き	磨き	床
26号住居址									
1	甕	18.0			3/4	C	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	床直
2	甕	19.2			1/3	B	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ	床直
3	甕	18.1			2/3	C	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ	床直
4	甕	18.2		27.0	完	C	口縁：横ナデ　胴部：ハケ　底部：ハケ	ナデ・ケズリ	床直
5	高坏	17.3			2/3	C	縦磨き	斜め磨き	床直
6	高坏	15.4			完	B	縦磨き	斜め磨き	床直
7	高坏	16.8			1/3	C	縦磨き	縦磨き	床直
8	高坏	17.0			完	CD	縦磨き	縦磨き	床直
9	高坏	14.9			完	BC	磨き	磨き	床直
10	高坏				1/2	B	縦磨き	シボリ・ケズリ	床直
11	高坏		11.8		完	B	縦磨き	ケズリ	床直
27号住居址									
1	甕	17.2	4.7	20.5	1/2	D	口縁：横ナデ　胴部：ハケ　底部：ケズリ →ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデ	カマド
2	壺	16.8			完	B	口縁：横磨き　胴部：縦磨き	横磨き	カマド
3	壺	8.0		13.9	完	B	口縁：縦磨き　胴部：ハケ→磨き　底部：　き磨	口縁：磨き　胴部：ナデ	床
4	甕	16.3			1/2	C	口縁：横ナデ　胴部：ハケ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ	床
5	甕	15.6			1/4	D	口縁：横ナデ　胴部：ハケ	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ	床
6	甕	12.7			1/2	B	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	床
7	甕		3.8		2/3	D	胴部：横ナデ　底部：ハケ→ケズリ →ナデ	ハケ→ナデ	床
8	高坏	16.8	13.0	13.6	2/3	C	坏部：縦磨き　脚部：縦磨き	坏部：磨き　脚部：ナデ	柱穴
9	高坏	16.1	12.6	12.7	完	C	坏部：縦磨き　脚部：縦磨き	坏部：磨き　脚部：ケズリ→ナデ	カマド
10	高坏	16.2			3/4	B	摩耗調整不明	摩耗調整不明	床
11	高坏	15.2			1/3	D	ハケ→縦磨き	ハケ→磨き	カマド
12	高坏	16.5			2/3	C	口縁：横ナデ→磨き　坏部：斜め磨き	横磨き	床
13	椀	11.1			2/3	C	口縁：横ナデ　体部：ハケ→磨き	磨き	柱穴
14	坏	12.8		6.8	3/4	D	口縁：横ナデ→磨き　坏部：ケズリ →磨き	磨き→黒色処理	
15	坏	13.0		5.1	1/2	C	ケズリ →磨き	磨き	床
16	坏	12.7		4.0	完	B	磨き	磨き	カマド
17	坏	8.4	4.3	5.5	1/2	B	ナデ	篦ナデ→ナデ	覆土
18	坏	3.2	3.0	3.1	1/2	B	ナデ	ナデ	床
19	ミニ	3.7	1.5	2.8	2/3	C	ナデ	ナデ	床
20	高坏	15.2			1/8		回転ナデ→回転ケズリ　櫛波状文	回転ナデ	覆土
21	甕	20.0			1/10		回転ナデ	回転ナデ	覆土
30号住居址									
1	甕	18.4	5.2	29.4	4/5	C	口縁：横ナデ　胴部：ハケ・ケズリ→ナデ	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ	床
2	甕	17.1	4.8	24.5	2/3	C	口縁：横ナデ　胴部：ハケ・ケズリ　底部：凹み底	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ→ナデ	床
3	甕	17.1			3/4	B	口縁：横ナデ　胴部：斜めケズリ →ナデ	口縁：ナデ　胴部：ナデ	床
4	高坏	17.1			完	B	ナデ→磨き	磨き	床

表12　出土土器観察表⑨

番号	器種	法量（cm）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
30号住居址									
5	高坏	12.4			完	C	ハケ→縦磨き	縦磨き	床
6	高坏	18.4	15.2	13.9	完	C	坏部：縦磨き　脚部：縦磨き	坏部：磨き　脚部：ハケ・篦ナデ→ナデ	床
7	椀	13.8			1/3	B	口縁：横ナデ　体部：ハケ→ナデ	口縁：横磨き　体部：縦磨き	床
8	蓋	14.6		5.5	完	B	口縁：横ナデ→磨き　天井部：ケズリ→磨き	ナデ	カマド
9	坏	12.0		3.4	完	C	横磨き	横磨き	柱穴
10	坏	10.0		4.2	2/3	C	口縁：横磨き　底部：ハケ→磨き	磨き	覆土
11	坏	11.2	2.9	6.1	2/3	C	坏部：磨き　底部：ケズリ→磨き	摩耗調整不明	覆土
12	坏	13.0		5.3	1/2	B	口縁：横ナデ→横磨き　底部：ケズリ→磨き	横磨き	床
13	坏	14.5		5.6	2/3	C	口縁：ナデ→磨き　底部：ケズリ→磨き	磨き	床
14	坏	13.4		6.1	完	B	体部：横磨き　底部：ケズリ→磨き	磨き	床
31号住居址									
1	甕	17.7		29.9	1/2	C	口唇：面取り　口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	床
2	甕	19.1			1/6	B	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	カマド
3	甕	15.4			1/6	C	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデ	口縁：横ナデ　胴部：摩耗調整不明	柱穴
4	壺	8.7			1/4	B	ハケ→縦磨き	横磨き	床
5	壺	8.0			3/4	C	磨き？（摩耗不明）	横磨き	床
6	甕	16.7			1/3	C	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	床
7	高坏	18.7			完	C	口縁：ハケ→縦磨き　坏部：ハケ→磨き　脚部：磨き	坏部：ハケ→横磨き　脚部：ケズリ→ナデ	カマド
8	高坏	15.5			1/2	D	口縁：ハケ→縦磨き　坏部：ハケ→磨き	ハケ→縦磨き	床
9	台鉢		5.0		1/3	D	体部：縦磨き　脚部：縦磨き	体部：斜め磨き　脚部：ナデ	床
10	高坏	14.9	11.3	9.4	完	C	坏部：横磨き　脚部：縦磨き	坏部：斜め磨き　脚部：ハケ→ナデ	カマド
11	鉢	10.0		7.8	完	C	口縁：横磨き　胴部：横磨き　底部：ケズリ→磨き	横磨き→黒色処理	床
12	椀	10.1		6.7	1/2	B	口縁：横ナデ→横磨き　胴部：横磨き　底部：ケズリ	横磨き→黒色処理	床
13	坏	14.0			1/2	B	口縁：横ナデ→横磨き　底部：ハケ→横磨き	口縁：横磨き　底部：斜め磨き	床
14	坏	16.3			1/4	C	横磨き	口縁：横磨き　体部：縦磨き	床
15	坏	13.4			1/3	C	ケズリ→横磨き	横磨き	床
16	坏	16.1			1/4	B	摩耗調整不明	磨き	床
17	甕	18.8			1/8		回転ナデ　貼付け突帯	回転ナデ	床
18	壺	8.8		8.1	1/4		口縁～胴部：回転ナデ　底部：静止ケズリ	回転ナデ	床
19	甕	9.0			1/8		回転ナデ	回転ナデ	床
20	坏	10.6		4.7	1/2		回転ナデ　回転ケズリ	回転ナデ	床
36号住居址									
1	壺	11.8		13.7	2/3	B	口縁：横ナデ→縦磨き　胴部：ケズリ→磨き	口縁：縦磨き　胴部：ハケ→ナデ	柱穴
2	壺	16.0			2/3	C	口縁：横ナデ　胴部：ハケ	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	床
3	壺	14.6	6.5	12.1	2/3	D	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ　底部：ケズリ	口縁：ナデ　胴部：ハケ	床
4	椀	13.5		7.9	完	C	口唇：面取り　胴部：横磨き　底部：ケズリ→磨き	口縁：横磨き　胴部：磨き	柱穴
5	椀	13.5		10.0	完	B	口縁：横ナデ　胴部：ハケｏｒケズリ→磨き	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデ	柱穴
6	高坏	14.1	13.6	13.6	1/2	B	口唇・脚端部：面取り　坏部：磨き　脚部：磨き	坏部：磨き　脚部：シボリ→ナデ	床
7	高坏	17.1	11.9	11.4	完	C	口唇：面取り　坏部：指頭押捺→磨き　脚部：磨き	坏部：横磨き　脚部：ケズリ→ナデ	床
8	高坏	16.4			完	BC	縦磨き	磨き	床
9	高坏	18.7			1/3	CD	口唇：面取り→ナデ　坏部：縦磨き	磨き	床
10	甕	23.4			3/4	B	口唇：面取り　口縁：横ナデ　胴部：ケズリ→磨き	口縁：横磨き　胴部：横磨き	集石上

表13　出土土器観察表⑩

番号	器種	法量（cm）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
36号住居址									
11	椀	12.0		8.5	1/2	B	ナデ→磨き　楕円形浮文1	口縁：横磨き　胴部：ハケ→磨き	集石上
12	椀	8.6		7.5	1/2	BC	口縁：横磨き　胴部：ケズリ→磨き	口縁：横磨き　胴部：ナデ	集石上
13	坏	12.5		5.7	完	B	口縁：横ナデ→横磨き　体部：ケズリ→磨き	磨き→黒色処理	集石上
14	坏	14.9		6.4	2/3	C	口縁：横ナデ→横磨き　体部：ケズリ→磨き	横磨き	集石上
15	坏	14.8		6.3	完	B	口縁：横磨き　体部：ケズリ→横磨き	横磨き→黒色処理	集石上
16	高坏	14.0			2/3	BC	横磨き	横磨き	集石上
17	高坏	12.4	8.8	9.9	3/4	BC	口縁：横ナデ→横磨き　坏部：横磨き	坏部：磨き　脚部：篦ナデ→ナデ	集石上
18	高坏	20.8			3/4	B	横磨き	縦磨き	集石上
19	高坏	15.7	9.8	9.8	3/4	C	坏部：磨き　脚部：磨き	坏部：磨き→黒色処理　脚部：ナデ	集石上
37号住居址									
1	甕	17.0	5.6	27.4	完	C	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	カマド
2	甕	16.4			2/3	BC	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ→磨き	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ	カマド
3	甕	16.8			完	CD	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：斜めハケ	口縁：ハケ　胴部：ナデ	カマド
4	蓋	15.1		7.9	2/3	B	横ナデ　つまみ部：指頭押捺→ナデ	ナデ	床
5	甑	17.6		13.9	1/3	CD	口唇：面取り　胴部：ハケ　底部：焼成前穿孔	斜めハケ→ケズリ	カマド
6	高坏	14.4	12.4	13.1	3/4	BC	坏部：ナデ・ハケ→磨き　脚部：縦磨き	坏部：磨き　脚部：ナデ	覆土
7	高坏	20.3			完	B	坏部：ハケ→ナデ→磨き　脚部：縦磨き	坏部：ハケ→磨き　脚部：ナデ	支脚
8	高坏	16.8			4/5	CD	坏部：横磨き	磨き	床
9	高坏	16.5			完	B	縦磨き	斜め磨き	カマド
10	高坏	15.1			完	BC	ナデ・ハケ→磨き	ハケ→磨き	カマド
11	高坏	17.7			完	CD	縦磨き	縦磨き	床
12	椀	8.3		6.3	4/5	B	口縁：横ナデ　脚部：ハケ→磨き	ナデ	覆土
13	坏	12.8		4.5	1/3	CD	口縁：横ナデ　体部：ハケ→ナデ	磨き	覆土
14	坏	12.9		4.0	1/3	B	口縁：横ナデ　体部：ハケ	磨き	床
15	坏	12.4		4.9	2/3	D	口縁：横ナデ→横磨き　体部：磨き	横磨き	カマド
16	坏	13.4		6.2	4/5	CD	縦磨き	磨き（摩耗詳細不明）	柱穴
17	坏	13.4		6.0	1/3	B	口縁：横ナデ→磨き　体部：ケズリ→磨き	磨き	床
18	坏	14.8		5.1	3/4	BC	体部：横磨き　底部：ケズリ→磨き	磨き	覆土
19	坏	10.2		5.5	3/4	B	口縁：横ナデ→磨き　体部：ハケ→磨き　底部：磨き	ハケ→横磨き	床
20	坏	10.2	4.2	4.6	3/4	BC	体部：横ナデ→横磨き　底部：磨き	磨き→黒色処理	床
21	ミニ	3.7		5.1	完	CD	ユビナデ	ユビナデ	床
39号住居址									
1	甕	16.5	4.9	20.8	完	C	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ→ナデ	口縁：ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	床
2	坏	13.3		6.9	完	CD	口縁：横ナデ→横磨き　底部：ケズリ→磨き	横磨き	床
3	坏	14.0		6.4	4/5	CD	ケズリ→磨き　底部：「x」状の篦記号	横磨き	床
4	高坏	17.5			完	BC	坏部：ハケ→磨き	ハケ→磨き	床
44号住居址									
1	坏	17.0		6.1	完	B	口縁：横ナデ→横磨き　体部：横磨き	口縁：横磨き　体部：斜め磨き	床
2	坏	19.4		6.7	2/3	C	口縁：ナデ→磨き　体部：ハケ→磨き　底部：ケズリ	横磨き	床
3	坏	13.6		6.1	1/2	B	体部：横磨き　底部：ケズリ→磨き	横磨き	柱穴
4	坏	11.6			1/4	C	体部：横ナデ→磨き　底部：ケズリ→磨き	篦ナデ→磨き	床
5	坏	10.6			1/3	B	口縁：横ナデ→磨き　底部：ハケ→磨き	磨き	床

表14　出土土器観察表⑪

番号	器種	法量（cm）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
44号住居址									
6	高坏	17.1			1/3	B	縦磨き	斜め磨き	柱穴
7	ミニ	2.6	2.6	3.0	完	C	ナデ	ナデ	床
8	ミニ	4.8	3.4	3.1	3/4	C	ナデ	ナデ	床
50号住居址									
1	甕	16.7	3.2	34.0	3/4	C	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ　底部：ケズリ	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ケズリ	床
2	甕	16.4			4/5	CD	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ　一部ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ	床
3	甕	18.4		30.4	3/4	C	口縁：ナデ　胴部：ハケ→ケズリ　底部：ハケ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ	床
4	高坏	15.6			1/3	D	横ナデ→磨き	斜め磨き	カマド
5	椀	8.1		13.9	完	BC	磨き	磨き→黒色処理	床
51号住居址									
1	甕	15.9	4.8	30.4	完	D	口縁：横ナデ　胴部：ハケ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ	柱穴
2	壺	8.7		12.0	完	B	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ→ナデ	口縁：横磨き　胴部：ナデ	カマド
3	甕	13.5			2/3	BC	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ナデ	柱穴
4	甕	16.5		31.0	1/2	C	口縁：横ナデ　胴部：ハケ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ・ケズリ・ナデ	カマド
5	甕	27.8			1/2	C	口縁：ハケ→横磨き　胴部：ハケ→磨きｏｒナデ	ナデ？（摩耗詳細不明）	覆土
6	甕	16.9			1/2	C	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	カマド
7	甕	19.0			1/6	D	口縁：横ナデ　胴部：ハケ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ	カマド
8	甑	23.0			1/4	CD	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ	カマド
9	甕	13.3	4.2	14.1	2/3	D	胴部：ハケ　底部：ハケ→ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ	柱穴
10	甑	19.1	3.0	14.1	完	D	口縁：ナデ　体部：ハケ　底部：焼成前穿孔１	ハケ→ナデ	カマド
11	高坏	17.3	8.8	8.3	2/3	D	坏部：横磨き　脚部：縦磨き	坏部：磨き　脚部：ナデ	床
12	坏	14.6			1/4	B	磨き（摩耗詳細不明）	横磨き→黒色処理	覆土
54号住居址									
1	壺	21.6			2/3	C	口唇：面取り　口縁：磨き	斜め磨き	覆土
2	甕	14.7			2/3	B	口縁：ナデ　胴部：摩耗不明	口縁：ナデ　胴部：摩耗不明	覆土
3	甕	13.6			1/3	CD	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデ	口縁：横ナデ　胴部：篦ナデ→ナデ	覆土
4	甕	21.6			2/3	CD	口縁：ハケ→縦磨き　胴部：ハケ→縦磨き	口縁：横磨き　胴部：ケズリ	床
5	甕	18.1			2/3	B	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：斜めハケ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデ	床
6	甕	14.0			1/3	B	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ	床
7	甕	13.0			1/3	D	口縁：横ナデ　胴部：斜めハケ→ナデ	ハケ→ナデ	覆土
8	甕	15.6			2/3	D	口縁：ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	ナデ	床
9	壺				4/5	D	口縁：磨き　胴部：斜め磨き	口縁：ナデ　胴部：ナデ	床
10	坩	6.5		6.0	完	C	口縁：ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	口縁：ナデ　胴部：ナデ	床
11	坩				2/3	B	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ→ナデ	口縁：ハケ→ナデ　胴部：篦ナデ→ナデ	床
12	坩				完	C	磨き　ケズリ→ナデ	篦ナデ→ナデ	覆土
13	坩				1/3	CD	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	覆土
14	甑	15.4	3.9	8.0	3/4	D	口縁：折返し→指頭押捺　体部：ナデｏｒ磨き	ハケ	床
15	椀	17.2		8.5	4/5	D	口縁：横ナデ→磨き　体部：磨き	磨き	覆土
16	椀	15.4			1/6	D	口縁：横ナデ	磨き	床
17	坏	15.0		5.6	完	D	口縁：横ナデ→磨き　体部：ハケ→磨き	口縁：横磨き　体部：斜め磨き	床
18	坏	13.9		6.3	完	D	口縁：横ナデ　体部：ハケ→磨き	磨き	床
19	坏	13.7		5.4	1/2	CD	横磨き	口縁：横磨き　体部：斜め磨き	床

表15　出土土器観察表⑫

番号	器種	法量（cm）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
54号住居址									
20	坏	14.0			1/4	B	口縁：横ナデ　体部：ケズリ→ナデ	ナデ	床
21	15.4				1/2	C	ケズリ→ナデ→磨き	磨き	覆土
22	ミニ	6.6		4.3	完	D	ユビナデ	ユビナデ	床
23	器台	13.4	10.9	9.3	完	B	器受部：ナデ　脚部：ナデ	ナデ	床
24	高坏	18.8	13.1	13.2	4/5	D	口唇：内側に肥厚　坏部：磨き　脚部：磨き	坏部：横磨き　脚部：縦磨き	床
25	高坏	19.1	13.8	13.3	2/3	D	坏部：縦磨き　脚部：縦磨き　脚端部：横磨き	坏部：斜め磨き　脚部：シボリ→ナデ	床
26	高坏	19.1	13.7	13.8	完	C	坏部：斜め磨き　脚部：縦磨き	坏部：横磨き　脚部：シボリ→ナデ	床
27	高坏	20.4	13.7	12.6	3/4	B	坏部：斜め磨き　脚部：縦磨き　脚端部：斜め磨き	坏部：斜め磨き　脚部：シボリ→ナデ	床
28	高坏	17.5	13.1	11.3	完	C	坏部：ハケ→磨き　脚部：縦磨き	坏部：磨き　脚部：ナデ	床
29	高坏	17.3	12.7	12.0	完	C	坏部：ハケ→縦磨き　脚部：ハケ→縦磨き	坏部：摩耗調整不明　脚部：シボリ→ナデ	床
30	高坏	17.5	12.2	11.4	完	C	坏部：ナデ・ハケ→磨き　脚部：縦磨き	坏部：横磨き　脚部：ケズリ？	床
31	高坏	19.0	13.9	13.2	完	C	坏部：縦磨き　脚部：縦磨き	坏部：斜め磨き　脚部：ナデ	床
32	高坏	18.7	14.3	13.0	4/5	CD	坏部：横ナデ→磨き　脚部：縦磨き	坏部：ナデ→斜磨き　脚部：シボリ→ナデ	床
33	高坏	18.2	13.7	12.3	完	B	坏部：ナデ→磨き　脚部：縦磨き　脚端部：横磨き	坏部：横磨き　脚部：シボリ→ナデ	床
34	高坏	19.8			完	CD	坏部：縦磨き　脚部：縦磨き	坏部：斜め磨き　脚部：シボリ	床
35	高坏	15.2	11.4	13.1	完	CD	坏部：ナデ・ハケ→磨き　脚部：縦磨き	坏部：磨き　脚部：シボリ→ナデ	床
36	高坏	20.6	14.7	14.5	完	CD	坏部：ナデ・ハケ→磨き　脚部：磨き	坏部：磨き　脚部：シボリ→ナデ	床
37	高坏	17.7	13.6	13.4	完	C	坏部：横ナデ→磨き　脚部：縦磨き	坏部：磨き　脚部：ナデ	床
38	高坏	16.8	13.3	12.9	3/4	D	坏部：横磨き　脚部：縦磨き	坏部：横磨き　脚部：ハケ→ナデ	床
39	高坏	23.5			1/2	D	ハケ→斜め磨き	斜め磨き	床
40	高坏	19.4			1/3	CD	縦磨き	縦磨き	床
41	高坏	19.2			3/4	CD	縦磨き	斜め磨き	床
42	高坏	17.9			1/5	CD	縦磨き	斜め磨き	覆土
43	高坏	19.2			完	CD	斜めハケ→縦磨き	斜めハケ→斜め磨き	覆土
44	高坏	13.8			完	C	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	床
45	高坏	16.2			1/3	CD	縦磨き	斜め磨き	床
46	高坏	16.6			1/2	CD	縦磨き	斜め磨き	床
47	高坏		18.0		1/2	BC	縦磨き　脚端部：面取り→ナデ	ナデ	床
48	高坏	15.9			2/3	C	縦磨き	ユビナデ→ナデ	床
55号住居址									
1	壺	17.2	7.1	25.0	完	BC	口縁：ナデ→磨き　胴部：磨き　底部：ケズリ→ナデ	口縁：摩耗不明　胴部：ナデ	床直
2	壺	15.8	7.6	27.7	完	C	口縁：ハケ→磨き　胴部：ハケ→磨き　底部：ケズリ	口縁：ナデ→磨き　胴部：篦ナデ→ナデ	床直
3	壺	18.3	6.0	37.7	1/3	C	口縁：磨き　胴部：ハケ→磨き　底部：凹み底	口縁：横磨き　胴部：ハケ・ケズリ	床直
4	壺	18.6	5.0	34.9	完	C	摩耗調整不明	口縁：摩耗不明　胴部：ハケ→ナデ	床直
5	甕	17.2		25.4	完	CD	口縁：ナデ→ハケ　胴部：ハケ　底部：ケズリ→ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデ	床直
6	甕	17.3		26.6	4/5	D	口縁：横ナデ　胴部：ハケ　底部：ケズリ→ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ・ケズリ	床直
7	壺	19.1	8.6	38.9	2/3	BC	口唇：面取り　胴部：ハケ→磨き　底部：凹み底	口縁：横磨き　胴部：ハケ・ケズリ	床直
8	壺		7.5		2/3	AC	口縁：横ナデ　胴部：縦磨き　底部：凹み底	口縁：磨き　胴部：ハケ・ナデ	床直
9	甕	17.0		27.3	2/3	BC	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ケズリ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ・ケズリ	床直
10	甕	18.0		29.7	4/5	CD	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	床直
11	甕	17.0			2/3	BC	口縁：折返し→指頭押捺→ナデ　胴部：ハケ	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ→ナデ	床直
12	壺		7.8		4/5	B	口縁：磨き　胴部：ハケ・ケズリ→磨き　底部：ナデ	口縁：摩耗不明　胴部：ハケ・ケズリ	床直

表16　出土土器観察表⑬

番号	器種	法量（cm）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
55号住居址									
13	壺	18.0	7.8	40.3	3/4	C	口唇：面取り→ナデ　口縁：ナデ→磨き　胴部：磨き	摩耗調整不明	床直
14	甕	18.5		35.8	1/3	C	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ→ナデ　底部：ケズリ	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ→ケズリ	床直
15	甕	17.2			完	CD	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	床直
16	甕	14.4		15.0	完	B	口縁：横ナデ　胴部：斜めハケ　底部：ケズリ→ナデ	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	床直
17	鉢	9.7			1/3	D	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	床直
18	坩	9.4		9.9	完	BC	口縁：横ナデ→横磨き　底部：ケズリ→磨き	口縁：横磨き　胴部：ナデ	床直
19	坩	9.4		10.7	4/5	BC	口縁：磨き　胴部：ケズリ→磨きｏｒナデ	口縁：横磨き　胴部：指頭押捺・ナデ	床直
20	壺	13.6		12.8	1/3	BC	口縁：横ナデ→磨き　胴部：ケズリ→磨き	口縁：磨き　胴部：ナデ	指直
21	坩	9.4		7.8	2/3	D	口縁：ナデ　胴部：ハケ→ナデ	口縁：ナデ　胴部：篦ナデ→ナデ	床直
22	坩	8.4	2.2	6.9	完	BC	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	口縁：横ナデ　胴部：篦ナデ→ナデ	床直
23	椀	10.6		7.0	完	CD	口縁：横磨き　体部：横磨き	口縁：横磨き　体部：ハケ→磨き	床直
24	坏	12.7	6.7	6.1	2/3	C	口縁：横磨き　体部：横磨き　底部：ケズリ→磨き	口縁：横磨き　体部：縦磨き	床直
25	坏	12.8		6.1	完	C	口縁：横ナデ　体部：ナデ	口縁：横ナデ　体部：ナデ→磨き	床直
26	坏	13.8		5.6	2/3	B	口縁：横磨き　体部：磨き	磨き	床直
27	坏	14.0		5.6	1/2	B	口縁：ナデ→磨き　体部：ケズリ→ハケ→磨き	磨き	床直
28	坏	12.6		3.8	4/5	BC	磨き	斜め磨き	床直
29	器台	13.0	11.0	9.3	完	D	器受部：ハケ→ナデ　脚部：ナデ	ハケ→ナデ	床直
30	高坏	17.2			2/3	B	縦磨き	縦磨き	床直
31	高坏	19.0	14.4	13.8	2/3	C	坏部：ハケ→斜め磨き　脚部：縦磨き	坏部：斜め磨き　脚部：シボリ→ナデ	床直
32	高坏	17.8	12.5	13.6	2/3	CD	坏部：磨き　脚部：縦磨き	坏部：磨き　脚部：ナデ・ケズリ	床直
33	高坏	17.8	12.5	11.5	2/3	B	坏部：ハケ→磨き　脚部：シボリ→ナデ	磨き	床直
34	高坏	19.0	13.1	13.5	完	CD	坏部：縦磨き　脚部：縦磨き	坏部：ユビナデ・ナデ	床直
35	高坏	16.9	13.3	14.0	4/5	C	坏部：ナデ・ハケ→磨き　脚部：ハケ→縦磨き	坏部：剥落不明　脚部：ハケ→ナデ	床直
36	高坏	17.4	13.0	12.1	3/4	B	坏部：ナデ・ハケ→磨き　脚部：縦磨き	坏部：斜め磨き　脚部：シボリ→ナデ	床直
37	高坏	18.2	15.9	12.9	2/3	B	坏部：斜めハケ→縦磨き　脚部：磨き	坏部：斜め磨き　脚部：シボリ→ナデ	床直
38	高坏	21.5	15.1	14.9	3/4	BC	坏部：斜めハケ→磨き　脚部：ハケ→ナデ→磨き	坏部：横ハケ→磨き　脚部：ハケ→ナデ	床直
39	高坏	20.5	11.9	13.3	4/5	C	坏部：縦磨き　脚部：縦磨き	坏部：磨き　脚部：シボリ→ナデ	床直
40	高坏	19.1	12.2	11.6	2/3	CD	坏部：縦磨き　脚部：縦磨き	坏部：横磨き　脚部：シボリ→ナデ	床直
41	高坏	17.6	9.6	12.9	完	C	坏部：ナデ→磨き　脚部：縦磨き	坏部：磨き　脚部：シボリ→ナデ	床直
42	高坏	17.2	10.5	14.2	2/3	BC	坏部：縦磨き　脚部：縦磨き	坏部：磨き　脚部：シボリ→ナデ	床直
57号住居址									
1	甕	18.1		33.1	4/5	D	口縁：横ナデ　胴部：ハケ　底部：ケズリ→ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデ	カマド
2	甕	18.4		22.7	完	CD	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ→ナデ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデ	カマド
3	甕	15.6		22.0	完	C	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ・ナデ	床
4	甕	18.1		17.5	完	BC	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ　底部：ケズリ→ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデ	カマド
5	甕	15.1			完	CD	口縁：横ナデ→ハケ　胴部：ハケ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ	床
6	甕	16.1	7.2	17.5	完	D	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ・磨き	床
7	甕	16.8			1/3	C	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	カマド
8	甑	16.3		10.5	完	BC	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデ　底部：焼成前穿孔	ハケ→篦ナデ→ナデ	床
9	坏	8.8	4.2	5.5	完	BC	口縁：横ナデ　体部：ナデ　底部：ケズリ→ナデ	ナデｏｒ磨き	床
10	甑	23.1	7.8	26.1	完	C	口縁：横ナデ　胴部：縦ケズリ　底部：ケズリ→ナデ	ケズリ→ナデ	床
11	壺				完	CD	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→磨き　底部：磨き	ナデ	床

表17　出土土器観察表⑭

番号	器種	法量（cm）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
57号住居址									
12	壺	11.9		12.9	完	BC	口縁：横ナデ　胴部：ナデ・磨き　底部：ハケ→ナデ	口縁：ハケ→横ナデ 胴部：ハケ→ナデ	床
13	鉢	13.0	6.0	14.2	完	CD	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→縦磨き　底部：ナデ	横磨き→黒色処理	床
14	鉢	15.5		13.0	4/5	CD	口縁：横ナデ　胴部：ナデ　底部：ナデ	口縁：横ナデ　胴部：篦ナデ→ナデ	床
15	高坏	16.7	10.0	10.4	完	B	坏部：横磨き　脚部：縦磨き	坏部：横磨き→黒色処理　脚部：ナデ	床
16	高坏	16.0	10.6	10.4	4/5	C	坏部：横磨き　脚部：縦磨き	坏部：横磨き→黒色処理　脚部：ナデ	床
17	高坏	15.3	9.8	9.6	4/5	C	坏部：横磨き　屈曲部沈線1　脚部：縦磨き	坏部：横磨き→黒色処理　脚部：ナデ	床
18	高坏	16.0	10.4	9.5	完	BC	坏部：横磨き　脚部：縦磨き	坏部：横磨き→黒色処理　脚部：ナデ	床
19	高坏	16.8			3/4	CD	坏部：磨き　脚部：長方形透孔有	坏部：ハケ→横磨き	床
20	高坏	14.2			1/4	CD	坏部：ナデ・ハケ→磨き	横磨き	カマド
21	蓋	10.8		4.5	完		口縁：回転ナデ　天井部：回転ケズリ　篦記号有	回転ナデ	覆土
23	坏	10.2		5.1	完		口縁：回転ナデ　底部：回転ケズリ	回転ナデ	床
24	鉢	18.2			1/4	D	口縁：横ナデ→横磨き　体部：横磨き	横磨き→黒色処理	床
25	坏	16.6		5.9	2/3	D	横磨き　体部：ケズリ→磨き	横磨き→黒色処理	床
26	椀	14.9		6.3	完	B	口縁：縦ハケ→横磨き　底部：ケズリ→ハケ→磨き	横磨き	床
27	椀	13.6			1/2	B	口縁：横ナデ　体部：ハケ→磨き	磨き→黒色処理	床
28	坏	15.4		5.3	完	B	横磨き	磨き→黒色処理	床
29	坏	14.1		5.5	完	BC	口縁：横ナデ→横磨き　体部：横磨き	磨き	床
30	坏	13.6			2/3	D	横磨き	磨き→黒色処理	床
31	坏	14.6		5.7	1/4	C	口縁：横磨き　体部：ケズリ→磨き	磨き→黒色処理	床
32	坏	15.6			1/3	C	横磨き　底部：「x」状の篦記号有	横磨き→黒色処理	床
33	坏	15.7		4.4	1/2	D	横磨き	横磨き→黒色処理	床
59号住居址									
1	甕	18.3			3/4	C	口縁：面取り→ナデ　摩耗詳細不明	口縁：摩耗不明　胴部：ハケ→ナデ	覆土
2	坏	9.6		5.9	完	C	口縁：横磨き　体部：ケズリ→横磨き	横磨き→黒色処理	覆土
3	坏	14.3		5.6	3/4	C	口縁：横ナデ→横磨き　体部：ケズリ→横磨き	横磨き→黒色処理	覆土
4	坏	14.0		5.1	3/4	D	口縁：横磨き　体部：横磨き　屈曲部に沈線1	磨き	覆土
5	壺	12.4			完	C	口縁：縦磨き　胴部：ハケ→斜め磨き	口縁：横磨き　胴部：ナデ	柱穴
6	高坏	16.1	11.6	9.1	2/3	D	坏部：斜め磨き　脚部：縦磨き	坏部：磨き→黒色処理　脚部：ナデ	覆土
66号住居址									
1	甕	15.0	7.1	26.4	2/3	BC	口縁：横ナデ　胴部：ナデ→磨き　底部：ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ	床
2	甕	19.0	8.0	28.3	完	BC	口縁：横ナデ　胴部：ナデ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	床
3	甕	15.1			完	BC	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	床
4	甕	17.8			完	CD	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	床
5	甕	11.8			完	CD	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	床
6	鉢	32.0	8.4	25.9	2/3	B	口縁：横ナデ　胴部：ナデ　底部：ナデ	口縁：横ナデ　底部：縦磨き	床
7	高坏	16.2			2/3	B	坏部：縦磨き　脚部：縦磨き	坏部：ハケ→横磨き 脚部：ケズリ→ナデ	カマド
8	高坏	14.9	12.3	16.0	2/3	B	坏部：斜め磨き　脚部：縦磨き	坏部：斜め磨き　脚部：ケズリ・ナデ	床
9	高坏	13.1			1/2	BC	口唇：横ナデ　坏部：縦磨き	坏部：縦磨き	床
10	高坏	17.4			完	BC	口縁：横ナデ→縦磨き　坏部：ナデ→縦磨き	横ナデ→横磨き	床
11	高坏	16.3			2/3	B	坏部：ハケ→縦磨き	ハケ→横磨き	カマド
12	高坏	15.6			完	B	ナデ→磨き	斜め磨き	床

表18　出土土器観察表⑮

番号	器種	法量（cm）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
69号住居址									
1	甕	17.8			1/6	C	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：斜めハケ	口縁：ハテ→横ナデ 胴部：篦ナデ	カマド
2	坏	14.1		5.3	2/3	B	口縁：横磨き　底部：「x」状の篦記号有	横ナデ→横磨き	
3	坏	14.3		4.6	完	B	口縁：横磨き　体部：ケズリ→磨き	横磨き	
4	鉢	14.1		7.1	3/4	B	摩耗調整不明	摩耗調整不明	
5	鉢	14.2			1/3	D	体部：横磨き　底部：ケズリ	横磨き→黒色処理	支脚
6	坏	11.4		5.0	1/2		口縁：回転ナデ　底部：回転ケズリ	回転ナデ	
7	高坏	18.2			完	B	坏部：横磨き　脚部：長方形透 孔有	磨き→黒色処理	
8	高坏	18.8			完	C	坏部：磨き	横磨き	支脚
9	高坏	16.8			完	B	ナデ・ケズリ→磨き	磨き	
10	高坏	15.3			2/3	C	ナデ・ハケ→磨き	斜め磨き	
70号住居址									
1	甕	18.6	4.4	36.4	2/3	C	口縁：横ナデ　胴部：ナデ　底部：　デナ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	床
2	甑	18.4	8.3	26.4	1/2	B	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ→磨き　底部：ケズリ	摩耗調整不明	床
3	鉢	14.0	5.4	8.5	2/3	D	口縁：横ナデ　体部：ケズリ→ナデ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　体部：篦ナデ→ナデ	床
4	坏	16.5		5.7	3/4	C	口縁：横磨き　底部：ケズリ→横磨き	横磨き	床
5	坏	16.6		6.0	4/5	CD	口縁：横磨き　体部：ハケ→横磨き	横磨き→黒色処理	覆土
72号住居址									
1	甑	20.0	5.8	1 19	完	CD	口縁：ナデ→磨き　体部：磨き　底部：ケズリ→ナデ	口縁：横磨き　体部：ケズリ→ナデ・磨き	床
2	鉢	13.5		10.4	2/3	D	口縁：横ナデ→磨き　体部：ケズリ→磨き	磨き→黒色処理	床
74号住居址									
1	甕	17.4	6.8	27.1	2/3	C	口唇：面取り　口縁：ナデ　胴部：ナデｏｒ磨き	口縁：横ナデ　胴部：篦ナデ→ナデ	カマド
2	壺	15.5			完	C	口縁：横磨き　頸部：縦磨き	横磨き	床
3	壺	13.6			1/3	B	口縁：横ナデ　胴部：ナデ→磨き	口縁：ナデ→横磨き 胴部：篦ナデ→ナデ	床
4	甑	16.9	8.2	27.3	1/8	B	口縁：横ナデ　胴部：縦磨き	口縁：横ナデ　胴部：縦磨き	床
5	高坏	15.7	12.5	14.3	完	BC	坏部：横磨き　脚部：縦磨き	坏部：横磨き　脚部：シボリ→ナデ	床
6	高坏	14.8			完	BC	坏部：横ナデ→横磨き	横磨き	床
7	高坏	18.8			2/3	B	縦磨き	磨き	床
8	高坏	15.4			1/4	BC	横磨き	横磨き	床直
9	坏	11.8		5.9	2/3	D	摩耗調整不明	摩耗調整不明	床直
75号住居址									
1	甕	16.3	8.9	33.2	1/3	D	口縁：ハケ　胴部：ハケ→磨き	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ケズリ	床
2	甑	16.8	2.2	11.4	完	BC	口縁：横ナデ　体部：縦磨き　底部：ケズリ→ナデ	ハケ→ナデ	床
3	鉢	16.3			3/4	CD	口縁：横磨き　体部：横磨き	横磨き→黒色処理	覆土
4	高坏	20.2	14.0	11.3	1/3	B	坏部：縦磨き　脚部：　磨縦	坏部：斜め磨き　脚部：ハケ→ナデ	床
5	蓋	12.5		4.3	完		口縁：回転ナデ　天井部：静止ケズリ→スリケシ	回転ナデ	床
6	瓶				1/3		櫛波状文　体部：回転ナデ　底部：指オサエ→ナデ	回転ナデ　指オサエ	覆土
7	甕				1/2		回転ナデ・平行タタキ	回転ナデ	床
8	壺				1/3		回転ナデ　櫛波状文	回転ナデ	床
76号住居址									
1	瓶	11.8		11.7	完	B	口縁：　磨横　胴部：横磨き　円孔1	口縁：横磨き　胴部：ナデ	床
2	鉢	10.8		8.8	1/2	D	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→磨き　底部：ハケ→磨き	横磨き→黒色処理	床
3	鉢	11.0		8.1	完	D	口縁：磨き　胴～底部：ケズリ→磨き	口縁：　磨横き　体部：篦ナデ→ナデ	床

表19　出土土器観察表⑯

番号	器種	法量（cm）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
76号住居址									
4	鉢	12.7		9.1	3/4	C	口縁：横ナデ→横磨き　胴部：斜め磨き	口縁：横磨き　胴部：ナデ→横磨き	床
5	坏	12.9		5.9	2/3	D	横磨き　底部：「x」状の箆号有	横磨き→黒色処理	床
6	坏	14.4		5.5	1/2	B	口縁～体部：横磨き　底部：ケズリ→磨き	磨き→黒色処理	床
7	坏	14.2		5.3	2/3	C	口縁：横ナデ→横磨き　体部：ケズリ→磨き	磨き→黒色処理	床
8	坏	14.5		4.7	2/3	C	口縁：横磨き　体部：横～斜め磨き	横磨き	床
9	坏	14.3		5.2	2/3	CD	口縁：横磨き　底部：ケズリ→磨き	横磨き	覆土
10	坏	15.0		5.2	完	CD	口縁：横磨き　底部：横磨き	磨き→黒色処理	床
11	坏	15.7		5.1	完	B	口縁：横磨き　底部：ケズリ→磨き	摩耗調整不明	床
12	坏	14.2		5.4	完	B	口縁：横磨き　底部：ハケ→横磨き	斜め磨き	床
13	高坏	14.6	10.1	9.0	2/3	C	坏部：磨き　脚部：ケズリ→ナデ→磨き	坏部：横磨き　脚部：箆ナデ→ナデ	床
14	高坏	15.1			3/4	C	ケズリ→磨き	斜め磨き	床
15	坏	7.6		3.9	3/4	B	口縁：磨き　底部：ケズリ→ナデｏｒ磨き	磨き	床
16	坏	7.2	4.5	6.5	完	B	坏部：縦磨き　底部：ケズリ→ナデ	ナデ	床
80号住居址									
1	甕	19.1			1/6	B	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ→ナデ？	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ	柱穴
2	甑	17.1	4.0	9.9	完	C	口唇：面取り→ナデ　体部：ケズリ→ナデ	箆ナデ→ナデ	柱穴
3	高坏	15.9			完	D	摩耗調整不明	磨き	柱穴
81号住居址									
1	甕	15.5	5.3	26.7	1/2	D	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ→ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ・ケズリ→ナデ	カマド
2	甕	15.6		13.8	2/3	C	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ　底部：ハケ	口縁：ハケ→ナデ　胴部：箆ナデ→ナデ	床
3	甕	12.9			3/4	CD	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ	ナデ	床
4	甕	16.3	8.0	31.7	4/5	B	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ→ナデ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	床
5	甕	12.9			完	D	口縁：横ナデ　胴部：ハケ	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ	床
6	甑	17.9	4.8	14.1	完	B	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ→横磨き	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ・ナデ	カマド
7	椀	12.9		7.0	1/4	B	口縁：横磨き　底部：ケズリ	横磨き	柱穴
8	坏	13.0		6.4	1/4	C	口縁：横磨き　体部：ケズリ→磨き	横磨き→黒色処理	床
9	坏	16.0		5.2	完	C	横磨き	横磨き→黒色処理	カマド
10	坏	14.1		4.6	2/3	D	横磨き	横磨き→黒色処理	床
86号住居址									
1	甕	18.4	7.2	28.3	1/2	D	口縁：横ナデ　胴部：ハケ・ケズリ→磨き	口縁：横ナデ　胴部：ハケ・ケズリ→ナデ	貯蔵穴
2	壺	10.7		13.4	3/4	B	口縁：横ナデ　胴部：ハケ	口縁：横ハケ　胴部：ナデ	床
3	鉢	13.7	7.1	9.4	1/4	C	口縁：横磨き　胴部：斜め磨き　底部：ケズリ	横磨き	覆土
4	甕	16.8	7.3	29.3	完	D	口縁：横ナデ　胴部：ハケ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ	床
5	甑	22.3	7.0	28.6	3/4	C	口縁：横ハテ→横磨き　胴部：ハケ→磨き	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：縦ハケ	床
6	甑	24.6	7.1	24.1	4/5	B	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	床
7	甑	16.2		13.7	完	C	口縁：ナデ→ハケ　体部：ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	床
8	坏	9.4		5.7	2/3	C	口縁：縦ハケ→ナデ　底部：ハケ→ナデ	箆ナデ→ナデ	覆土
9	坏	12.6		5.4	3/4	B	磨き	磨き	床
10	坏	11.7		6.2	1/3	B	横ナデ　底部：ハケ→ナデ	磨き	床
11	坏	16.3		5.2	1/3	B	横磨き	横磨き→黒色処理	覆土
12	坏	13.7		5.4	完	B	口縁：横ナデ　体部：ハケ→磨き	横磨き→黒色処理	覆土
13	坏	12.7		4.5	完	B	磨き	磨き	覆土

表20　出土土器観察表⑰

番号	器種	法量（cm）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
86号住居址									
14	坏	15.0		5.8	1/2	D	横磨き	横磨き→黒色処理	覆土
15	高坏	17.1	11.4	13.0	3/4	C	坏部：横磨き　脚部：縦磨き　長方形透孔4	坏部：磨き→黒色処理　脚部：ナデ	床
16	高坏	15.5	9.8	10.0	3/4	D	坏部：磨き→ケズリ　脚部：縦磨き	坏部：磨き　脚部：ナデ	覆土
88号住居址									
1	甕	15.8	4.6	30.5	1/2	C	口縁：横ナデ　胴部：ナデ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	カマド
2	甕	13.4		12.1	4/5	D	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデ　底部：ケズリ	ハケ・ケズリ→ナデ	カマド
3	高坏	18.4	12.0	13.5	完	CD	坏部：ケズリ→磨き　脚部：縦磨き	坏部：磨き→黒色処理　脚部：ケズリ	床
4	坏	15.5		5.2	1/3	B	横磨き　底部：ケズリ→磨き	横磨き→黒色処理	床
5	坏	12.2		5.1	2/3	B	口縁：磨き　底部：ケズリ→磨き	横磨き→黒色処理	カマド
96号住居址									
1	坏	12.6		5.5	2/3	B	磨き　底部：「x」状の箆記号有	横磨き	カマド
2	坏	13.5		5.4	完	B	磨き　底部：「x」状の箆記号有	横磨き	カマド
103号住居址									
1	甕	16.5		29.2	3/4	C	口縁：横ナデ　胴部：ハケ　底部：ハケ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ→ナデ	床
2	甑	23.3	8.3	23.4	2/3	D	口縁：横ナデ　胴部：縦磨き　底部：ケズリ→ナデ	ナデ・磨き	カマド
3	高坏		10.2		完	D	縦磨き	坏部：磨き　脚部：ナデ	覆土
4	坏	14.6		5.1	1/2	C	口縁：横磨き　底部：横磨き	横磨き	カマド
5	椀	12.1		7.1	3/4	D	口縁：ナデ　体部：ハケ→ナデ　底部：ケズリ→ナデ	ハケ→ナデ→黒色処理	覆土
6	坏	15.7		5.5	2/3	C	口縁：ハケ→横磨き　底部：ハケ→横磨き	横磨き→黒色処理	カマド
7	甑	15.0	6.0	12.5	1/4	C	口縁：磨き　胴部：ケズリ→磨き　底部：ケズリ	横磨き→黒色処理	床
7号土壙									
1	壺	16.0	5.9	27.9	完	C	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→ナデ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ・ハケ→ナデ	
2	壺	12.6	6.2	18.4	完	C	口縁：磨き　胴部：ハケ→磨き　底部：ケズリ→磨き	口縁：横磨き　胴部：箆ナデ→ナデ	
3	甕	17.3		28.8	4/5	D	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　底部：ケズリ	
4	甕	12.9		16.1	完	D	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ	
5	甕	11.5		15.4	1/3	D	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ→ナデ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：箆ナデ・ナデ	
6	甑	16.5	5.6	13.1	3/4	C	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ　底部：ケズリ	ハケ・ナデ	
7	甑	12.0		7.7	2/3	C	体部：ハケ→ナデ　底部：ケズリ	ハケ	
8	鉢	16.5	4.6	8.6	完	D	口縁：折返し→ナデ　体部：ハケ・ケズリ→ナデ	口縁：ハケ→ナデ　体部：ハケ・ナデ	
9	椀	11.6			1/2	BC	口縁：横ナデ→横磨き　体部：ハケ→磨き	口縁：ハケ→磨き　体部：磨き	
10	鉢	11.0	5.5	9.6	完	C	口縁：横ナデ　胴部：ハケ→縦磨き　底部：ケズリ	口縁：磨き　胴部：箆ナデ→ナデ	
11	椀	12.0		7.1	完	C	横ナデ　底部：ハケ	ハケ→磨き	
12	坏	13.5		5.6	完	BC	口縁：横ナデ　体部：ハケ→ナデ	横磨き	
13	坏	11.4		5.4	完	C	ナデ→磨き　底部：ハケ→磨き	磨き	
14	坏	12.3		6.0	2/3	C	口縁：横磨き　体部：ハケ→ナデ	横磨き	
15	坏	12.9		6.3	4/5	D	口縁：横ナデ　体部：ケズリ→ナデ	摩耗調整不明	
16	高坏	14.9			完	B	磨き	磨き	
42号住居址上層出土土器									
1	甕	17.0	6.2	29.8	完	CD	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ナデ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ケズリ・ナデ	
2	甕	15.0	6.6	22.2	3/4	CD	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ケズリ・ハケ	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ケズリ・ハケ	
3	甕	16.0		22.6	3/4	C	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ケズリ	
4	甕	14.2	4.5	17.9	3/4	BC	口縁：ハケ→ナデ　胴部：ハケ　底部：ケズリ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ・ケズリ	

表21　出土土器観察表⑱

番号	器種	法量（cm）			遺存度	色調	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
42号住居址上層									
5	甕	13.4			3/4	BC	口縁：横ナデ　胴部：ナデ	口縁：横ナデ　胴部：篦ナデ→ナデ	
6	甑	21.5	6.8	18.3	完	C	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ	ハケ→ナデ	
7	甑	24.9	12.3	21.2	完	B	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ→縦磨き	口縁：横磨き　胴部：縦磨き	
8	高坏	13.0			完	C	口縁：横ナデ→横磨き　坏部：ハケ→磨き	横磨き	
9	高坏	16.1	9.7	9.3	完	BC	坏部：ハケ→磨き　脚部：ハケ→磨き	坏部：横磨き→黒色処理　脚部：縦磨き	
10	椀	15.4			1/3	BC	口縁：横磨き　体部：横磨き	横磨き→黒色処理	
11	坏	14.1			1/2	D	口縁：横ナデ→横磨き　体部：ケズリ→横磨き	磨き→黒色処理	
12	椀	12.0		6.7	完	C	口縁：横ナデ→横磨き　体部：ハケ→磨き	横磨き	
13	椀	11.6		6.8	完	CD	横ナデ→横磨き　底部：「x」状の篦記号有	横磨き	
14	坏	16.1		5.5	完	CD	口縁：横磨き　体部：ケズリ→横磨き	横磨き→黒色処理	
15	坏	15.5		5.3	完	B	横磨き	横磨き→黒色処理	
16	坏	15.5		5.1	完	CD	横磨き	斜め磨き	
17	坏	13.8		4.4	3/4	BC	口縁：横ナデ→横磨き　底部：ハケ→磨き	横磨き→黒色処理	
18	坏	11.1		5.9	完	B	横磨き	磨き→黒色処理	

第５章　考察

１　本村東沖遺跡出土の縄文土器について

本遺跡より縄文時代の土器が出土しているが、遺構に伴うものはみられず、いずれも検出面や他の時期の住居覆土からの出土である。総数は40片を数える。以下に類別して記述する。

第１群土器　（図170・１～29）

胎土に繊維を含み、文様や繊維の含有状況などにより、５類に分けられる。

第１類（１）　器厚は他のものに比べて薄い。口唇に斜めに刻目を有し、左斜め上方からの棒状工具による刺突文が見られる土器である。刺突文は半月状を呈し、密に施文されている。

第２類（２・３）　口縁部に断面三角状の突帯を一条めぐらすもの。２段の縄文が横位に施文されている。また口縁内面上端には幅狭く縄文が横位に施文される。２と３は同一個体で、全面に縄文が施文されると思われる。胎土には砂粒と共に径２～４㎜位の大粒の石英粒が多量に含有されている。繊維痕も器表面で明瞭で、多量に含有されているのが看取できる。

第３類（４～18）　全面に縄文が施文されているが、繊維の含有が器表面からは明瞭ではなく、断面観察によって繊維土器とわかるもの。５は薄手で黒褐色を呈し、２段の縄文（ＬＲ）が横位に回転施文されている。砂粒と共に石英の細粒を胎土に含む。６は口縁部片で、器表面があれているため判然としないが、２段の反の縄が横位に施文されていると思われる。砂粒・白色の軽石細粒・石英の細粒が胎土に目立つ。７は２段の縄が縦位に回転されている。赤褐色を呈し、６と胎土で近似し、白色の軽石細粒が目立つ。輪積み痕を両端に残す。９は２段の異種原体（ＲＬとＬＲ）による羽状縄文がみられ、菱形状の構成になると思われる。胎土には黒雲母がみられる。10は２段の原体による横位縄文が見られる。器表面は内外面共によく磨かれており、繊維の痕跡は全くわからない土器である。15は赤褐色を呈し、２段の横位縄文が見られる。胎土には黒色の角閃石の細粒を多量に含む。

第４類（19～28）　第３類に比し、繊維の混入が明瞭で厚手の土器が多いもの。19は０段多条の２段の異種原体（ＲＬとＬＲ）が横位に施文され、菱形の構成となっている。20は口縁部破片で２段の横位縄文が見られる。22と26は羽状縄文が見られるが、22のＬＲ原体には０段多条の縄が用いられている。27は羽状の縄文が見られるが、２段の撚りもどしの原体（反の縄）によると思われる。

第５類（29）　コブ状貼付文を有するもので、１片の出土である。29はコブ状貼付文の地に半截竹管による平行線文と爪形文で構成される口縁部文様で、胴部は羽状の縄文帯になる類である。

第２群土器（30～34）

半截竹管による平行線文で直線的および曲線的な文様が描出されるもの。

第１類（30～33）　30は内側に屈折する口縁部片で、口縁に孔が一列器周をめぐると思われ、孔が３個見られる。穿孔は外側から棒状工具による刺突で行なわれている。31～33は30より幅の狭い平行線文が密に施文されている。

第２類（34）　平行線文の上にソウメン状の貼付が行なわれるもの。34はカマボコ状の幅の狭い平行線文の上に交差するようにソウメン状の貼付が行なわれる底部片である。胎土には多量の砂粒と石英の大小の粒が混入している。

第３群土器（35～40）

隆帯が器面に貼付されるもの。第１群・第２群に比し、胎土・色調などの点で大きく異なる。

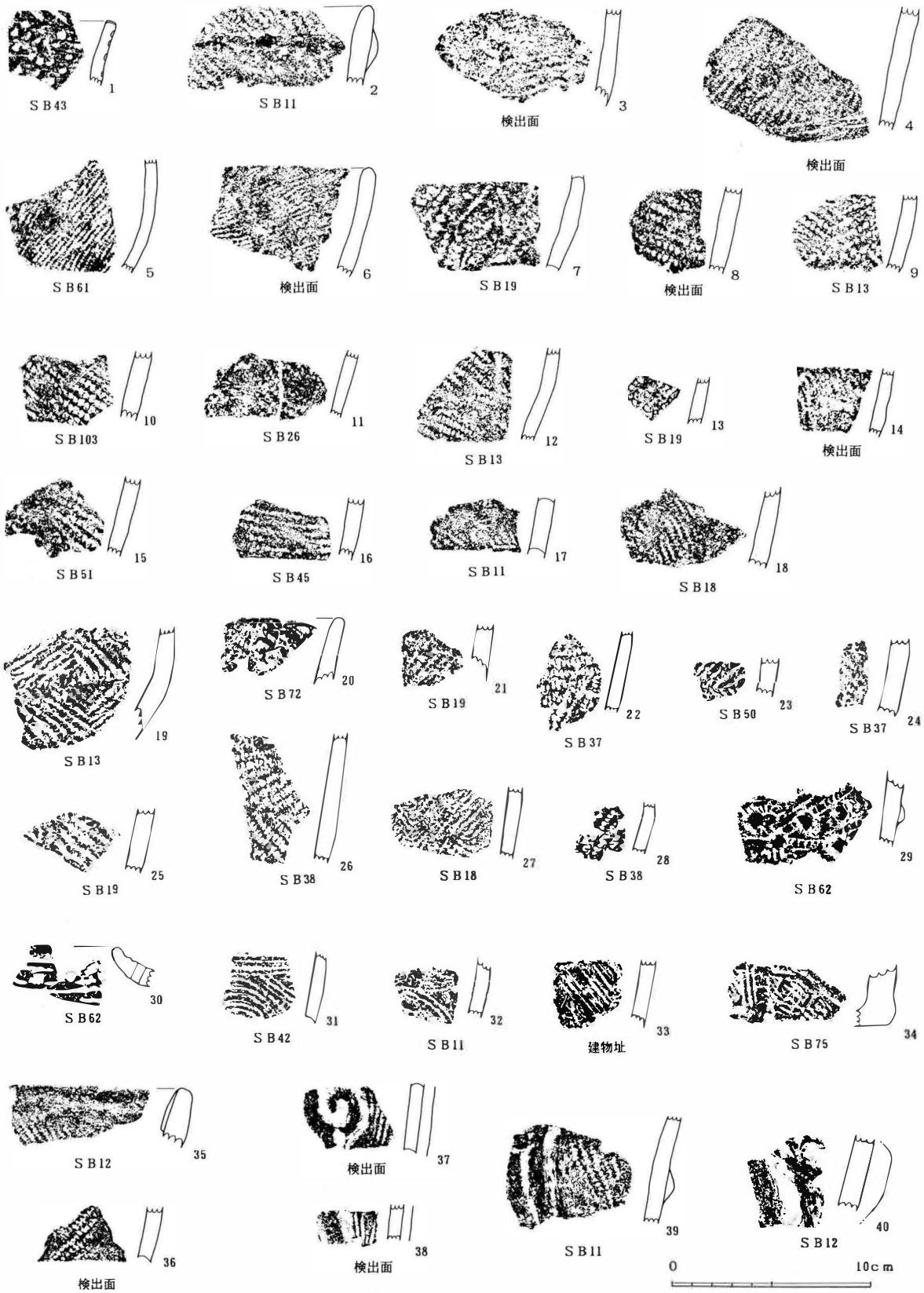


図170　本村東沖遺跡出土縄文土器拓影　（1：3）

第１類(35・36)　縄文のみが施文されているもの。35は口縁部片で内面は肥厚し、段になる。器面には２段の縄が横位に施文されている。砂粒・軽石細粒を多量に含む。36は２段の縄が帯状に縦位に施文されている。

第２類(37～40)　隆帯が見られるもの。37は渦巻状の隆帯が見られ、そのわきに１段の縄（Ｌ）が横位に施されている。38は37と同一個体である。39には２段の縄（ＲＬ）が横位に施文されている。

以上第１群から第３群までに群別したが、各々を位置づけていきたい。

第１群第１類は、繊維土器であるが、前期には該当する類型がないため、早期末に比定されるのではないかと思われる。第２類は前期初頭中道式と称される型式に比定される。浅川扇状地遺跡群では浅川端３号土壙に類例が見られる。中道式にみられる口縁肥厚や軸巻き縄文は浅川端遺跡や本遺跡には見られず、縄文のみの施文となっている。浅川端の突帯に比し、本例の突帯は低くて小さいものである。また口縁内面に縄文が施文されるのは特異な例と言える。

第２類の土器には大粒の石英が胎土に含有されているが、これが大きな特徴と言える。これは浅川端の土器についても同様のことである。この石英は両錐型石英で、長野盆地では裾花凝灰岩の中に含有されている。

第２類土器は、東部町・長門町・佐久市などで出土している資料に比し、だいぶ顔付きが異なっているように思われる。中道式土器の型式構造の問題と共に、千曲川中・下流域での類例の増加に期待したい。

第３類～第５類は、関山式に比定される。第２類とは胎土で異なり、砂粒や軽石細粒を含み、石英は細粒となって含まれている。軽石の細粒も長野盆地では裾花凝灰岩に含有されるものである。また、繊維痕の明瞭なものとそうでないものとに類別されたが、後者のものは成形後の仕上げとして化粧土をかけている可能性が考えられる。第５類は関山式に通有に見られる文様である。

第２群土器は前期後半に属するもので、第１類は諸磯ｂ式、第３類は広義の十三菩提式に比定される。

第３群土器は、中期後半の加曽利Ｅ系に比定される。横位の縄文や帯状の縦位縄文がみられる点は、加曽利Ｅ式というより、その影響下にありながら、在地化した姿相の一端をみることが出来るだろう。

（山口　明）

2　本村東沖遺跡出土の弥生時代後期・北陸系土器について

今回の調査においては調査面積の広大さもあってか、かなり多量の北陸系土器の出土をみた。浅川扇状地遺跡群内においてはその存在は確認されていたものの、これほど良好な資料の出土は予想外であり、当該期の研究に大きな影響を与えるものといえる。以下これらの土器について若干の検討を試み、今後の検討に対する基礎資料の提示としたい。

1　15号住居址覆土出土。壺口縁部破片（1/10残存）。口径17.1cm、残存高3.2cm。口唇部は面取りされ、口縁部は頸部より外面に稜をなして鋭く屈曲して立ち上がる。内外面ともに、横方向の篦磨きと共に赤彩され、口唇部も面取り後篦磨き・赤彩される。胎土は在地のものである。

2　検出面出土。甕口縁部破片(1/4残存)。口径12.4cm、残存高4.5cm。口縁部は頸部より鋭く外反し、中位で直に近く立ち上がる。口唇部は丸みを持った方形を呈する。口縁部上半が強く横ナデされることにより、屈曲部外面には鋭い稜を形成する。口縁部内面は横ナデ、胴部内面も横ナデされるが頸部付近は篦ケズリが施されている可能性もある。胴上半に櫛描波状文が施文されている。内外面とも黒茶褐色を呈し、外面には煤の付着が認められる。胎土は在地のものである。

3　61号住居址覆土出土。甕口縁部破片(1/4残存)。口径18.6cm、残存高4.3cm。口縁部は頸部よりくの字状に屈曲して外反し、端部は強く横ナデされることにより、外面に幅広の面を持つ。端部上端は尖りぎみに丸く終り、端部下端は若干下方に垂下する。口縁部は内外面ともに強く横ナデされる。胴部外面はナデ整形されるが、篦ケズリが成されている可能性もある。胴部内面は斜めハケ後ナデ整形される。色調は淡茶褐色を呈し、胎土は在地のものと考えられるが、細砂粒の混入が目立つ。

4　41号住居址出土。甕、ほぼ完形。口径15.7cm、頸部径12.4cm、胴部最大径19.4cm、底径6.6cm、器高24.7cm。口縁部は頸部より緩やかなくの字状に外反した後、中位付近に外面に鋭い稜を形成して立ち上がる。口唇部は面取りぎみに丸く終る。胴部は胴上位下半に最大径を有し、全体的なプロポーションは倒卵形を呈する。底部は平底である。口縁部は内外面ともに強い横ナデで仕上げられる。胴部外面は在地では認められない目の細かいハケ状工具により、胴上半を右下りにハケ整形した後、胴下半を左下りにハケ整形する。底部周辺はハケ整形後横篦ケズリし、さらに横ナデを行なう。底面は篦ケズリで仕上げられる。口縁部内面は横ナデされるが、頸部からの立ち上がり部分は篦ケズリがなされている可能性が高い。内面胴部上半はハケ整形後頸部下まで斜め方向の篦ケズリがなされ、胴部下半は篦ケズリ後ナデ整形される。内面胴中位以下には煮沸物の焦げ付きが認められる。色調は全体に淡茶褐色を呈し、胎土も砂礫の混入がやや顕著ではあるものの、在地のものと考えられる。北陸地方に認められる有段口縁甕と比較して、底径の大きさならびに底部形態が異質であり、直接的に対比しうるか問題であるが、能登地方の７期（栃木英道1991）の主体的な型式であり、一応７期に併行するものと理解しておきたい。

5　15号住居址覆土出土。甕口縁部破片(1/8残存)。口径16.4cm、残存高3.5cm。口縁部は頸部より緩やかに外反して立ち上がり、受け口状をなす。口唇部は面取りされ、丸みを持ったやや幅広な平坦面をなす。口縁部内外面ならびに頸部屈曲部外面は横ナデ整形される。胴部外面は不明瞭だが篦ケズリもしくはハケ整形の可能性が高い。頸部内面ならびに胴部内面はハケ整形される。色調は明黄燈色を呈し、胎土は在地のものとは異質である。

6　37号住居址覆土出土。甕口縁部破片（1/10残存）。口径16.2cm、残存高3.5cm。有段口縁甕であるが内面に明瞭な段を持たない。口縁端部は丸く終る。口縁部外面には７本の櫛状工具による擬凹線文を施文する。外面口縁部下端ならびに口縁部内面は横ナデ整形されるのみである。胴部内面は篦ケズリで仕上げられる。色調は暗茶

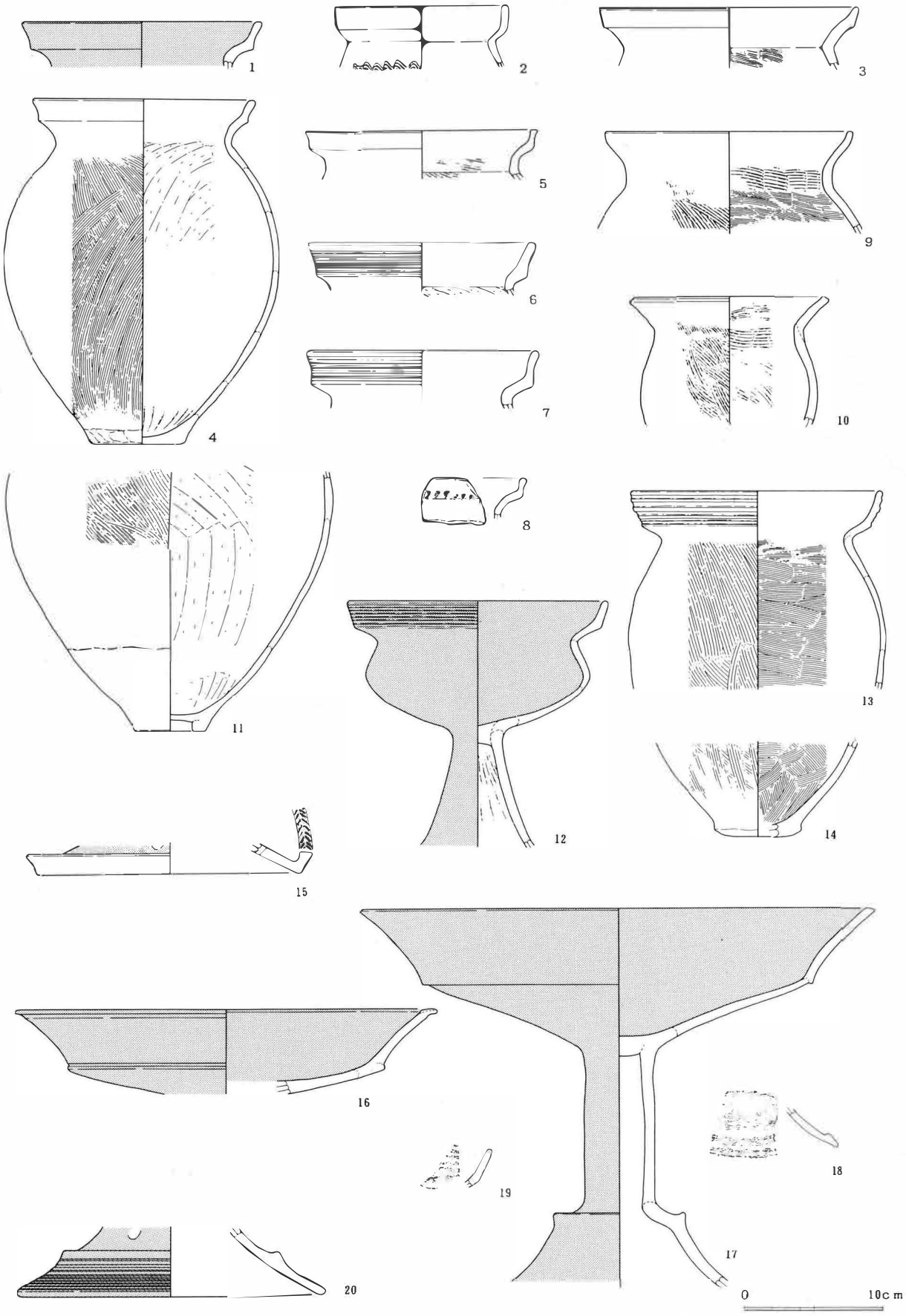


図171　本村東沖遺跡出土弥生後期北陸系土器実測図　（1：4）

褐色を呈し胎土は在地のものと考えられる。

7　15号住居址覆土出土。甕口縁部破片（1/10残存）。口径16.5cm、残存高4.2cm。有段口縁甕で、6に比較して内面の段は明瞭でしっかりしている。口縁端部は丸く終る。口縁部外面は櫛状工具による擬凹線文を施文する。外面口縁部下端ならびに口縁部内面は横ナデ整形されるのみである。胴部内面は不明瞭であるが、箆ケズリで仕上げられるようである。色調は淡茶褐色を呈し、胎土は在地のものである。

8　37号住居址覆土出土。甕口縁部破片（1/10残存）。口径復元不能。残存高2.8cm。口縁部は頸部より緩やかに屈曲して立ち上がり、受け口状を呈する。端部は内側に肥厚ぎみに丸く終る。口縁部は内外面とも横ナデ整形され、頸部内面はハケ整形される。口縁立ち上がり部外面には、櫛もしくはハケ状工具先端による連続刺突がなされる。色調は淡黄燈色を呈し、胎土は在地のものとはやや異質である。

9　105号住居址出土。甕口縁部破片（1/4残存）。口径17.8cm、残存高7.3cm。口縁部は頸部より緩やかに外反し、端部は内湾ぎみに立ち上がる。口縁部は内外面ともに強い横ナデ整形がなされる。胴部外面は右下りの斜めハケ整形がなされ、内面は頸部・胴部が横ハケ整形される。内面胴部のハケ原体は、頸部ならびに外面胴部のハケ原体とは異なる。色調は暗燈褐色～明燈褐色を呈し、胎土は在地のものとは異質である。

10　61号住居址覆土出土。甕（1/4残存）。口径14.2cm、頸部径10.6cm、胴部最大径12.6cm。口縁部は頸部よりくの字状に直線的に外反する形態を呈する。胴部最大径は中位付近に有する。口唇部は面取りされ凹線文状の強い横ナデが加えられ、口縁部も内外面ともにハケ整形後強い横ナデ整形がなされる。胴部外面は右下りの斜めハケ整形、内面頸部は横ハケ、胴部は箆ケズリ整形される。色調は淡黄燈色を呈し、胎土は完全に非在地である。焼成は良好であるが、胎土のせいか器面は軟質である。

11　41号住居址出土。甕(3/4残存)。底径5.0cm、胴部最大径23.3cm、残存高18.4cm。底部は輪台技法を使用しており、ドーナツ状の凹み底を呈する。外面胴部上半は右下りの斜めハケ整形、胴部下半は箆ケズリ後ナデ整形と思われる。胴部下半に成形時の接合痕をとどめる。胴部内面は全体に縦～斜め方向の箆ケズリで仕上げられる。器壁は全体に薄く仕上げられる。色調は暗灰黄燈色を呈し、胎土は完全に非在地である。

12　検出面出土。高坏（1/3残存）。口径18.7cm、残存高17.5cm。坏部が有段口縁浅鉢形の高坏である。口縁部は頸部より鋭くくの字状に外反した後に立ち上がる形態を取り、坏部は中位がやや強く張り出す。脚はハの字状に開いて単純に終る形態が予想される。口縁部外面には櫛状工具によるやや雑な擬凹線文が施文され、坏部内外面ならびに脚部外面は箆磨き・赤彩される。脚部内面は箆状工具による平滑化もしくは箆ケズリ後ナデ成形される。色調は暗黄燈色を呈し、胎土は砂粒の混入がやや顕著ではあるが在地のものと考えられる。

13・14　110号住居址出土。甕（1/3残存）。13・14は接合しないが同一個体と考えられる。口径18.2cm、頸部径13.7cm、胴部最大径18.6cm、底径6.3cm。有段口縁擬凹線甕である。口縁部は頸部よりくの字状に強く屈曲し、内面に比較的明瞭な段を形成する。口縁の立ち上がりはやや内湾ぎみで、端部は丸く終る。胴部最大径は胴上半に有し、全体のプロポーションは倒卵形を呈する。口縁部外面は櫛状工具による擬凹線文を施文し、内面は全体に強いナデ整形がなされる。胴部外面は右下りの斜めハケ整形がなされ、底部周辺はハケ後ナデられる。胴部内面は全体にハケ整形されるが、ハケ原体は外面の原体とは異なる。器壁は全体に薄く仕上げられる。色調は淡黄燈色を呈し胎土は在地のものとはやや異質である。胴部最大径が北陸地方のものに比べてやや下位にある点異質であるが、7期に併行するものととらえられる。

15　11号住居址出土。高坏脚部破片（1/10残存）。脚径20.4cm、残存高2.3cm。脚台端部に粘土帯が貼り付けられ、この部分に箆による矢羽状の連続刻みが施文される。外面はナデ整形後赤彩され、内面は全体にていねいなナデ整形で仕上げられる。円形透孔が若干確認できる。色調は灰黄燈色を呈し、胎土は在地のものとはやや異質

である。柱状無段脚の高坏となる可能性が考えられ、脚端部の篦連続刺突はあまり類例はないものの、主体となる時期は７期前半ととらえられており、７期のなかで理解できよう。

16　61号住居址覆土出土。高坏坏部破片(1/3残存)。口径30cm、坏部屈曲部径22.5cm、残存高6.1cm。口縁部が鋭い稜を形成して大きく外反するタイプの高坏で、口縁端部は幅広の面を持つ。坏部の口縁部高と体部高は、口縁部高が大きく体部高を上回る。外面口縁端部下端は、強く横ナデされることによって、凹線文状にくぼみ、また屈曲部外面には一条の沈線が施される。坏部内外面ともに篦磨き・赤彩にて仕上げられる。色調は明黄燈色を呈し胎土は在地のものと考えられる。口縁端部の幅広の面、口縁部下端の凹線文状の強い横ナデ、屈曲部外面の沈線など比較的忠実に北陸地方の技法を守っており、７期の中で理解できる。

17　100号住居址出土。高坏(1/3残存)。口径36.8cm、坏部屈曲部径27.8cm、残存高27.2cm。口縁部が鋭い稜をなして大きく外反し、円筒状の脚柱部と有段の脚台部を持つタイプの高坏である。口縁端部は単純面取りされ断面方形を呈する。坏中位の屈曲部は若干下方に垂下し鋭い稜を形成する。坏部の口縁部高と体部高はほぼ等しい。有段の脚台の屈曲部は若干上方に突出し、これも比較的鋭い稜を形成する。坏部は内外面ともにていねいに篦磨き・赤彩され、脚部外面も同様である。脚柱部内面はシボリ後篦ケズリされ、脚台部内面はていねいにナデ整形される。色調は明黄燈色を呈し、胎土は在地のものと考えられる。口縁端部が単純面取りで仕上げられ、口縁部の伸長も短い等やや異質な点もあるが７期の中で理解できそうである。

18　55号住居址覆土出土。高坏脚部破片（1/10残存)。脚径復元不能。残存高2.5cm。脚端部に粘土帯が付加され有段状を呈する。有段部分中央には一条の篦沈線による擬凹線文が施される。外面は篦磨き・赤彩、内面はていねいなナデ整形によって仕上げられる。色調は明黄燈色を呈し、胎土は在地のものと考えられる。

19　61号住居址覆土出土。器台口縁部破片。口径復元不能。残存高3.1cm。口縁部外面には櫛状工具による擬凹線文が施文される。内外面ともに篦磨き・赤彩にて仕上げられる。色調は明黄燈色を呈し、胎土は在地のものと考えられる。

20　61号住居址覆土出土。器台脚部破片(1/3残存)。脚径21.8cm、残存高4.9cm。脚部は粘土帯が付加され有段となる。脚端部は２本一対の篦状工具により、幅広の擬凹線文が施文される。また円形透孔が確認される。外面は篦磨き・赤彩、内面はていねいなナデ整形によって仕上げられる。色調は淡黄燈色を呈し、胎土は在地のものと考えられる。比較的忠実に北陸地方の技法を守っており、７期の中で把握できよう。

以上個々の土器についての説明を行ない、ある程度明瞭なものについては時期比定を行なった。総体としてこれらの土器群は、栃木氏の編年によれば第７期（加賀地方の法仏式、能登地方の柳田うわの式）とされるものにおおよそ併行する土器群としてとらえられる可能性がある。

次にこれらの土器群が在地の後期弥生式土器のいかなる段階に共伴しているかについて若干の検討を行なっておきたい。今回出土の資料中で比較的良好な在地の土器と共伴もしくはそれに近い状況にあるものとしては、41号住居址・61号住居址・100号住居址・110号住居址出土資料が存在し、以下これらの住居址出土の在地の土器群の編年的位置について検討する（なお在地の土器群について使用する段階については千野1989による)。

41号住居址出土土器（図37)

壷・甕・蓋形土器が出土しているが、全形の分かる資料がなく明確な時期比定は困難である。壺(２)の頸部の屈曲度からみて胴部上半がかなり張り出す形態が予想され、また頸部の櫛描Ｔ字文も２本一対のＴ字文という比較的定型化したものである点より、後期４段階に併行する可能性が高い。

61号住居址出土土器　（図52)

土器は床面出土と、覆土内に投棄されたものの２群に分離できるが、北陸系土器はすべて後者からの出土であ

る。床面出土土器群は壺の頸部文様が直線文のみで構成される点(1・6)を古い要素ととらえるならば、後期3段階に比定される可能性もあるが、(1)の頸部の屈曲が鋭い点やや問題を残す。また上層に投棄された高坏(17)は口縁部が水平に屈曲するタイプで3段階と考えられる点にも問題がある。明確な時期は不明であるが後期3～4段階の中で理解できよう。

100号住居址出土土器　(図77)

壺(1・2)の頸部文様が篦切りT字文である点古い要素ととらえられるが、(4)のように櫛描T文文が確立している点、(5)のように胴下半が内反りぎみに底部へ集約する箱清水型の壺が存在する点、ならびに壺口縁部内外面の篦磨き・赤彩手法が確立している点より後期3段階に併行する可能性が高い。

110号住居址出土土器　(図82)

壺(1・4)の胴上半がさほど張り出さず緩やかに口縁部に移行する点、ならびに甕(2)の胴部形態もさほど球胴化していない点より、後期3段階の中で把握しうる可能性が高い。

以上の検討よりすれば本遺跡出土の北陸系土器はおおよそ当地における後期3～4段階の中のある時期の土器群と共伴する可能性が非常に高いものととらえられる。従来より北信濃における箱清水式土器段階での北陸系土器の流入の可能性は指摘されてきたところであるが、今回出土の資料はまさにその傍証となろう。

また、かつて青木和明によって指摘された当地域における後期型高坏C類（青木和明1984）の坏部形態の変遷を考慮するならば、少なくとも4段階前半までは、猫橋式から法仏式前半に併行する北陸東北部各地の高坏坏部形態の変遷と軌を一にしている可能性が高い。C類高坏の出現は2段階にまでさかのぼる可能性は十分にあるが現状では3段階以降である。当地域における吉田式から箱清水式への移行を考える上で重要な時期であり、箱清水式土器を特徴付ける畿内型高坏の流入経路が北陸地方との関連でとらえられるとするならば、当地域におけ後期弥生土器様式研究の上で重要な視点となろう。ただし、加賀・能登地方の第7期もある程度の時期幅を持つようであり、これらの地方との厳密なクロスデーティングは富山・新潟地方との関連も考慮しつつさらに検討が必要とされることは言うまでもない。

最後に、本稿を草するにあったては新潟県教育庁文化財行政課　坂井秀弥氏、石川県立埋蔵文化財センター　栃木英道氏、富山県埋蔵文化財センター　上野　章氏、福井県埋蔵文化財センター　赤沢徳明氏　冨山正明氏にご教示を頂いた。記して感謝申し上げたい。

（千野　浩）

参考文献

栃木英道　1991「石川県（加賀・能登地域）の土器編年と東海系土器」第8回東海埋蔵文化財研究会資料

青木和明　1984「箱清水式土器の編年予察」『長野県考古学会誌』第48号

千野　浩　1989「千曲川水系における後期弥生式土器の変遷」『信濃』第41巻第4号

石川県立埋蔵文化財センター　1984　『鹿首モリガフチ遺跡』

石川県羽咋市教委　1991　『太田遺跡』

石川県立埋蔵文化財センター　1991　『押水町冬野遺跡群』

富山県上市町教委　1984　『北陸自動車道遺跡調査報告書－上市町木製品・総括編』

富山県教委　1984　『都市計画道路　七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(2)』

新潟県刈羽村教委　1992　『西谷遺跡』

3　本村東沖遺跡における古墳時代中期以降の土師器編年について

今回の調査では、古墳時代中期以降の住居址として確実なものでは56軒を検出している。善光寺平では古墳時代中期～後期初頭にかけての集落址の調査例は未だ僅少で、土器様相の変化についても不明瞭な部分が多い点よりすれば、今回出土の資料群の占める位置は重要である。以下、甕形土器の形態変化に着目し、浅川扇状地遺跡群出土資料を中心に当該期における暫定的な編年的見通しを立てておきたい。

1　甕形土器の型式分類試案

甕は本遺跡出土資料中においても普遍的な器種であり、また日常生活における煮沸機能を担う器種であるために、その消耗度の高さから最も敏感に型式変化を示す可能性の高い器種と指摘されている。しかし当該期の甕はその法量・形態にかなりの多様性を有し、資料的制約のある現状では各タイプの型式変遷を追及することは不可能に近い。よって小稿では、各細別器種ごとの細かい型式変遷を追及する作業の前段階として、出土土器の量的比率より見て、当該期において最も普遍的に煮沸形態として使用されていたと考えられる、中型のタイプについての基本的な型式変遷の過程を概念的に把握することを試みる。

本遺跡出土の甕形土器は、まず形態面では

A類：平底のもの

B類：丸底のもの（便宜的に丸底化を意識しているものも含める）

の2者に分類され、さらに外面の調整手法を加味するならば、外面ハケ調整を主体とするA類より、外面磨き調整を主体とするA'類が析出される。

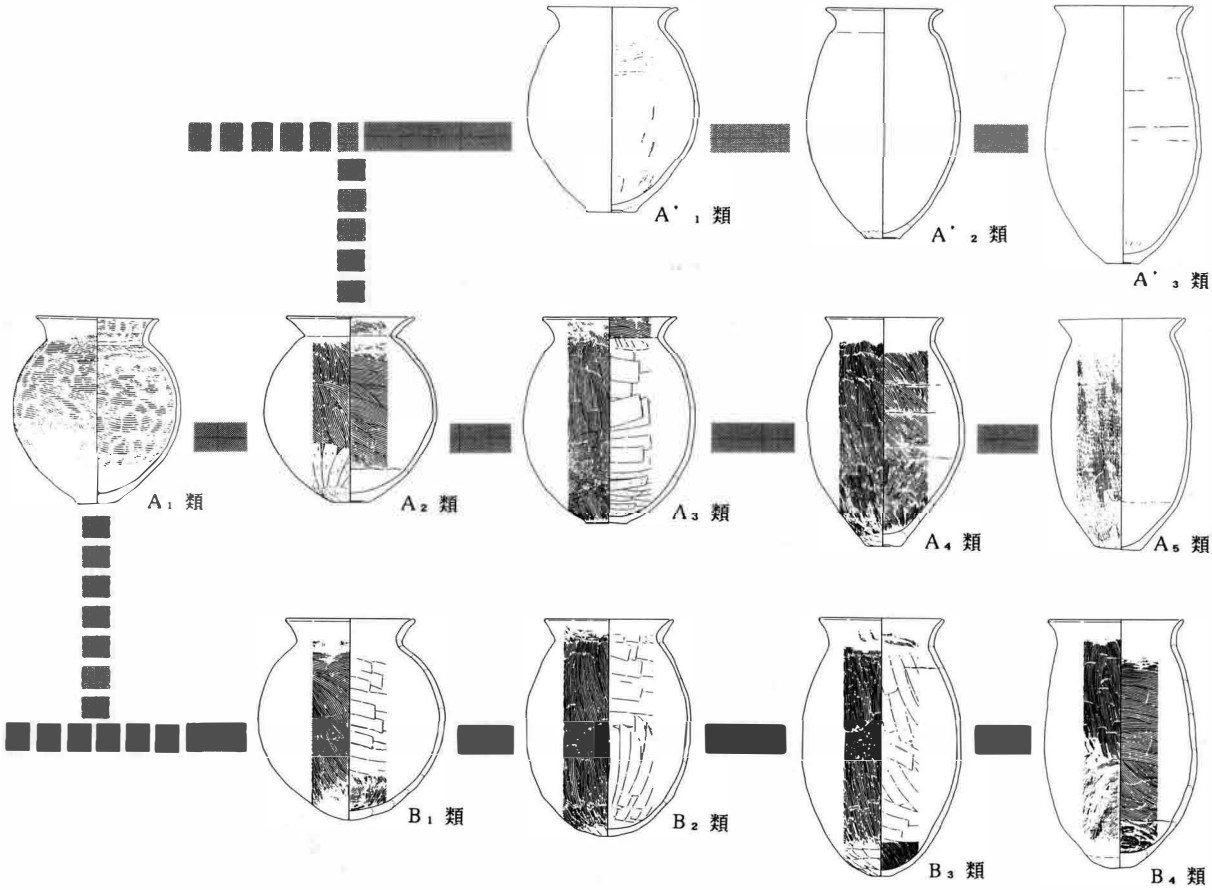


図172　甕形土器型式変遷概念図

これら各類は、主として胴部の長胴化を指標に以下のようにさらに細別される。

A類：平底ハケ整形甕

A_1類：胴中位に最大径を有し口縁部はくの字状に外反して終る。底部は若干突出気味である。

A_2類：胴中位に最大径を有し口縁部はくの字状に外反するが、A_1類に比べ胴部の球胴化が進む。

A_3類：胴中位に最大径を有するが、胴部の長胴化が開始する。

A_4類：胴中位に最大径を有するがA_3類に比してさらに長胴化が進行し、口縁部の屈曲も緩やかになる。

A_5類：長胴化の進行と共に胴部最大径が胴下半に移行する。

A_1類は古墳時代前期・灰塚1号住居址段階に確立したハケ調整平底甕（青木一男1989）の発展形態ととらえられるが、A_2類以降の系譜を直接求めうるかは、現状では不明である。またA_2類は胴下半に篦削りが行なわれ、技法的に異系列の可能性が高いが、将来的課題としたい。胴部形態の変化等よりA_1類→A_5類への型式変化を想定する。

B類：丸底ハケ整形甕

B_1類：胴中位に最大径を有し口縁部はくの字状に外反して終るもの。

B_2類：胴中位に最大径を有するが、胴部の長胴化が開始する。

B_3類：胴中位に最大径を有するが、B_3類に比して長胴化が進行し、口縁部の屈曲も緩やかになる。

B_4類：長胴化の進行と共に胴最大径が胴下半に移行する。

B_1類の系譜は現状では不明である。A類からの変化とも考えられるが、近年出土例の漸増している布留式甕もしくは布留傾向甕との関連も重視する必要がある。特に図173—53は、形態上B類とは系譜を異にする可能性が高く、布留傾向甕の直接的な形態変化として考えうる余地もあろう。今後の課題である。胴部の形態変化より一応B_1類→B_5類への変化を想定しておく。

A'類：平底磨き整形甕

A_3類以降の変化と基本的には同一の変化が予想され、A'_1類→A'_3類への変遷を想定しておく。

2　細分試案

前節では当該期の甕をA・B群に2大別し、それぞれの型式変化の方向性の概念的な把握を試みた。以下、甕形土器の型式変化を指標に、他の主要構成器種の変遷も考慮に加えつつ、単純に時間を区切る目安としての暫定的な「段階」設定を行なっておきたい（図173・174参照）。

第1段階　（篠ノ井遺跡群聖川堤防地点ＳＢ－118・ＳＤＺ－10出土土器）

甕A_1類が盛行する段階で、脚部が柱状にのびる畿内系高坏(12～15)の出現・定着期と言える。小型器台の末期的型式(10)や口縁に最大径を有する前期的な小型丸底土器の最終段階のものが存在する。

第2段階　（二ツ宮遺跡ＦＭ５区13号住居址出土土器）

甕A_1・A_2類の存在が予想されるが、B_1類が存在する可能性もある。小型丸底土器(26・27)は「和泉式」的といえる壺形の小型丸底土器が出現・定着する。高坏(28)も和泉式に通有の形態が定着するが、次段階のような形態の多様性は未だ認められない。器台の様相は不明であるが、供献・祭祀形態の土器群は、前期的な様相をほぼ払拭する段階ととらえられようか。

第3段階　（本村東沖遺跡14号・54号・55号住居址出土土器）

甕B_1類が確実に出現する。A類は不明だがA_2類の存在は当然予想される。前段階との大きな変化は、多様な形態の椀・坏・高坏類の出現にある。椀・坏類は半球形を呈するものが主体をなし、A類　口縁部が丸く終るもの(47)、B類口縁部が短く外析して内側に面を持つもの(48)、C類口縁部が短くくの字状に外反するもの(49)の3

タイプが出現し以後に継続する。高坏は前段階同様、柱状の脚部を持つもの(42・43)が主体を占めるが、坏部屈曲部に明瞭な突帯を有し脚部は「ハ」の字状の裾広がりの形態を取るタイプ(45)や、坏部屈曲部外面に段を有する(44)などが新たに出現する。小型丸底土器や器台もこの段階までは確実に残存する。また、壺形土器も比較的安定して存在している点、次段階とは異なる。

この段階に比定される駒沢祭祀遺跡出土資料（笹沢1982）などよりすれば、この段階に須恵器の影響下に出現する器種の存在する可能性も高い。

第４段階　（本村東沖遺跡26号・27号・30号・31号・37号・66号、二ツ宮遺跡ＦＭ１区１号住居址出土土器）

甕A_3類・A'_1類が出現し、B_2類の存在も予想される。またA_2類もこの段階まで残存する。カマドが出現することによって、甕胴部の長胴化が開始する段階といえる。浅川扇状地遺跡群では須恵器が集落より出土しはじめる段階でもあり、須恵器模倣の甑(57)・蓋(60・61)・坏(68)などが新たに出現する。また未だ量的には少ないものの、内面黒色処理された椀(74)・坏(75)なども出現する。高坏は基本タイプに大きな変化はないものの、各タイプとも坏部の内湾傾向が顕著となる。小型丸底土器および器台は基本的に消滅している。また壺類もその組成比を減ずる可能性が高い。

第５段階　（本村東沖遺跡103号住・７号土壙、二ツ宮遺跡ＦＭ１区９号住居址出土土器）

甕A_3類・B_2類が主体を占めることが予想されるが、資料的制約が多く不明な部分が多い。須恵器模倣の坏類(91～93)が量的に増加し、また定着する。高坏は３段階以来の基本タイプが残存するが、形態的には形骸化した感が強い。須恵器無蓋高坏の模倣品も出現する。椀・坏類の内面黒色処理技法も定着する。

第６段階　（本村東沖遺跡50号・51号・57号住居址出土土器）

甕A_4類・A_5類・B_3類・B_4類等の出現・定着段階である。３段階以降の和泉式的な高坏群が完全に消滅し、須恵器の形態にその系譜を求めうる新たな高坏群(107～110)が定着する段階でもある。椀・坏類は３段階以来の各タイプが残存するが、後期的な形態への変化を読み取ることができる。また須恵器模倣坏類も在地的に発展し、内面黒色処理技法も普遍化する。

今回設定した各段階は、器種構成の変化とともに他の諸要素の変化をも合わせ考えると、その中にいくつかの画期を見出すことができる。第１の画期は、柱状の脚部を有する畿内型高坏の出現ととらえられ、第１段階が相当する。第２の画期は、小型丸底土器の基本的消滅と須恵器・須恵器模倣土師器・黒色土器の出現であり、第４段階が相当する。浅川扇状地遺跡群におけるカマドの出現も現状ではこの段階と考えられる。第３の画期は、和泉式的高坏が完全に消滅し、須恵器模倣と考えられる新たな高坏の出現・定着であり、第６段階が相当する。また、第３段階における高坏・椀・坏類の多様な形態分化も、「須恵器指向型」への土器様式変化の一端として考えられよう。さらに、本遺跡出土の石製模造品類は第４段階以降に位置付けられるが、駒沢新町遺跡祭祀遺構出土の臼玉や石製模造品類を考慮するならば、第３段階以降祭祀面でも大きな変革が存在した可能性が考えられる。

以上、甕形土器の形態変化と他器種の変遷を考慮に加え、当該期の土器群を６段階に細分した。次ぎに、これら各段階の実年代について検討を行っておきたい。

本遺跡出土資料の中で、須恵器との確実な供伴関係が認められるものとしては31号住居址と57号住居址がある。第４段階の31号住居址出土土器はＴＫ208型式と、第６段階の57号住居址出土土器はＴＫ47型式と供伴している。他遺跡出土の須恵器をみると、第４段階に併行すると考えられる長野市牟礼バイパスＢ地点遺跡３号・４号・14号住居址ではＩ型式２～４段階に併行する須恵器が伴出しており（横山1986）、５段階に併行すると考えられる長野市二ツ宮遺跡ＦＭ１区９号住居址からはＩ型式４段階の須恵器が出土している（飯島1992）。また第３段階に併行すると考えられる駒沢新町遺跡出土の土師器甕には、ＴＫ73型式古段階と対応する篦描線刻文が描かれている

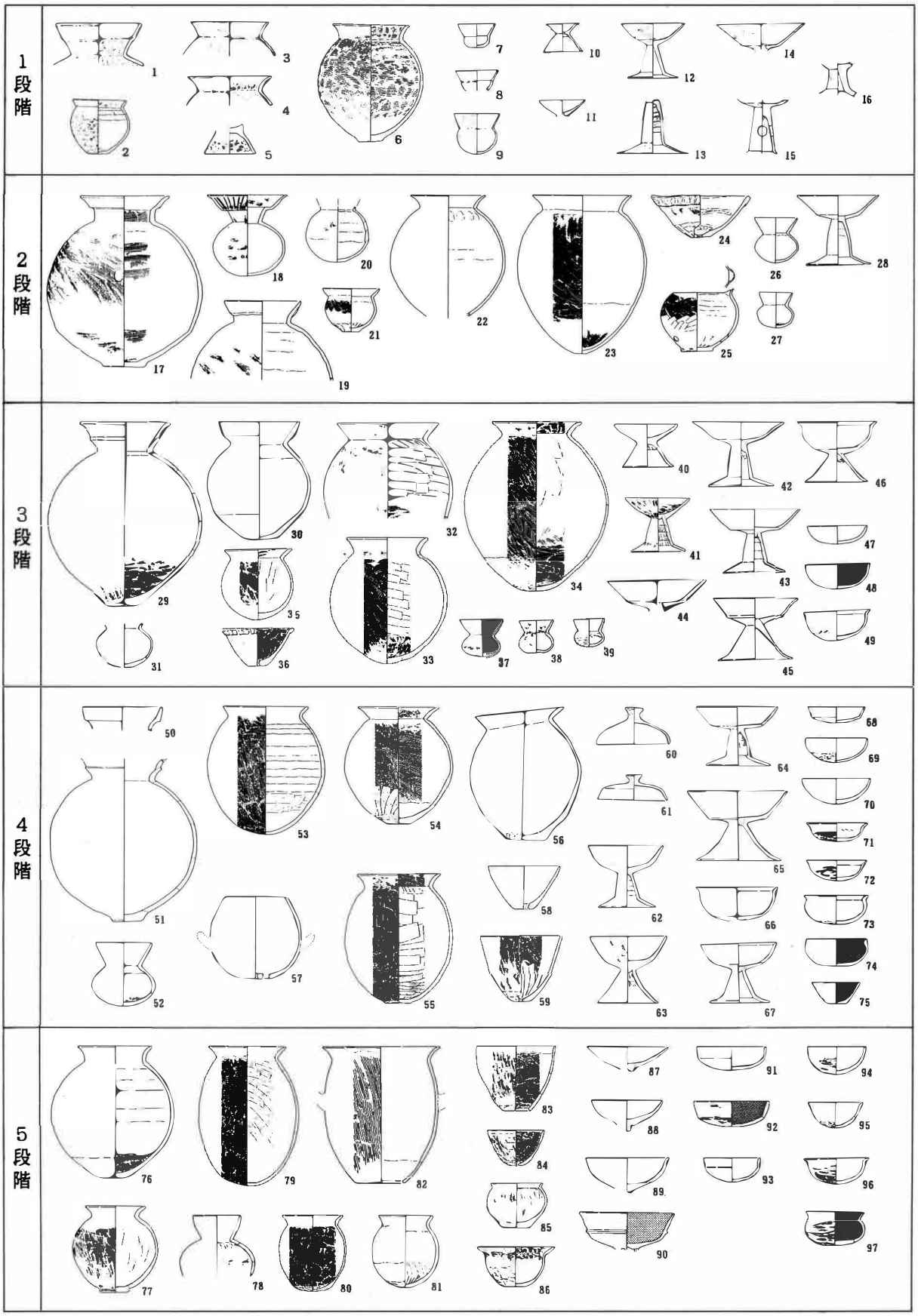


図173　土師器編年案①

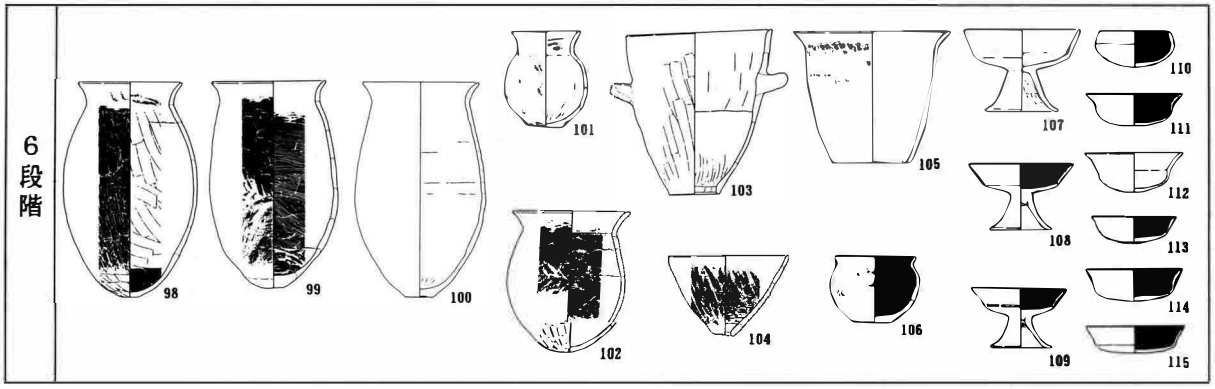


図174　土師器編年案②

（青木和明1987）。

以上の類例よりすれば、ＴＫ73型式の暦年代について五世紀前半にさかのぼらせる白石氏の説（白石1979）に従うならば、第３段階は五世紀第２四半期に、第４段階は五世紀第３四半期に、第５段階は五世紀第４四半期に、第６段階は五世紀末～六世紀初頭におおよそ比定することが可能かと考えられる。また先行する第１段階・第２段階については、それぞれ四世紀末、五世紀第１四半期との併行関係を想定しておきたい。

検証も経ないあいまいな型式変遷観をもとに、推論に推論を重ねてきた。小稿が今後の研究の叩き台となれば幸いである。最後に本稿を草するにあたっては前島卓氏にいろいろとご教示を得た。記して感謝したい。

（千野　浩）

引用参考文献

青木一男　1989「土器にみる森将軍塚古墳出現の前後」『長野県埋蔵文化財センター紀要』３

青木和明　1987「５　土口将軍塚古墳出土土師器の編年的位置」『土口将軍塚古墳』長野市・更埴市教委

飯島哲也　1992「１　二ツ宮遺跡１区９号住居址出土の須恵器について」

『浅川扇状地遺跡群二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』第１分冊　長野市教委

坂口　一　1987「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要』４　群馬県埋蔵文化財調査事業団

笹沢　浩　1982「駒沢新町遺跡」『長野県史』考古資料編全１巻（２）

笹沢　浩　1988「４　古代の土器」『長野県史』考古資料編全１巻（４）

白石太一郎　1979「近畿における古墳の年代」『考古学ジャーナル』164号

西　弘海　1979「西日本の土師器」『世界陶磁全集』２　日本古代

西　弘海　1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』

原　明芳　1989「長野県における黒色土器の出現とその背景」『東国土器研究』第２号

比田井　克仁　1988「南関東五世紀土器考」『史館』第20号

横山かよ子　1986「１　古墳時代中期須恵器について」『浅川扇状地遺跡群　牟礼バイパスＢ～Ｄ地点』

4　本村東沖遺跡出土の古式須恵器について

本遺跡から出土した須恵器は、そのほとんどが和泉陶邑窯編年（田辺1966、他）Ⅰ期の要素を有する古式須恵器である。このうち図示可能な31点について概観し、近年類例の増えている浅川扇状地出土の古式須恵器と関連付けながら、その内包する問題点について提起したい。

1　本村東沖遺跡出土須恵器の概要

（1）蓋坏（図175、1～9）

蓋2点、身7点が出土した。蓋1は天井部に丸みを持つが全体的に扁平で、器高のほぼ中央に上外方へ延びる太く明瞭な稜を有している。2の天井部は口径に比して高く丸みを持ち、器高のほぼ中央に回転ナデによりツマミだされた短い稜を持つ。身は底部扁平で口縁部立ち上がりが垂直に高く延びるもの（3・4）と内傾するもの（5・6・7）、底部の丸みが顕著で、比較的短い立ち上がりが垂直に延びるもの（8・9）の大きく3タイプが存在する。口縁端部は明瞭な段を有するもの（3・7・8・9）と弱い沈線を巡らせるもの（4）、丸く仕上げられるもの（5・6）とに分けられる。

天井部ないしは底部外面の調整は、稜・受部近くまで回転ヘラケズリを施しているもの（4・6・7）と天井部・底部の約1/3程度のもの（2・3・5・8・9）があるが、特に1は弱い手持ちヘラケズリを施した後スリケシている可能性もあり、古相を呈している。また稜ないしは受部の下部に工具による沈線を施し、意識的な区画を行なっているもの（1・3）がある。蓋身のセット関係については出土量が少ないため言及できないが、57号住居址共伴の蓋身（2・8）は消費段階でのセットとして該当するであろう。

5・7はそれぞれ30・31号住居址床面直上、6は15号住居址貯蔵穴より出土したが、3はA4区検出面で遺構には伴わない。形態的特徴からTK216型式～TK208型式に併行するもの（1・3・4）と、TK208型式～TK23型式に併行するもの（5・6・7）、TK47型式に併行するもの（2・8・9）の3期に分類できよう。

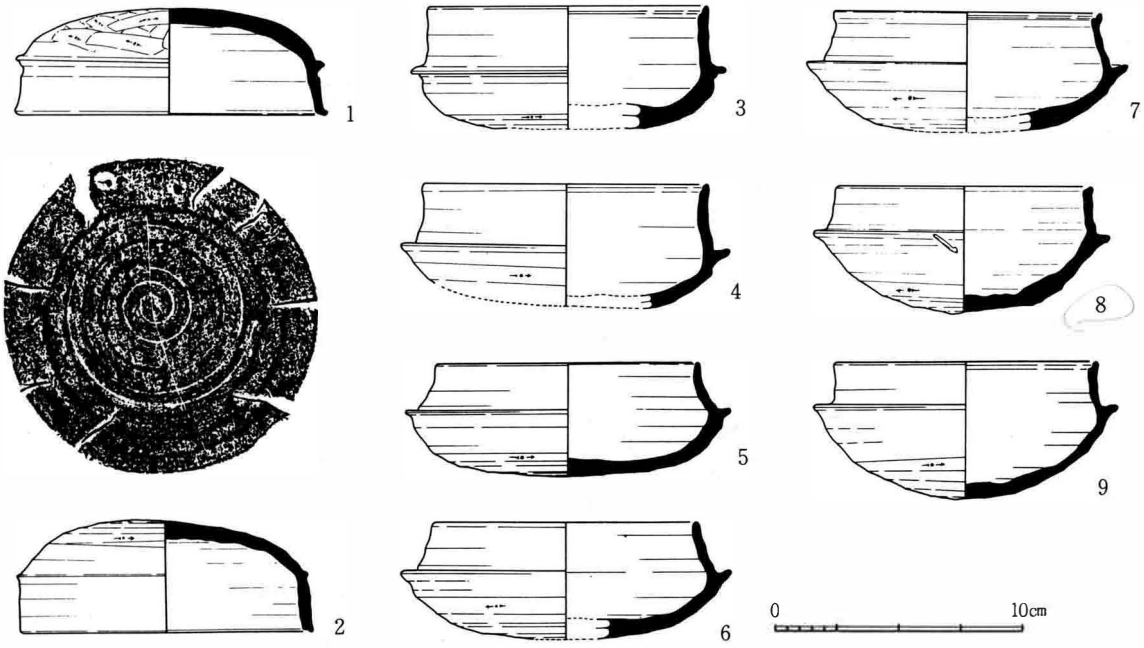


図175　本村東沖遺跡出土須恵器（蓋坏）実測図　（1：3）

(2)高坏　(図176、10・11)

無蓋高坏2点が出土しているが、11は細片からの強引な復元のため、他器種の可能性がある。10の坏部は比較的深く、口縁部立ち上がりは外反しながら長く延びている。把手は稜から回転ヘラケズリ部位に付されていた痕跡が残る。形態的特徴からＴＫ208型式に対応するものと思われる。

(3)甕　(図177、12・13)

口縁部の一部(12)と体部の一部(13)の破片のみである。12の外反する口縁部は端部でさらに上方へ丸くツマミ上げており、内側に凹線が巡る。ＴＫ208型式併行と思われる。13は小破片で詳細は不明。

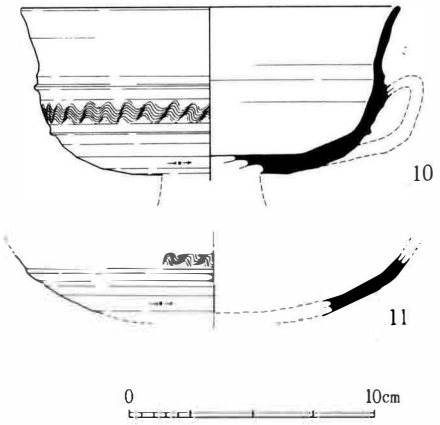


図176　須恵器（高坏）実測図　（1：3）

(4)壺・鉢　(図177、14～20)

全体が分かるものは少なくて全て破片資料であるが、長頸の直口壺5点、短頸壺1点、鉢1点を図示した。14は外面に退化傾向にある凸帯が巡り、その区画帯を粗雑で振幅の小さな波状文が2条施文される。15の波状文施文帯に把手らしき痕跡が残る。16の口縁部は丸く仕上げられ、肩は張らない。14～18はＴＫ208型式～ＴＫ23型式併行の要素を持つと考えられる。19・20については混入の可能性があり時期不明である。

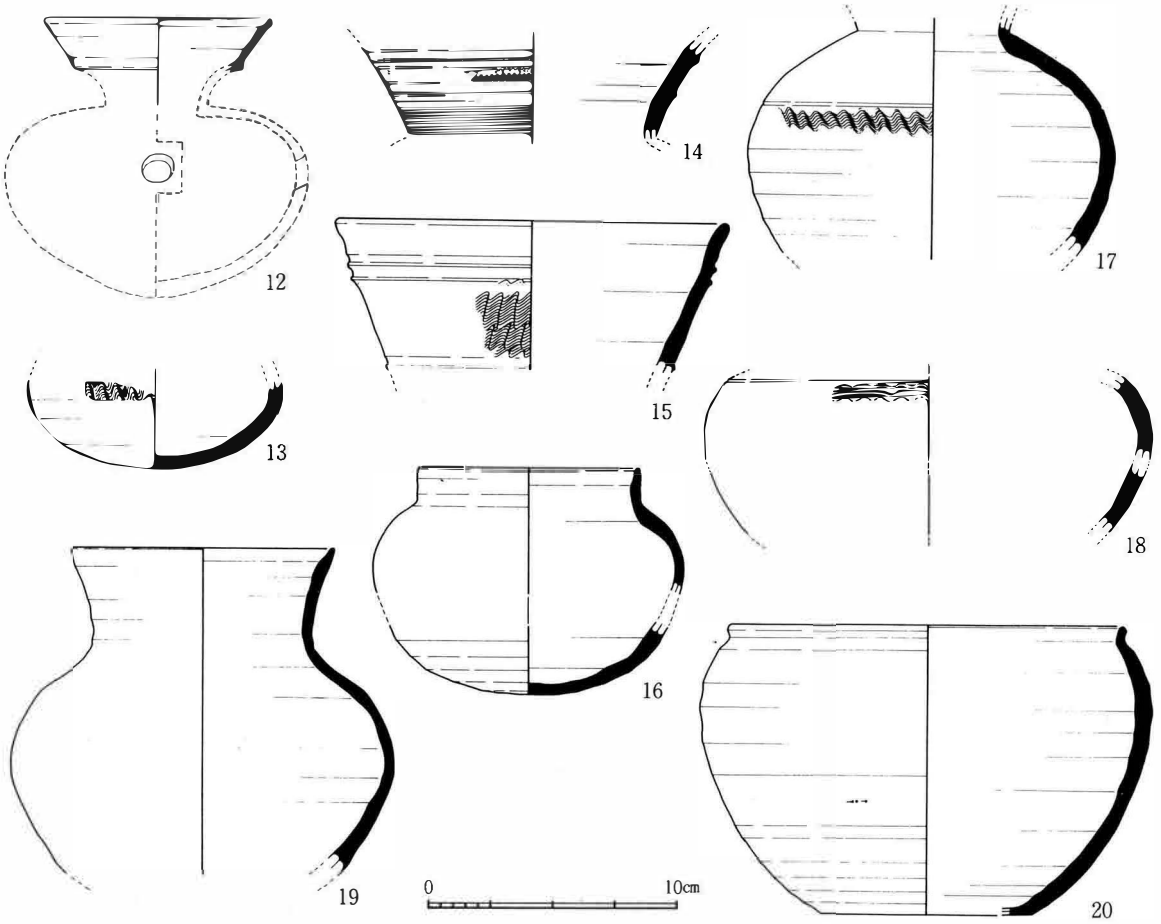


図177　本村東沖遺跡出土須恵器（甕・壺・鉢）実測図　（1：3）

(5)器台　(図178、21)

5号住居址より出土したもので台部破片のみである。台部は比較的浅く、口縁短部は上方へ丸く仕上げられている。外面には凹線によって生じた相対的な凸帯が5本巡る。外面は平行タタキ後スリケシている。基部に残るスカシ切り取りの痕跡から5方長方形スカシと推定できる。TK23型式併行と考えられる。

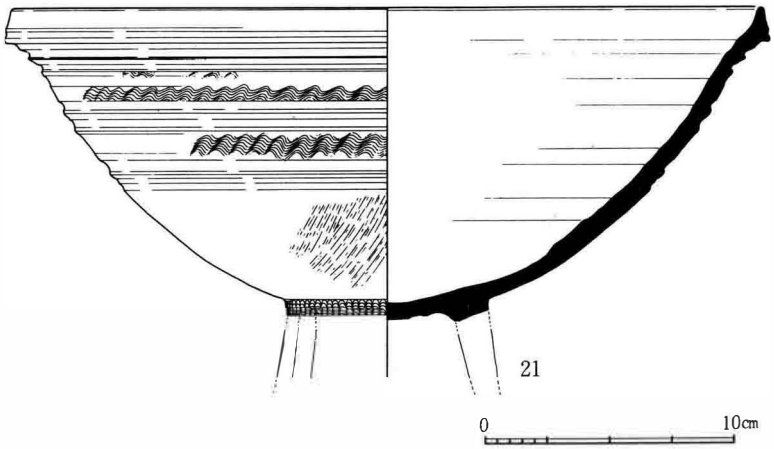


図178　本村東沖遺跡出土須恵器（器台）実測図　（1：3）

(6)甕　(図179、22～31)

口縁部破片5点(22・23・24・25・28)と頸部破片2点(26・27)を図示した。22～24の口縁部は穏やかに外反し、端部がシンプルに角張っているが、23は凹面を形成している。これらはTK216型式～TK208型式に対応するものと考えられる。頸部には粗雑な波状文を施文する26と回転ナデのみの27がある。25は壺口縁部の可能性も残る。28は大型甕口縁で、緩やかに外反しながら端部は丸く仕上げられていることからTK47型式併行と見られる。体部破片は75号住居址から出土した拓影3点を図示したが、26号住居址からも出土している。29は平行タタキ甕肩部に凹線が巡っている。30・31は格子状タタキおよび内面スリケシであるが、特に31の内面には非常に細かな青海波文のあて具らしき痕跡が残っている。これらはTK208型式を下ることはないであろう。

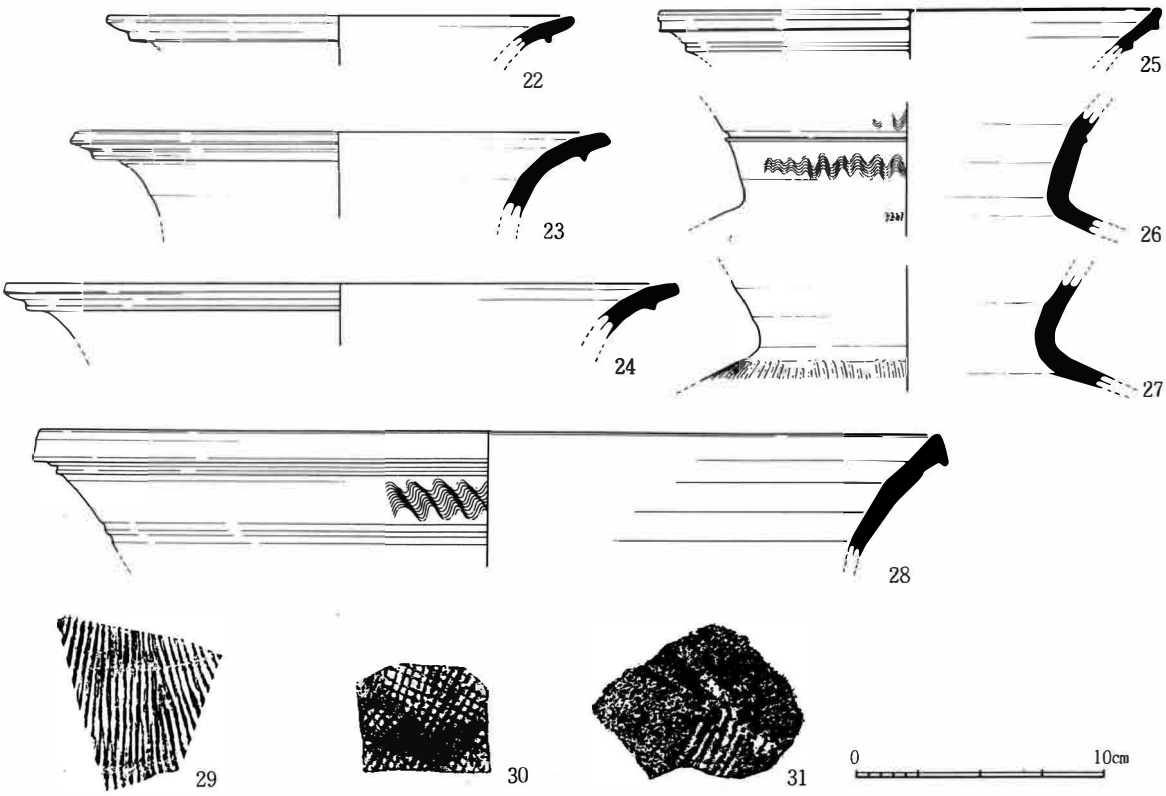


図179　本村東沖遺跡出土須恵器（甕）実測図・拓影　（1：3　31のみ原寸）

2　本村東沖遺跡出土須恵器の特質

出土した須恵器は、形態的特徴や製作技法等、和泉陶邑窯産と近似しているため、空間的・時間的ヒアタスは内包するものの、とりあえず形態的な特徴のみで和泉陶邑窯編年に対応させてその特質を考えてみたい。

出土した須恵器の胎土は、肉眼観察ではあるが基本的に全て同じような胎土を持っている。白色砂粒が多量に含まれ緻密である。焼成はおおむね良好・堅緻であるが、やや軟質の傾向にある。このことは断面の色調がサンドイッチ状になっていることからも窺える。図化個体のみながら器種組成をみると坏蓋２・坏身７・高坏２・壺６・瓶２・鉢１・器台１・甕10となり、甕が32.2%、蓋坏が29.0%と比重が大きいことが看取される。陶邑古窯跡群出土須恵器の組成比率では、開窯期は甕の圧倒的優位が目立つものの、陶邑窯中央化の進行に足並みを合わせて蓋坏生産量の増加傾向が指摘されている。本遺跡においても図化しえなかった甕体部破片の存在から、甕の組成比率はさらに大きくなるものと思われる。

今回出土した須恵器は、時期不明なものを除き全て陶邑窯編年Ｉ期の範疇に入るものと考えられる。すなわちＴＫ216型式からＴＫ47型式に限定されるものと思料され、主体はＴＫ208型式併行となろう。ＴＫ47型式併行以降には調査区近辺での集落形成は中絶するものと思われる。また、須恵器を出土する住居のほとんどにカマドが設置されている。浅川扇状地におけるカマドの出現が、当地にＴＫ208型式併行の須恵器が出現する時期をそう前後しない頃であろうと推定される。

本遺跡出土須恵器の生産地同定に関する興味深い特徴が看取できた。甕(31)体部内面には、丁寧にスリケシされてはいるものの青海波文らしき痕跡がわずかに認められ、非常に細かな同心円幅の単位を推定できる。これが木下氏によって指摘された松ノ山窯製品の２種ある調整の内の一つに近似するとすれば(木下1992)、関連性が窺えよう。ただし松ノ山窯は、短期間操業であると推測されることや、焼成が軟質で燈褐色を呈している遺物が、ＴＫ47型式からＭＴ15型式に対応すると考えられていること等、単純に比定できない現状がある。しかしながら善光寺平における初期須恵器の出土例増加や、その製作技法から初期須恵器窯の存在が推定されており、本遺跡出土資料もそれを裏付ける存在である可能性を有している。

3　本村東沖遺跡出土古式須恵器の提起する問題

浅川扇状地における古式須恵器の類例を関連付けて考えてみたい。牟礼バイパスＢ地点遺跡１・３・４・12・13・14号住居址は、坏・壺を中心とするＴＫ216型式からＴＫ23型式併行の須恵器（図180）を出土し、本遺跡と同様に各住居址に数点という状況である（横山1986)。下宇木遺跡５号住居址出土坏蓋（図181）はＴＫ208型式に対応するものと考えられる（矢口他1991)。二ツ宮遺跡ＦＭ１区９号住居址出土の無蓋高坏・大型瓶（図181）は

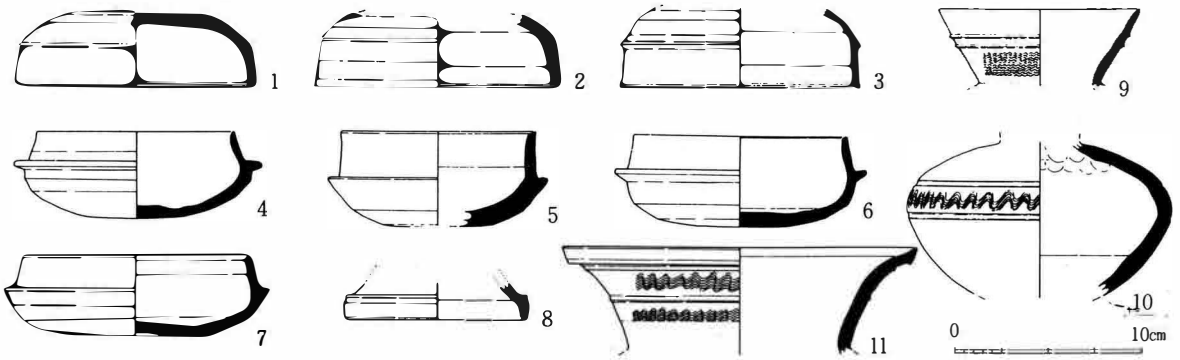


図180　長野市牟礼バイパスＢ地点遺跡出土須恵器実測図　（１：４）

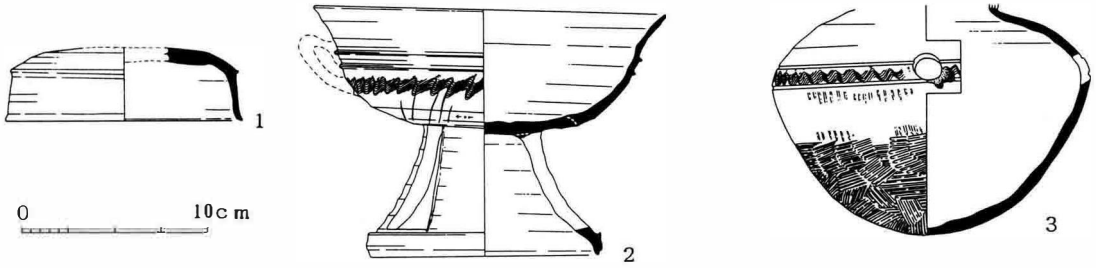


図181　下宇木遺跡５号住居址（１）、二ツ宮遺跡ＦＭ１区９号住居址出土須恵器実測図　（１：４）

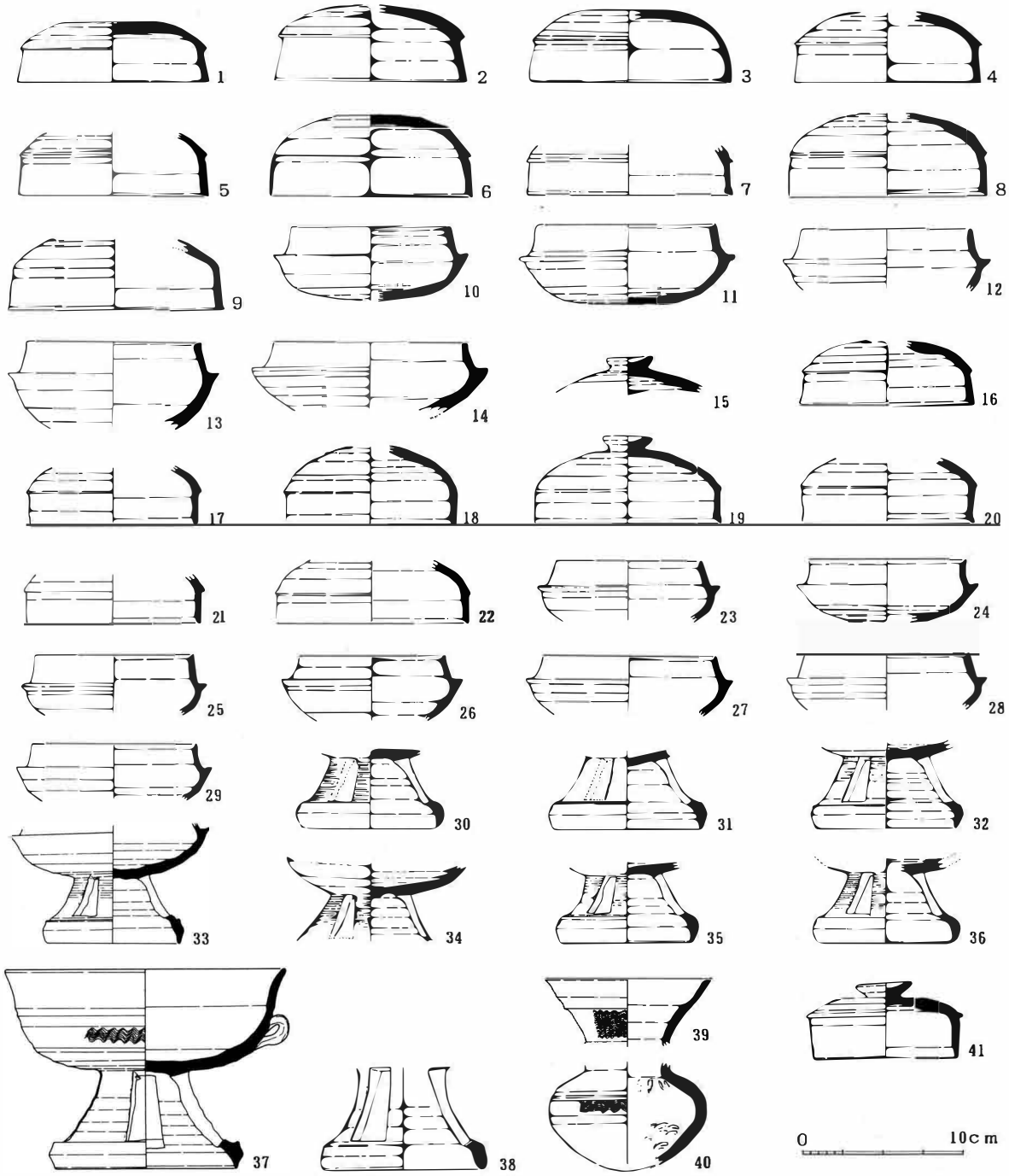


図182　地附山古墳群上池ノ平３号墳出土須恵器実測図　（１：４）

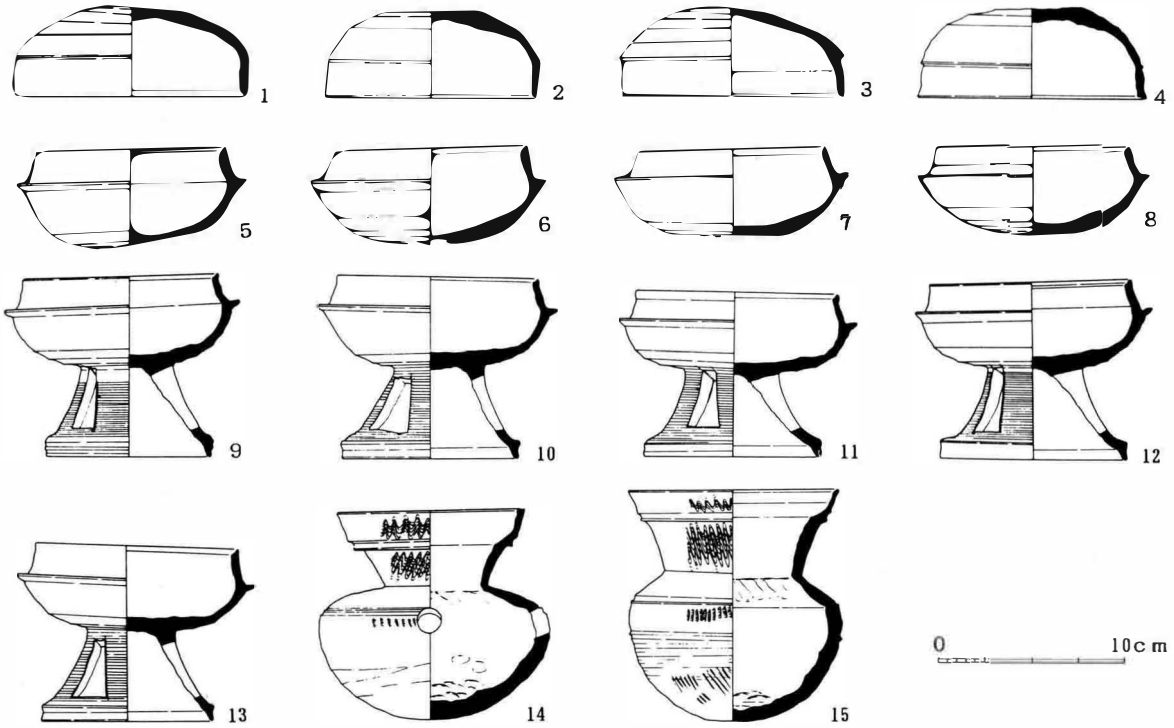


図183　地附山古墳群上池ノ平２号墳出土須恵器実測図　（１：４）

和泉陶邑窯製品に近似し、ＴＫ23型式併行と考えられる。これら浅川扇状地全域において複数型式に亘る古式須恵器を数点所有する住居址が散見される状況は、どのような政治的背景に起因するものであろうか。

地附山古墳群は、盟主的な地附山前方後円（方）墳と上池ノ平１～６号墳から構成される（青木他1988）。眼下に展開する本遺跡とは、約300mもの比高差を有し浅川扇状地を眺望する。このうち上池ノ平３号墳はＴＫ23型式併行の蓋坏・高坏を主体とする一群（図182）が遺棄されていた。２号墳の土器埋納坑出土須恵器の一群（図183）は、蓋坏・有蓋高坏を主とするＴＫ47型式併行と見られる。しかし上池ノ平古墳群出土の須恵器群はいずれもＴＫ208型式からＴＫ47型式の要素を含む型式幅を有しており、本村東沖遺跡資料とほぼ合致するもののわずかに後出する感がある。胎土は白色砂粒を多量に含み、本遺跡と同じ可能性も考えられる。ただ上池ノ平２・３号墳出土須恵器の胎土分析によると「大阪陶邑産の可能性が高い」とあり、前述した在地窯存在に否定的根拠となっている。以上のことから地附山古墳群と本遺跡は、全く無関係である要素は少ないと思われる。古墳に葬られたであろう中小首長と何らかの関係で結び付いていた人々の生活域の所在について、一つの有力な候補地として本遺跡を挙げることが出来よう。

古式須恵器の流入あるいは須恵器生産の導入に関して、和泉陶邑窯を掌握していた畿内勢力と各地域の政治勢力との動向は、きわめて密接なつながりを持っていることは既に先学の成果によるところである。ともすれば、陶邑窯産製品的な形態的特徴を有する浅川扇状地における古式須恵器の存在が、当地一帯を支配していた中小首長の政治的卓越を仮想する一助になりはしないか。

善光寺平全域に目を向けてみよう。善光寺平北部中野市域では最近長野県埋蔵文化財センターによる県道バイパス造成に伴う栗林遺跡の発掘調査で古手の須恵器が出土しているという。詳細は正式報告を待ちたいが初期須恵器と見られており、付近に存在するＴＫ216型式併行の無蓋高坏・瓶を出土した七瀬古墳群第５号墳とのなんらかの関連が考えられる。古墳出土例ではこのほか金鎧山古墳、紫岩古墳がある。善光寺平南部千曲川右岸では森２号墳、古墳以外の可能性がある四ツ屋祭祀（古墳）遺跡、城の内遺跡が挙げられる。これら出土須恵器（陶質

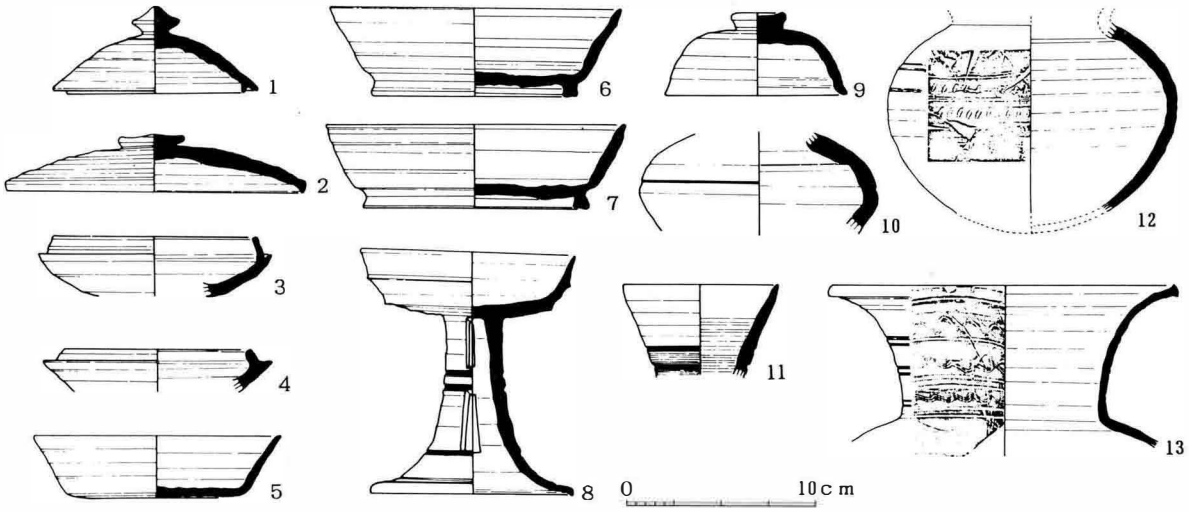


図184　湯谷古墳群第１号墳出土須恵器実測図　（１：４　12・13のみ１：８）

土器）の詳細については既に木下氏の論考がある（木下前掲）。上記２地域には若干後出する問題が残るものの、浅川扇状地を含めた３地域がいかなる政治的情勢の中にあったのか興味は尽きない。

この他大きな問題点として、調査区周辺ではＴＫ47型式以降集落形成が中絶するであろうことは前述したが、本遺跡の北方約800mに所在した湯谷古墳群第１号墳からは、ＴＫ10型式新段階からＴＫ43型式併行およびそれ以降の須恵器の一群（図184）が出土している（矢口他1981）。この半世紀以上の空白、さらに本遺跡で次代に集落が営まれる奈良・平安時代までの間隔をどのようにとらえるべきであろうか。

以上思いつくまま問題点を列挙したに過ぎないが、詳細は今後事例の蓄積を待つより他はない。浅川扇状地のみならず、善光寺平での初期須恵器の在り方について、内在する問題点は多い。

（飯島　哲也）

引用参考文献

木下　亘　1992　「３　長野県下出土の古式須恵器概観」『史跡森将軍塚古墳』更埴市教育委員会
笹沢　浩　原田勝美　1947　「長野県下出土の須恵器（上）」『信濃』第26巻第９号
田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』研究論集第10号　平安学園考古学クラブ
田辺昭三　1981　『須恵器大成』　角川書店
千野　浩他　1992　『浅川扇状地遺跡群二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』第１分冊　長野市教委
中村　浩　1978　「第６章和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑III』　大阪府教委
中村　浩　1981　「須恵器生産の諸段階　地方窯成立に関する一試考」『考古学雑誌』第67巻第１号
西山克己　1988　「信濃国で須恵器が用いられ始めた頃」『信濃』第40巻第４号
矢口忠良他　1981　『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』　長野市教委
青木和明他　1988　『地附山古墳群』　長野市教委
矢口忠良他　1991　『栗田城址・下宇木遺跡・三輪遺跡（２）』　長野市教委
横山かよ子　1986　「１　古墳時代中期須恵器について」『浅川扇状地遺跡群牟礼バイパスＢ～Ｄ地点』
長野市教委

5　本村東沖遺跡出土の祭祀遺物

（1）　36号住居址出土の石製模造品について

36号住居址からは石製模造品が125点出土している。すべて滑石製の未製品である。そして125点いずれにも両面に擦痕がみられているが、穿孔されたものは1例もなく、石製模造品製作工程のうちの研磨段階に位置する未製品と理解できる。未製品であるため、その器種の区別は容易ではないが、管見によれば1～98までは剣形品、99～120までが勾玉、そして121～125までは有孔円板のそれぞれ未製品ではないかと考えられる。剣形品に含めたうち62は有孔円板の可能性もあろうか。いずれにせよ剣形品、勾玉、有孔円板の3種が認められているのである。このうちで最も数が卓越しているのは剣形品であるが、剣形品については『神坂峠』において椙山林継氏がA類・B類・C類の3種に分類している[1]。つまり両面に鎬を有するものをA類、片面に鎬を有し、他面は水平であるものをB類、両面とも鎬がなくて水平であり板状を呈するものをC類と分類したわけであるが、本址の例はいずれもC類に該当し、しかもほとんど柄部が失われて剣身部のみしか認められない。長さや幅には個体差がみられるものの、厚さは研磨段階にあるせいなのか、0.2～0.4㎜とほぼ均一である。また勾玉についてもすべて扁平円板状を呈するものである。有孔円板については、そもそも有孔円板自体が「円形が比較的多いが時には楕円形や、不整多角形、方形、長方形等があって、それらを一括して有孔円板と呼ぶのは些か不当である」[2]との大場磐雄氏の指摘にもあるように、その形状の多様性のため、とりわけ未製品の識別は難しく、本址の場合も剣形品である可能性も残されていよう。

さて、本址は石製模造品の未製品が多量に出土していること、またおそらく研磨作業に用いられたと思われる砥石が共伴していることから、石製模造品の製作工房址としての性格が色濃い。

寺村光晴氏によれば、石製模造品の製作遺跡には、石製模造品のみを製作している遺跡（以下、これを石製模造品製作A類型遺跡と呼ぶ）と、碧玉質玉類とともに石製模造品も製作している遺跡（以下、これを石製模造品製作B類型遺跡と呼ぶ）の2つの類型に大別できるという[3]。そして石製模造品製作B類型遺跡では、単位集団内の時期を同じくする竪穴のほとんどすべてが生産に関係し、工房址群として把握されているのにたいして、石製模造品製作A類型遺跡は、単位集団内のいくつかの特定竪穴内においてのみ製作が実施されている場合が多いことを指摘する。本遺跡は石製模造品製作A類型遺跡として理解でき、そして工房址として認められるのは36号住居址のみである。

しかしながら本址には他の石製模造品製作遺跡とは異なる点がみられるのも事実である。寺村氏は石製模造品の製作工房址には次のような特徴があげられるという。

①工房址は大きさ、形態などにおいて、当該期の竪穴住居となんら異なるところがない。

②壁玉質玉類製作の工房址において検出されている工作用ピットのような顕著さを示さないものの、同様な意義を有するであろうと推定される大型ピットが存在する。

③石製模造品製作A類型遺跡においては、一般には剣形品、有孔円板、臼玉の3種およびこれに勾玉を加えた4種が製作されている。

などである。本住居址では平面プランが7.30×7.50mとやや大型ではあるが①についてはほぼ当てはまっている。しかしながら②については間仕切り溝によって区画された高さ10㎝ほどのベッド状部分は検出されているものの、工作用ピットは見当たらない。また工房址にはつきものの原石、剥片、屑片などもまったく検出されていない。一方、石製模造品の組成に関しては、剣形品を中心として有孔円板、勾玉が見られるものの、臼玉の出土は認められていない。

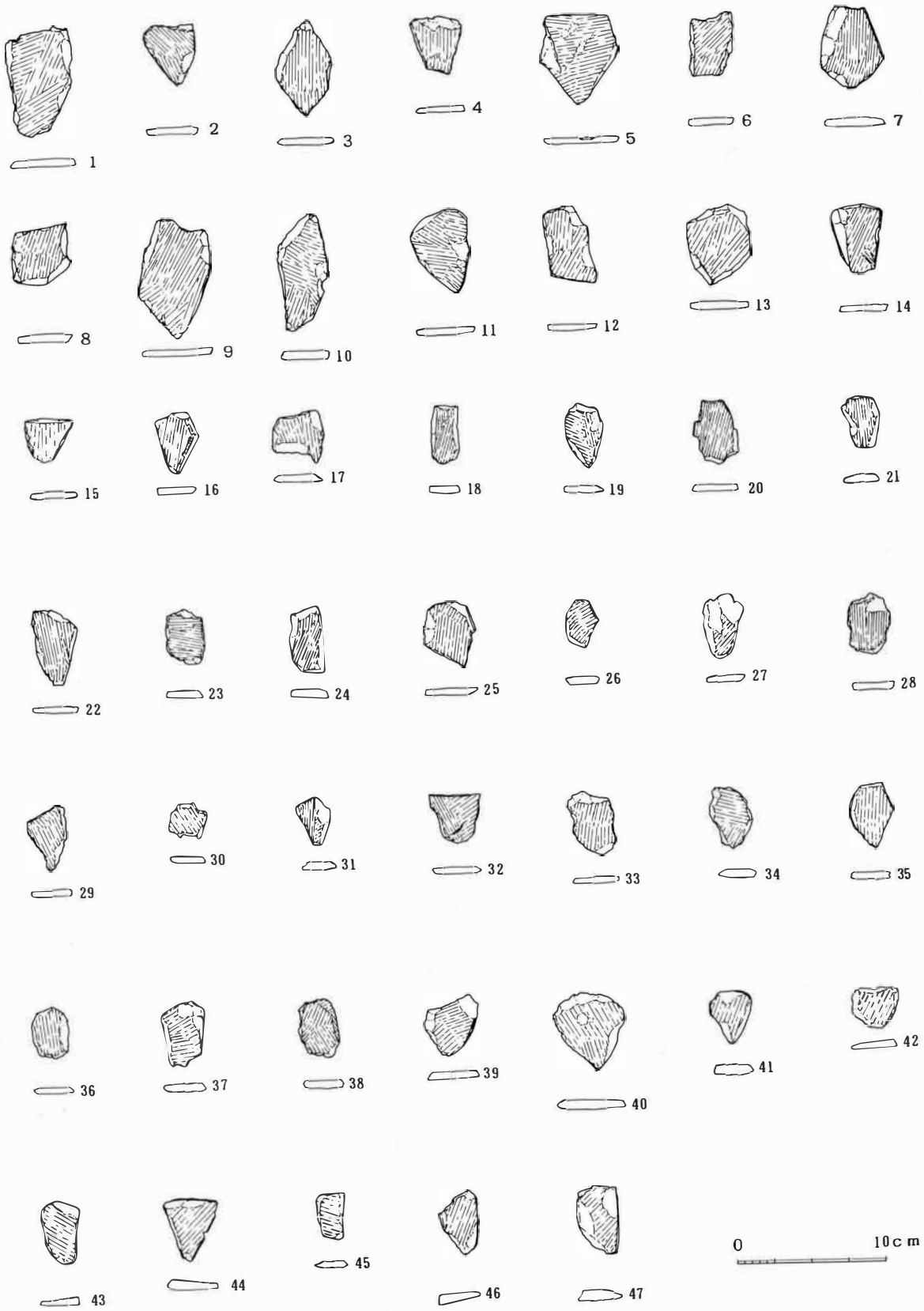


図185　36号住居址出土石製模造品未製品実測図①　（1：2）

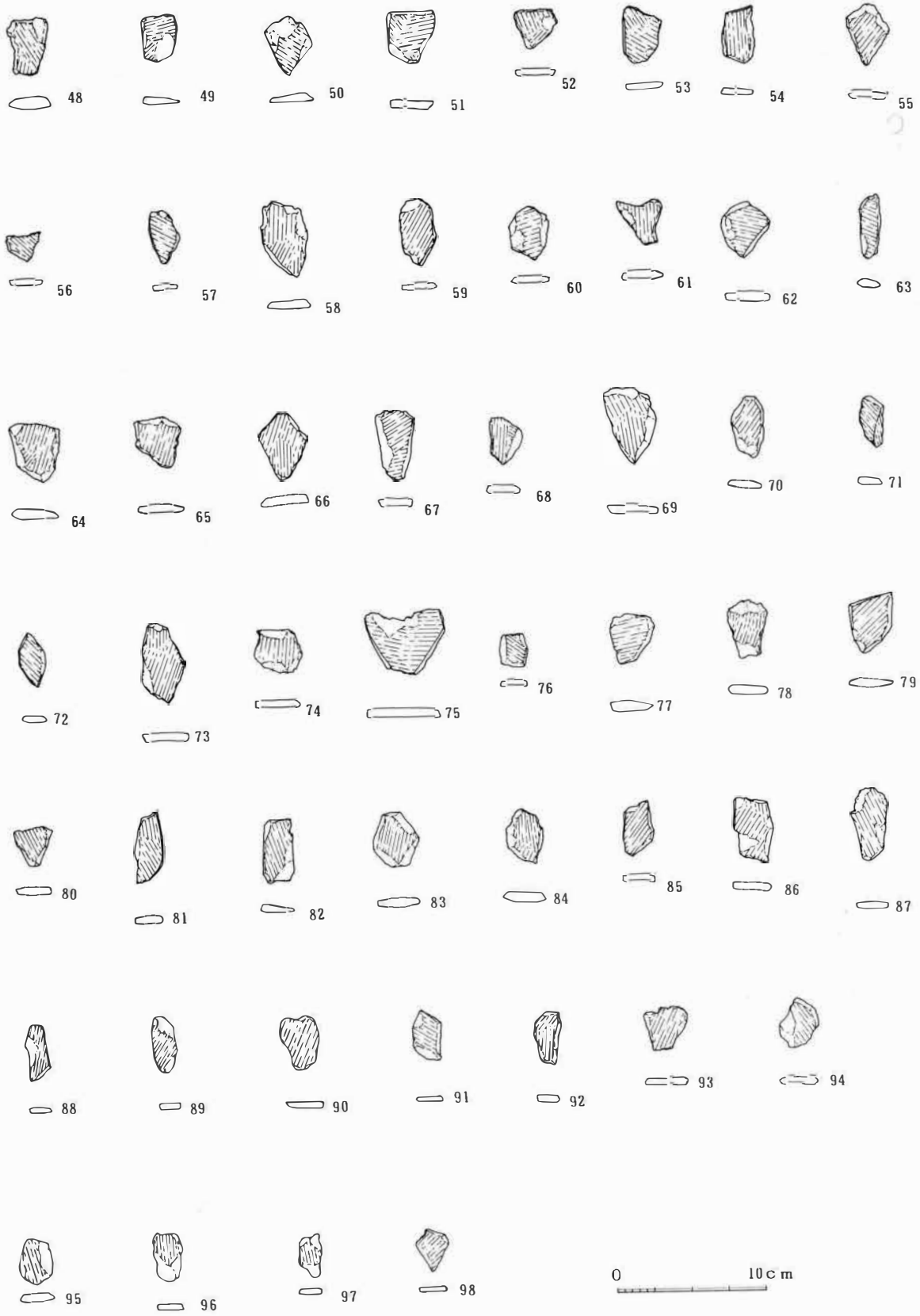


図186　36号住居址出土石製模造品未製品実測図②　（1：2）

図187　36号住居址出土石製模造品未製品実測図③　（1：2）

以上のように本址からは、(1)原石や剝片等が認められないこと、(2)工作用ピットも検出されていないこと、などが指摘できるわけだが、これは本址では荒割および形割作業は行われていなかったことを示すものであろう。しかしながら本址には砥石の出土が確認されている。砥石および未穿孔の石製模造品という二者の存在は、つまり本址においては石製模造品製作工程のうち研磨作業が行われていたことを想定させる。とするならば本址では研磨作業のみを行っていたものと理解することができないだろうか。いうなれば研磨作業工房址とでもいうべき住居址であろうか。研磨作業の後、引き続いて本址で穿孔作業が行われたのかどうかは不明であるが、125点が全く同じ作業段階にあることは、穿孔作業はまた別な場所で行われていた可能性も十分に考えられる。さらに推測を重ねれば、本遺跡においては各工程段階ごとに異なった工房址で作業が行われたのではないかという仮説も立てられよう。もちろん、そもそも本址を工房址としてとらえることに無理があるのかもしれない。しかしながら穿孔以前の多数の未製品が出土していること、また砥石も伴出していることなどを踏まえれば、その規模の大小はともあれ工房址として理解するのが自然であり、石製模造品の製作にはある種の分業が行われたということも看過できない可能性として考慮すべき問題ではないだろうか。

したがって、筆者は本址を石製模造品製作工房址として理解したい。しかもここでは研磨段階のみが確認されるものであり、本遺跡における石製模造品製作にはある種の分業が存在していたのではないかという仮説を提出しておきたい。最後に剣形品について考察してみたい。本址では剣形品の出土がきわめて多い。寺村氏によれば、石製模造品製作B類型遺跡では、剣形品の出土をみないという。また佐々木幹雄氏は、剣形品が有孔円板とともに長野県以東かつ太平洋岸に密集していることを指摘する(4)。寺沢知子氏は千葉県を例にあげながら、有孔円板と剣形品は「盛行期は和泉期に認められ、遺跡の動態からみても、和泉期の集落形成開始に特にかかわった、歴史的意義を見いだしうる祭祀具であった可能性」を想定している(5)。このように剣形品には他の石製模造品と比べてその生産及び分布・動態に特徴が見られる。現在の筆者にはその持つ意味を論ずることはできないが、本址がその剣形品を中心に生産していたことを踏まえれば、本址の性格を理解する上でも興味深い視点であることを示唆しておきたい。

以上、36号住居址から出土した石製模造品の考察を行ってきた。本址は5世紀第III四半期から第IV四半期に比定されるわけだが、同じ浅川扇状地遺跡群ではTK216型式およびTK208型式段階の牟礼バイパスB地点遺跡などで石製模造品の出土をみる。善光寺平は県内でも石製模造品を出土する集落遺跡が多くみられる地域である。生産遺跡としての本遺跡が調査されたことにより、今後はより有機的な研究が期待される。本遺跡はその大きな鍵を握る遺跡として、きわめて重要な位置を占めることになるだろう。

(桜井　秀雄)

引用参考文献

(1)椙山林継　1969　「第三章神坂峠出土遺物の研究　第一節石製模造品」『神坂峠』阿智村教委
(2)大場磐雄　1962　『武蔵伊興』國學院大学考古学研究報告第2冊
(3)寺村光晴　1980　『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館　以下寺村氏の引用はこれによる
(4)佐々木幹雄　1985　「子持勾玉私考」『古代探叢』II
(5)寺沢知子　1990　「石製模造品の出現」『古代』90

表22　石製模造品未製品計測表①

番　号	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	材　質	重さ（g）
1	剣	3.7	2.3	0.2	滑　石	4.0
2	剣	2.1	1.7	0.2	滑　石	1.4
3	剣	3.2	1.8	0.3	滑　石	3.0
4	剣	1.9	1.7	0.2	滑　石	1.3
5	剣	3.0	2.5	0.2	滑　石	3.6
6	剣	2.2	1.5	0.3	滑　石	1.5
7	剣	2.8	2.2	0.3	滑　石	2.8
8	剣	2.0	2.0	0.3	滑　石	2.3
9	剣	3.9	2.4	0.3	滑　石	4.6
10	剣	3.8	1.7	0.3	滑　石	3.6
11	剣	2.8	2.0	0.2	滑　石	2.3
12	剣	2.6	1.7	0.2	滑　石	1.8
13	剣	2.7	2.0	0.3	滑　石	2.5
14	剣	2.2	1.7	0.3	滑　石	1.7
15	剣	1.5	1.6	0.3	滑　石	1.0
16	剣	2.1	1.4	0.3	滑　石	1.2
17	剣	1.8	1.7	0.3	滑　石	1.2
18	剣	2.0	0.9	0.3	滑　石	1.0
19	剣	2.2	1.3	0.3	滑　石	1.1
20	剣	2.2	1.5	0.2	滑　石	1.3
21	剣	1.3	1.7	0.2	滑　石	0.8
22	剣	2.4	1.6	0.3	滑　石	1.7
23	剣	1.9	1.2	0.3	滑　石	1.2
24	剣	2.2	1.5	0.2	滑　石	1.4
25	剣	2.3	1.7	0.2	滑　石	1.7
26	剣	1.7	1.2	0.3	滑　石	0.5
27	剣	2.2	1.4	0.3	滑　石	0.9
28	剣	2.0	1.3	0.3	滑　石	1.1
29	剣	2.2	1.4	0.3	滑　石	1.0
30	剣	1.3	1.2	0.3	滑　石	0.5
31	剣	1.7	1.0	0.3	滑　石	0.6
32	剣	1.6	1.6	0.2	滑　石	1.0
33	剣	2.3	1.4	0.2	滑　石	1.0
34	剣	2.1	1.3	0.3	滑　石	1.4

表23　石製模造品未製品計測表②

番　号	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	材　質	重さ（g）
35	剣	2.1	1.4	0.2	滑　石	1.4
36	剣	1.7	1.3	0.2	滑　石	1.0
37	剣	2.2	1.5	0.3	滑　石	1.1
38	剣	2.0	1.4	0.3	滑　石	1.4
39	剣	1.8	1.7	0.2	滑　石	1.3
40	剣	2.7	2.2	0.3	滑　石	2.3
41	剣	1.7	1.4	0.3	滑　石	0.8
42	剣	1.4	1.5	0.2	滑　石	0.8
43	剣	2.2	1.3	0.2	滑　石	1.2
44	剣	2.1	1.7	0.3	滑　石	1.6
45	剣	1.5	1.0	0.2	滑　石	0.6
46	剣	1.9	1.4	0.3	滑　石	1.3
47	剣	2.3	1.7	0.4	滑　石	1.3
48	剣	2.0	1.4	0.4	滑　石	1.1
49	剣	1.6	1.0	0.2	滑　石	0.8
50	剣	2.0	1.6	0.3	滑　石	0.9
51	剣	1.8	1.6	0.3	滑　石	1.5
52	剣	1.3	1.4	0.3	滑　石	0.5
53	剣	1.8	1.3	0.2	滑　石	0.9
54	剣	1.9	1.1	0.2	滑　石	0.9
55	剣	1.4	1.4	0.2	滑　石	0.2
56	剣	1.0	1.1	0.2	滑　石	0.5
57	剣	0.9	0.9	0.2	滑　石	1.7
58	剣	2.6	1.4	0.3	滑　石	1.0
59	剣	2.2	1.2	0.3	滑　石	1.0
60	剣	1.7	1.4	0.3	滑　石	0.9
61	剣	1.8	1.5	0.3	滑　石	1.1
62	剣	1.8	1.7	0.3	滑　石	0.6
63	剣	2.2	0.6	0.3	滑　石	1.4
64	剣	2.1	1.6	0.3	滑　石	1.2
65	剣	1.7	1.6	0.3	滑　石	1.4
66	剣	2.2	1.7	0.3	滑　石	1.5
67	剣	2.3	1.3	0.3	滑　石	0.7
68	剣	1.7	1.2	0.2	滑　石	1.4

表24　石製模造品未製品計測表③

番　号	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	材　質	重さ（g）
69	剣	2.6	1.8	0.3	滑　石	2.2
70	剣	2.1	1.1	0.2	滑　石	0.7
71	剣	1.7	0.9	0.3	滑　石	0.4
72	剣	1.8	0.8	0.3	滑　石	0.4
73	剣	2.7	1.4	0.3	滑　石	1.8
74	剣	1.6	1.5	0.3	滑　石	1.0
75	剣	2.3	2.6	0.4	滑　石	2.7
76	剣	1.1	1.0	0.3	滑　石	0.4
77	剣	1.7	1.5	0.4	滑　石	1.0
78	剣	2.0	1.3	0.3	滑　石	0.8
79	剣	2.1	1.5	0.3	滑　石	1.3
80	剣	1.3	1.2	0.3	滑　石	0.6
81	剣	2.3	0.9	0.3	滑　石	1.0
82	剣	2.3	1.1	0.3	滑　石	1.0
83	剣	1.8	1.3	0.3	滑　石	1.2
84	剣	1.9	1.3	0.4	滑　石	1.9
85	剣	1.9	1.1	0.2	滑　石	0.8
86	剣	2.2	1.4	0.3	滑　石	1.3
87	剣	2.4	1.1	0.2	滑　石	0.9
88	剣	1.9	0.9	0.2	滑　石	0.4
89	剣	1.9	0.7	0.2	滑　石	0.6
90	剣	1.8	1.3	0.2	滑　石	0.9
91	剣	1.7	1.0	0.2	滑　石	0.5
92	剣	1.8	0.9	0.2	滑　石	0.6
93	剣	1.5	1.5	0.3	滑　石	0.9
94	剣	1.6	1.4	0.2	滑　石	0.7
95	剣	1.5	1.1	0.3	滑　石	0.7
96	剣	1.6	1.0	0.2	滑　石	0.5
97	剣	1.5	0.8	0.2	滑　石	0.3
98	剣	1.4	0.9	0.2	滑　石	0.3
99	勾　玉	4.0	1.5	0.2	滑　石	3.5
100	勾　玉	3.8	2.0	0.2	滑　石	4.2
101	勾　玉	3.1	1.6	0.2	滑　石	2.8
102	勾　玉	2.7	2.1	0.2	滑　石	1.5

表25　石製模造品未製品計測表④

番　号	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	材　質	重さ（g）
103	勾　玉	3.1	1.9	0.2	滑　石	3.4
104	勾　玉	2.2	2.0	0.2	滑　石	1.5
105	勾　玉	2.7	1.7	0.2	滑　石	2.1
106	勾　玉	3.2	1.7	0.3	滑　石	2.9
107	勾　玉	2.5	1.1	0.2	滑　石	1.4
108	勾　玉	3.0	1.3	0.3	滑　石	1.8
109	勾　玉	3.3	1.7	0.3	滑　石	3.1
110	勾　玉	2.2	1.4	0.3	滑　石	1.0
111	勾　玉	2.3	1.3	0.3	滑　石	1.0
112	勾　玉	2.6	1.4	0.3	滑　石	1.5
113	勾　玉	2.4	1.4	0.3	滑　石	1.1
114	勾　玉	1.7	1.1	0.2	滑　石	0.6
115	勾　玉	1.9	1.5	0.2	滑　石	0.9
116	勾　玉	1.6	1.0	0.2	滑　石	0.6
117	勾　玉	2.7	1.5	0.3	滑　石	2.5
118	勾　玉	1.6	2.3	0.3	滑　石	1.4
119	勾　玉	3.0	1.6	0.4	滑　石	2.2
120	勾　玉	1.7	0.9	0.2	滑　石	0.5
121	有孔円板	1.7	2.3	0.3	滑　石	1.8
122	有孔円板	2.3	2.0	0.3	滑　石	2.3
123	有孔円板	2.3	2.0	0.3	滑　石	2.1
124	有孔円板	2.9	1.7	0.3	滑　石	3.0
125	有孔円板	2.0	1.5	0.3	滑　石	1.3

（2）子持勾玉

31号住居址から滑石製の子持勾玉が1点出土している。これは頭・尾部の両端が尖り全体的にバナナ状を呈しており、断面形は円形に近い楕円形である。背部に4個、両側面に3個づつ、腹部に1個の突起を有している。突起部分は破損を受けているものが多いが、突起はそれぞれ独立していることが分かる。しかし背部や側面部の突起は完全な小勾玉状には仕上げられてはいない。背部、側面部の突起は長さ1.5～1.7㎝、高さ0.2～0.4㎝、厚さ0.5～0.7㎝である。腹部の突起は長さ2.4㎝、高さ1.8㎝、厚さ0.8㎝となっている。全長は6.9㎝、各突起部を含めた幅は3.2㎝、厚さ1.6㎝を測る。穿孔は両面からなされ、孔径は0.5㎝である。重さは59.3ｇを測る。全体的に丁寧なつくりとなっている。佐野大和氏の分類によればａ類に該当すると思われ、古い段階に属するものである[1]。倉林眞砂斗氏によると日本海側地域にこのタイプの子持勾玉が比較的多く分布しているということであるが、これは地域的にも興味深い指摘である[2]。

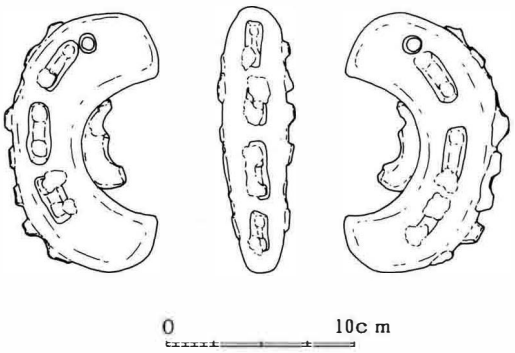


図188　31号住居址出土子持勾玉実測図

ところで子持勾玉の年代観は佐野大和氏による形態分類に基づくものが代表的だが、近年では佐々木幹雄氏[3]や大平茂氏[4]によって編年が進められており、子持勾玉の出現は5世紀中葉に位置付けられ、6世紀代に盛行し、そして7世紀代まで認められることでほぼ見解は一致してきている。本例はＴＫ208型式の須恵器と伴出していることから5世紀後半に比定できるだろう。

子持勾玉論の現状

①出土状況について

佐々木幹雄氏によれば1985年段階において全国で300余点の出土が確認されるという。従来、子持勾玉は単独出土が大半であったため、「考古学上のスフィンクス」[5]とも呼ばれるほどその性格がつかめない遺物であったが、近年になって子持勾玉の出土例が増加するに伴い、多様な出土状況を示すことが明らかとなってきた。それらを単独出土や神社境内出土の例を除いて簡単に整理すると、

A	古墳	大阪府カトンボ山古墳、など
B	祭祀遺跡	福岡県沖ノ島祭祀遺跡（4号・8号・21号）、など
C	豪族居館	群馬県三ツ寺Ｉ遺跡、群馬県原之城遺跡、など
D	住居址	佐賀県下石動遺跡ＳＢ24、群馬県伊勢崎・東流通団地1-11-5号住、など
E	溝	大阪府深田遺跡、群馬県上滝遺跡、など
F	井戸	奈良県藤原宮ＳＥ1300、など

と分類できる。このことは豪族層から民衆層にいたるまで階層を越えて、様々な祭祀行為において用いられていた祭祀遺物であることを示している。つまり子持勾玉は特定の階層や特定の祭祀に用いられたのではないことが理解できよう。そしてこの出土状況はいみじくも石製模造品の場合とほぼ同じ様相を呈しているのである。したがって、本例のような住居址出土例は数はいまだ少ないが例外的な存在とはいえず、そこに意義を見出さねばならないのである。長野県内をみてみるとその大半が単独出土であるが、住居址出土としては、後世の投げ込みで

ある可能性もあるが塩尻市平出遺跡42号住居址の例、また最近では長野市榎田遺跡でも認められている。

②分布について

佐々木幹雄氏は子持勾玉は「五・六世紀代においていわゆる大和政権の何かしらの影響下にあった地域ではほとんど出土が認められ」、さらに分布にはいくつかの密集地が存在することを指摘する。それによれば(1)茨城県南部と千葉県北部、(2)群馬県東南部、(3)長野県中南部、(4)奈良盆地東部と大阪府南部、(5)鳥取県と島根県東部、(6)広島県東南部、(7)北九州地域などであるというが、筆者はこれに本遺跡を含む善光寺平も加えるべきだと考える。なぜならここでは単独出土ではあるが、長野市西寺尾から3点、長野市下横田1点、長野市平林から1点が認められ、本例とあわせて6点が出土している。また榎田遺跡からも出土が確認されている。さらに参考資料ではあるが長野市玉依比売命神社所蔵品として9点が認められることも見逃すわけにはいかない。

佐々木氏はまた、こうした子持勾玉の分布は石製模造品製作遺跡の分布ともよく似ていることも論じているが、これも本遺跡が石製模造品製作遺跡として理解できることからも注目すべき事象であろう。

③祭祀小考

さて「考古学上のスフィンクス」ともいわれる子持勾玉の祭祀の実態をつかむことは容易ではなく、筆者の能力を超えているが、ここでは簡単に研究史を振り返り、私見を述べたい。

子持勾玉については、梅原末治氏のように魚類の豊富を期待するために魚の形をシンボライズせしめたとする魚形起源説、その形状が蚕に似ていることから養蚕に関わる祭祀遺物と考えた近藤喜博氏の蚕起源説、銅鐸にその起源を求める直良信夫氏の説なども見られるが、今日に至るまでもっとも大きな影響を与えているのは大場磐雄氏の説である。大場氏は子持勾玉はあくまでも勾玉形を基本とするものであると理解し、「子持勾玉の発生は、古墳時代中期に滑石製遺物の一群中から、祭祀用品が分離したとき、勾玉に対する呪力を強化して同形の子を付着させたものがその発想であった」という[(6)]。大場氏のこの、いうなれば「勾玉呪力強化説」は寺村光晴氏や佐野大和氏らによっても継承されているが、近年佐々木幹雄氏は「子持勾玉とは古墳時代中期にみられた祭祀形態の変化に伴い、呪力あるものと考えられた勾玉にさらに呪力ある子勾玉を付け、単に呪力の倍化だけではなく、全く新しい観念、つまり呪力の生成・化成・増殖、転じて多産・豊穣・増福などの意義をもたせ、つくり出されたもの」とさらに論を発展させている。

筆者も基本的には「勾玉呪力強化説」を支持したい。子持勾玉を理解するためにまず考えなくてはいけないことは佐野大和氏によっても指摘されているように、子持勾玉が「滑石製品」であるということである。つまり石製模造品とは切り放して理解できないのである。子持勾玉の密集地と石製模造品製作遺跡の分布が非常に近似しているという佐々木氏の指摘や、またその出土状況が石製模造品の場合ときわめて類似していることからも推し測れるだろう。また子持勾玉の分布が大和政権の影響と大きく関係すると考えられることも石製模造品の場合と同様である。このことは子持勾玉が全く異なった祭祀遺物なのではなく、石製模造品と深い関連性を有しているものであることを認識させる。このような関連性から考えてみるに、子持勾玉はやはり勾玉を原形にしていると理解すべきであり、とするならばやはり「勾玉呪力強化説」がもっとも妥当であろう。しかも石製模造品祭祀とつながりの深いものであることを指摘できる。桐原健氏は玉依比売命神社での児玉石神事に「三ツ石」といわれる3点の子持勾玉をはじめとして、9点が重要な役割を果たしていることから、子持勾玉には豊穣と関連する性格が存在していることを論じているが[(7)]、これなども「勾玉呪力強化説」とも関連した大変興味深い見解である。しかしながら、それではなぜ勾玉の持つ呪力を強化・倍化させねばならなかったのか、その理由はいまだはっきりしない。また近年その出土数が増えているとはいえ、300余個という僅少さは一体なぜなのか、さらに石製模造品祭祀とはどこが違うのか、はたしていかなる祭祀集団によって営まれたのか、などその祭祀がいかなるもので

あったのか実態はいまだ霧の中にあるといえよう。しかしながら本例はその解明のための一資料となることは間違いないのである。

（桜井　秀雄）

引用参考文献

(1)佐野大和　1972　「子持勾玉」『神道考古学講座』第三巻　雄山閣　以下佐野の引用はこれによる
(2)倉林眞砂斗　1984「IV　付篇　子持勾玉」『横滝山廃寺跡発掘調査概報　第3次調査』寺泊町教委
(3)佐々木幹雄　1985「子持勾玉私考」『古代探叢』II　以下佐々木の引用はこれによる
(4)大平　茂　1989　「子持勾玉年代考」『古文化談叢』第21集
(5)佐野大和(1)文献
(6)大場磐雄　1962『武蔵伊興』國學院大学考古学研究報告第2冊
(7)桐原　健　1988「古墳時代の信仰と葬制」『長野県史』考古資料編(4)遺構・遺物

(3)その他の祭祀関連遺物

土製勾玉

49号住居跡より出土した。長さ2.9cm、幅1.7cm、厚さ2.1cm、孔径0.15～0.45cm、重さ3.7gを測る。丸みはあるが全体として粗造品である。

土鈴

2点出土している。土製模造品の一種であるが出土例は少ない。小野真一氏によると、「球形の本体の上部に紐をつけ、下部に切込の口を開けてある」[1]ものが一般的ということであるが、本遺跡出土例は大分その形態が異なっている。15号住居跡から出土したものは、「釣鐘」状を呈し、器高4.6cm、底部径3.8cm、重さ58.1gを測る。47号住居址からの出土品は球形が2個あり、あたかも「鉄アレイ」のような形状を呈している。器高は2.7～2.9cm、長さ7.0cm、重さ45.8gを測る。丸子については切込口がないため正確な数量は不明であるが、いずれも数点と推測される。また本2例がともに一部に平坦面を持っており、定置出来るものであることはその性格を考える上でも興味深い。

亀井正道氏によれば、土鈴は伴出遺物から年代を決定できるものは少ないというが[2]、本2例はいずれも住居址から検出されたものである。なお、管見では長野市牟礼バイパスB地点遺跡4号住居址、飯山市田草川尻遺跡(2次調査) H5号住居址からそれぞれ1点づつ出土している。

石製模造品

29号住居址と36号住居址より出土している。29号住居址の覆土からは有孔円板が出土している。長さ2.1cm、幅2.3cm、厚さ0.2cm、重さ2.3gを測る。二孔が穿たれているいわゆる双孔円板である。口径は0.15cmを測る。一部に破損がみられるがおおむね丁寧なつくりとなっている。

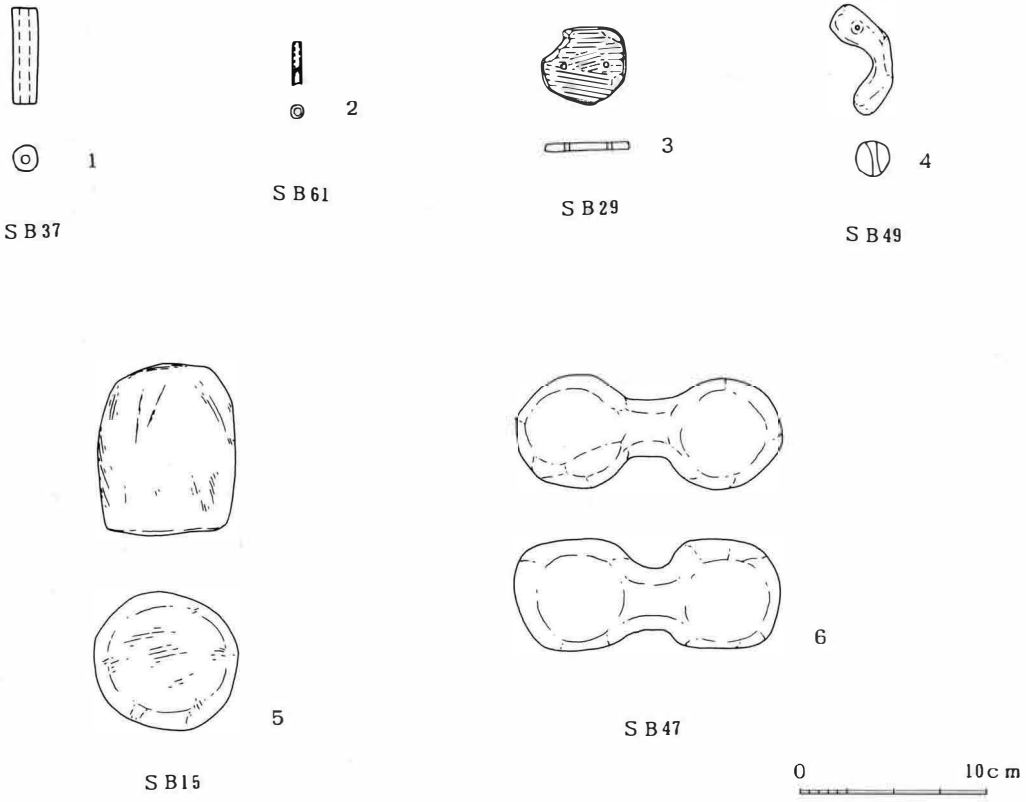


図189　その他の祭祀関連遺物実測図　（1：2）

管玉

管玉は2点いずれも住居址から出土している。37号住居址から出土したものはグリーンタフ製で、長さ2.5cm、径0.7cm、孔径0.3cm、重さ2.0gを測る。穿孔は両方からなされている。覆土からの出土である。61号住居址からの出土品は径0.3cm、孔径0.2cm、重さ0.1gを測るが、長さは欠損しているため、不明である。現存部分で1.2cmを測る。グリーンタフ製と思われる。

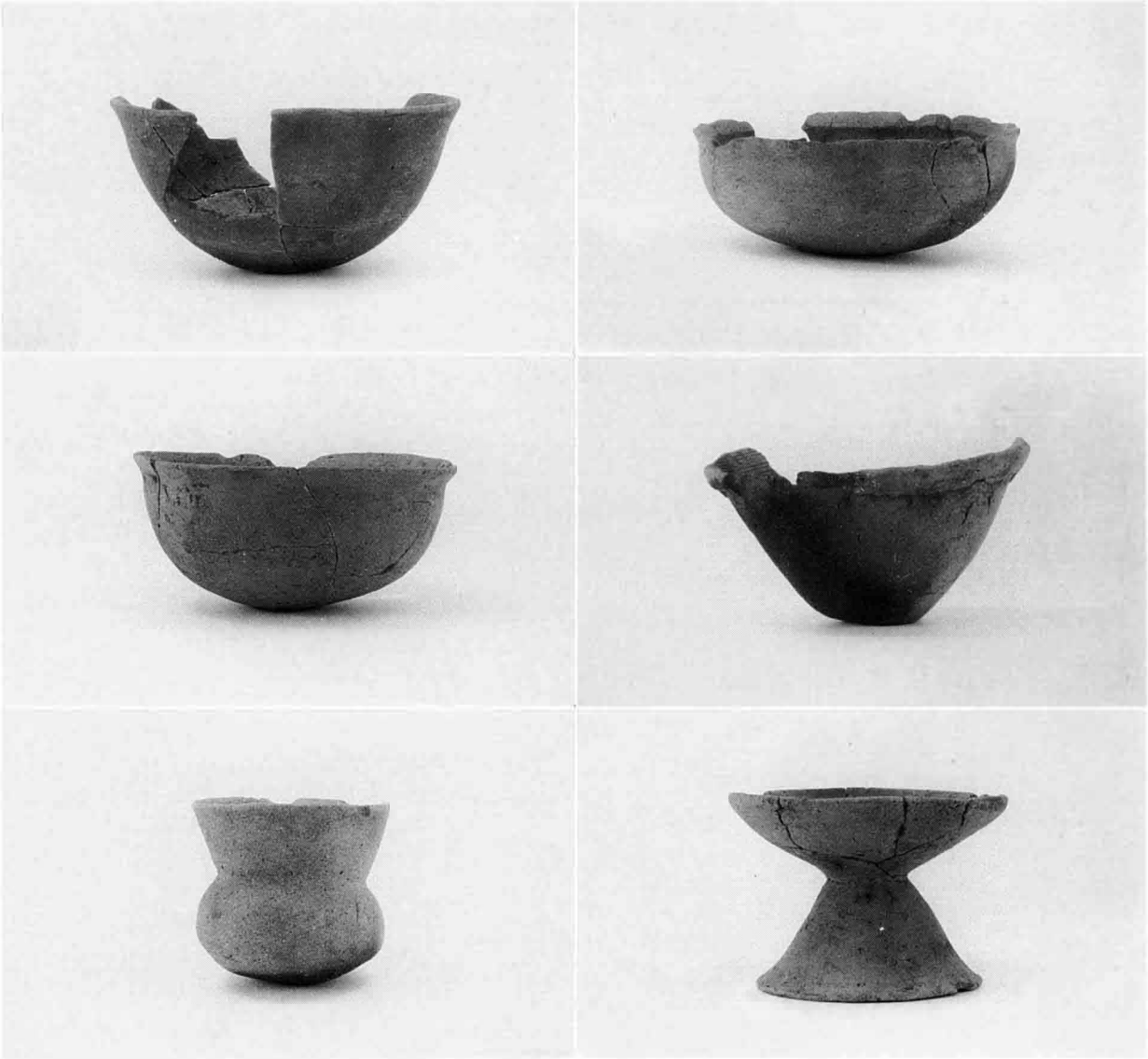
（桜井　秀雄）

引用参考文献

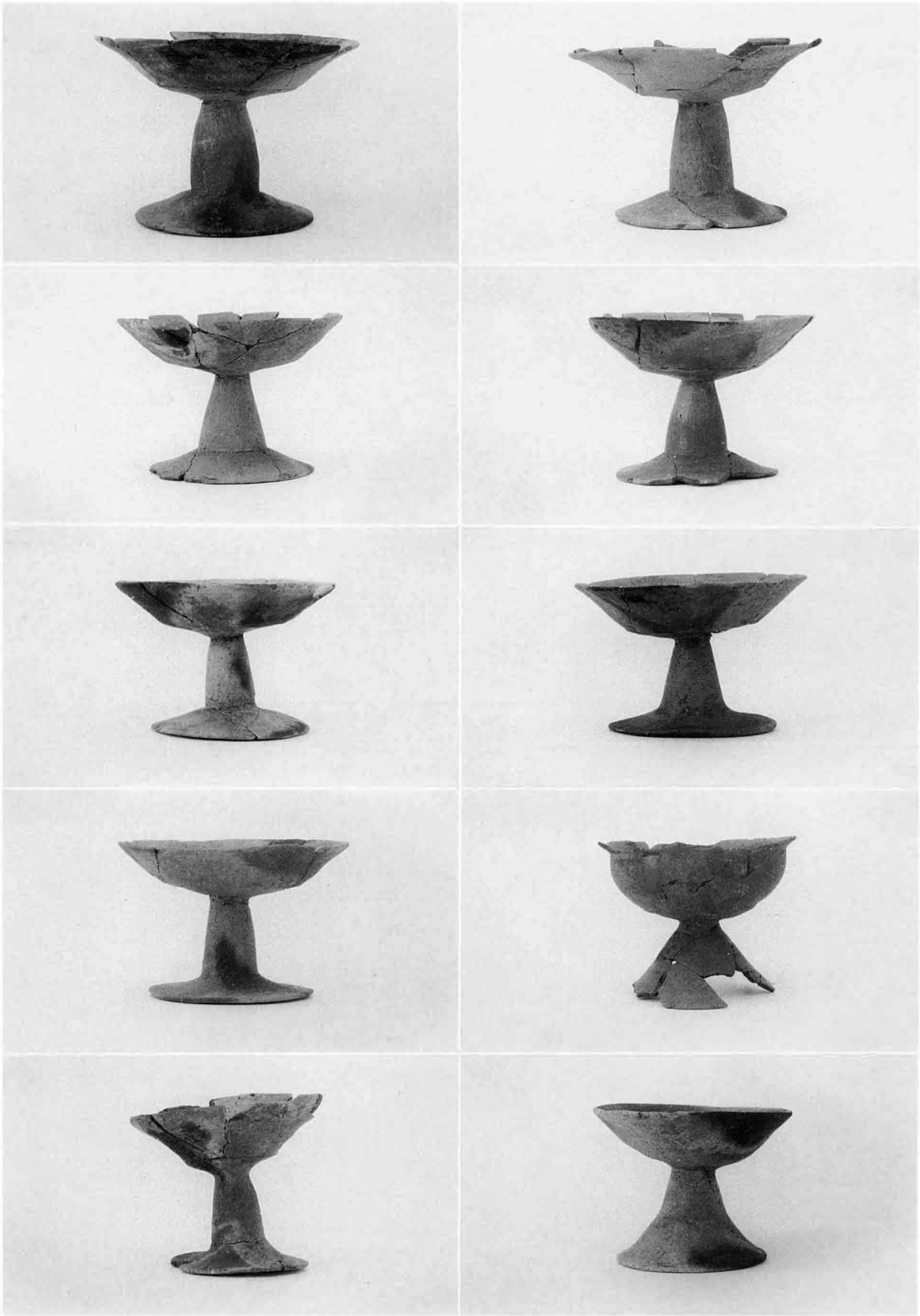
(1)小野真一　1982『祭祀遺跡』ニューサイエンス社
(2)亀井正道　1966『建鉾山』吉川弘文館

調査地周辺の地形

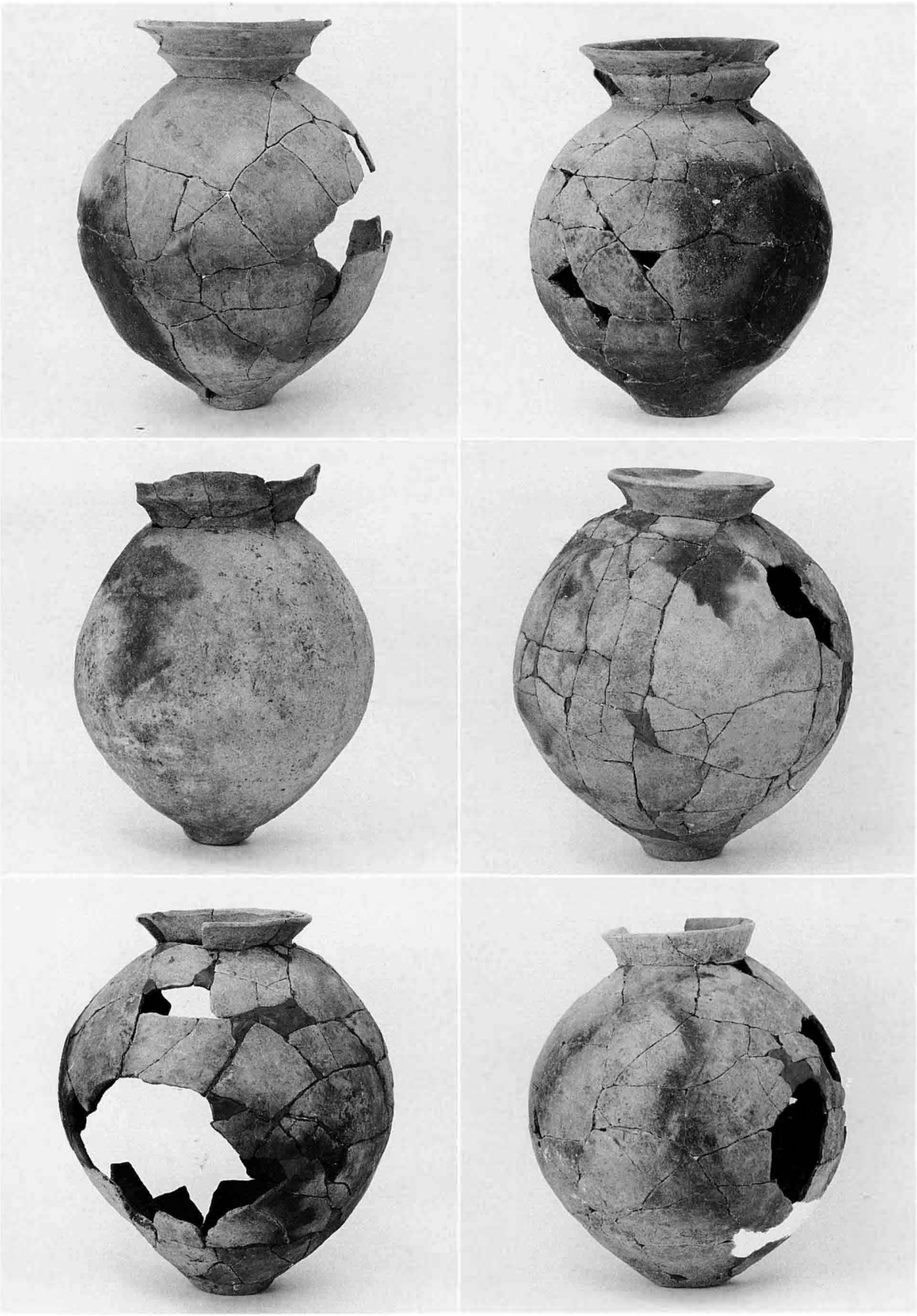
41号住居址出土土器



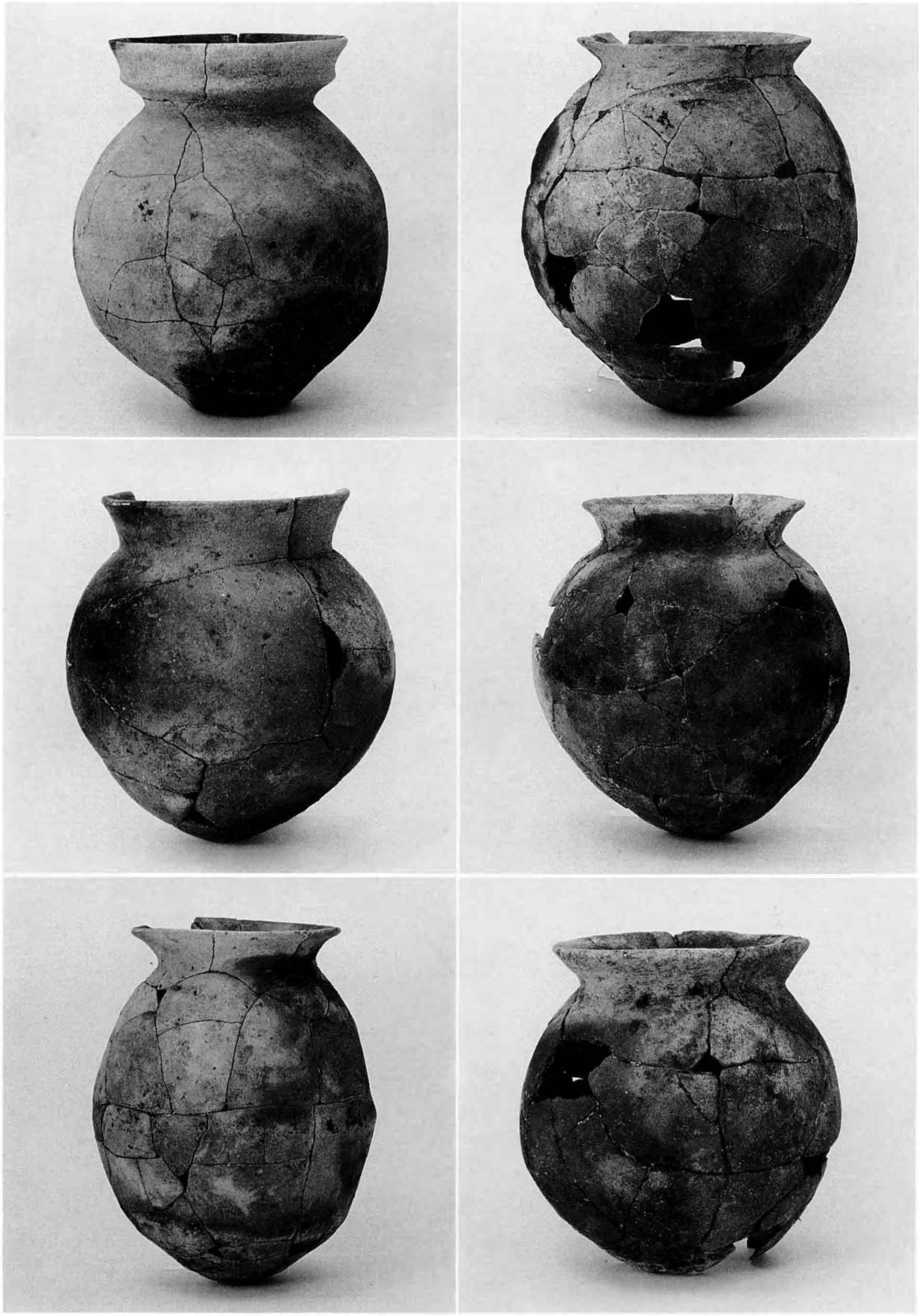
54号住居址出土土器



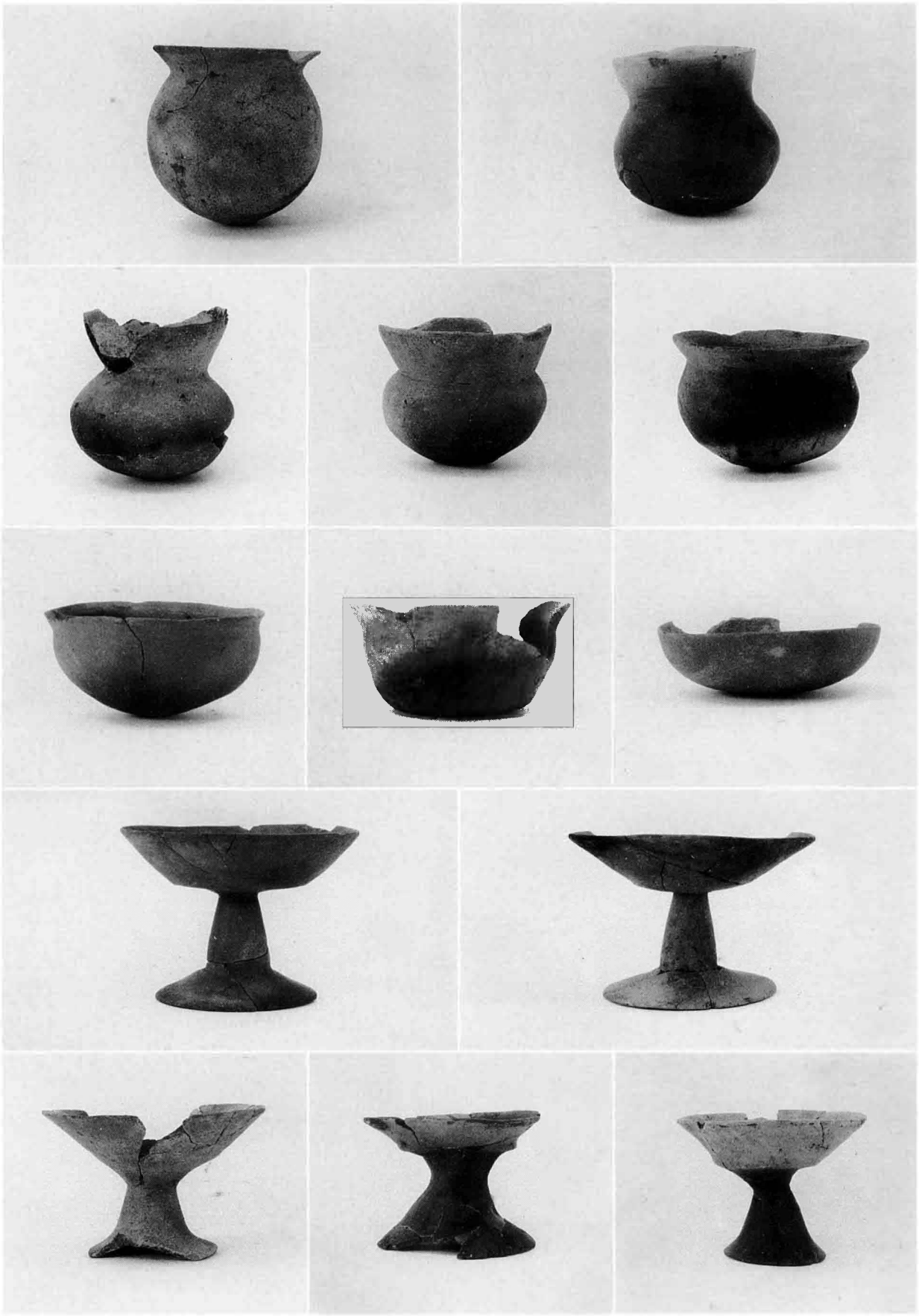
54号住居址出土土器



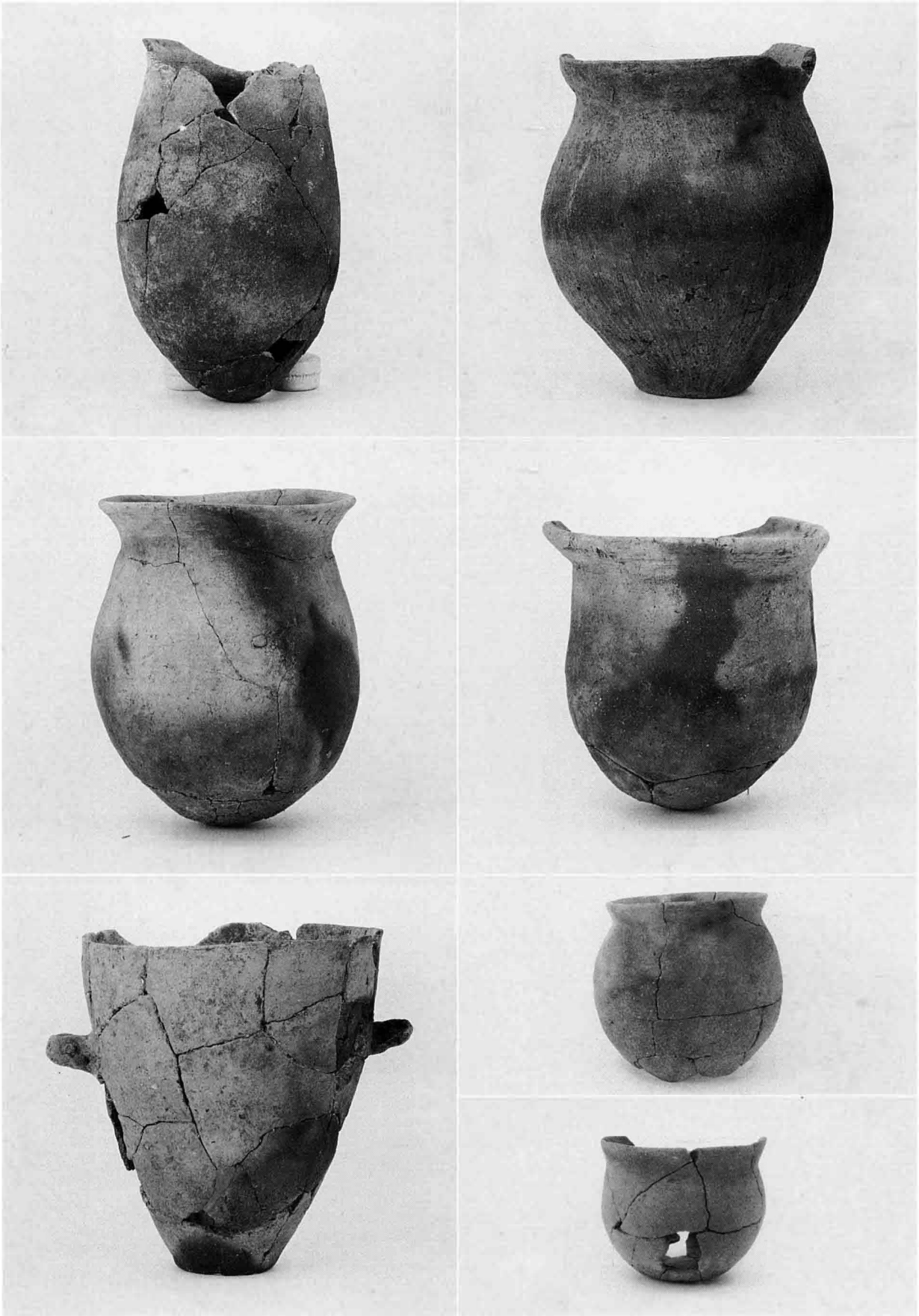
55号住居址出土土器



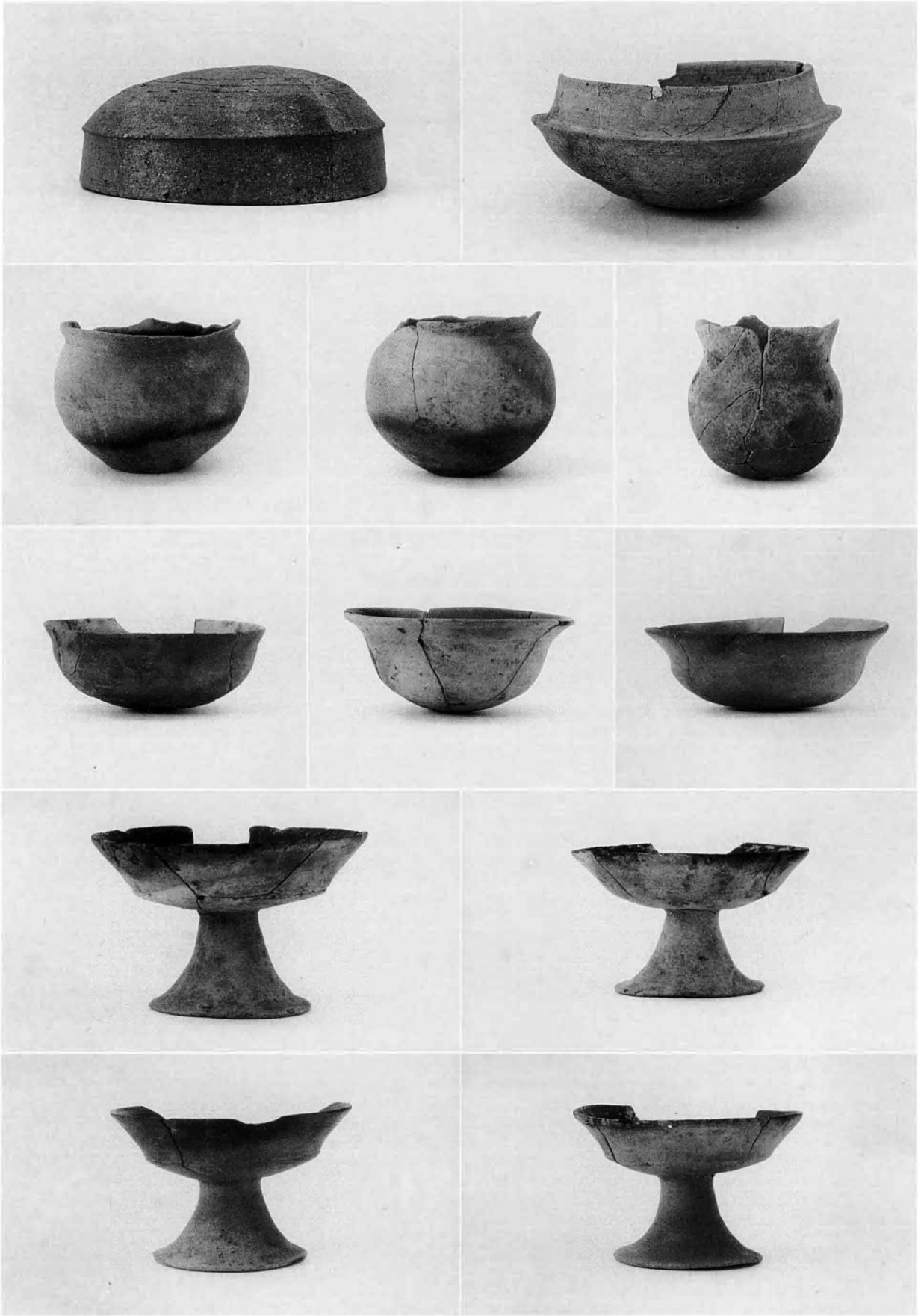
55号住居址出土土器



55号住居址出土土器



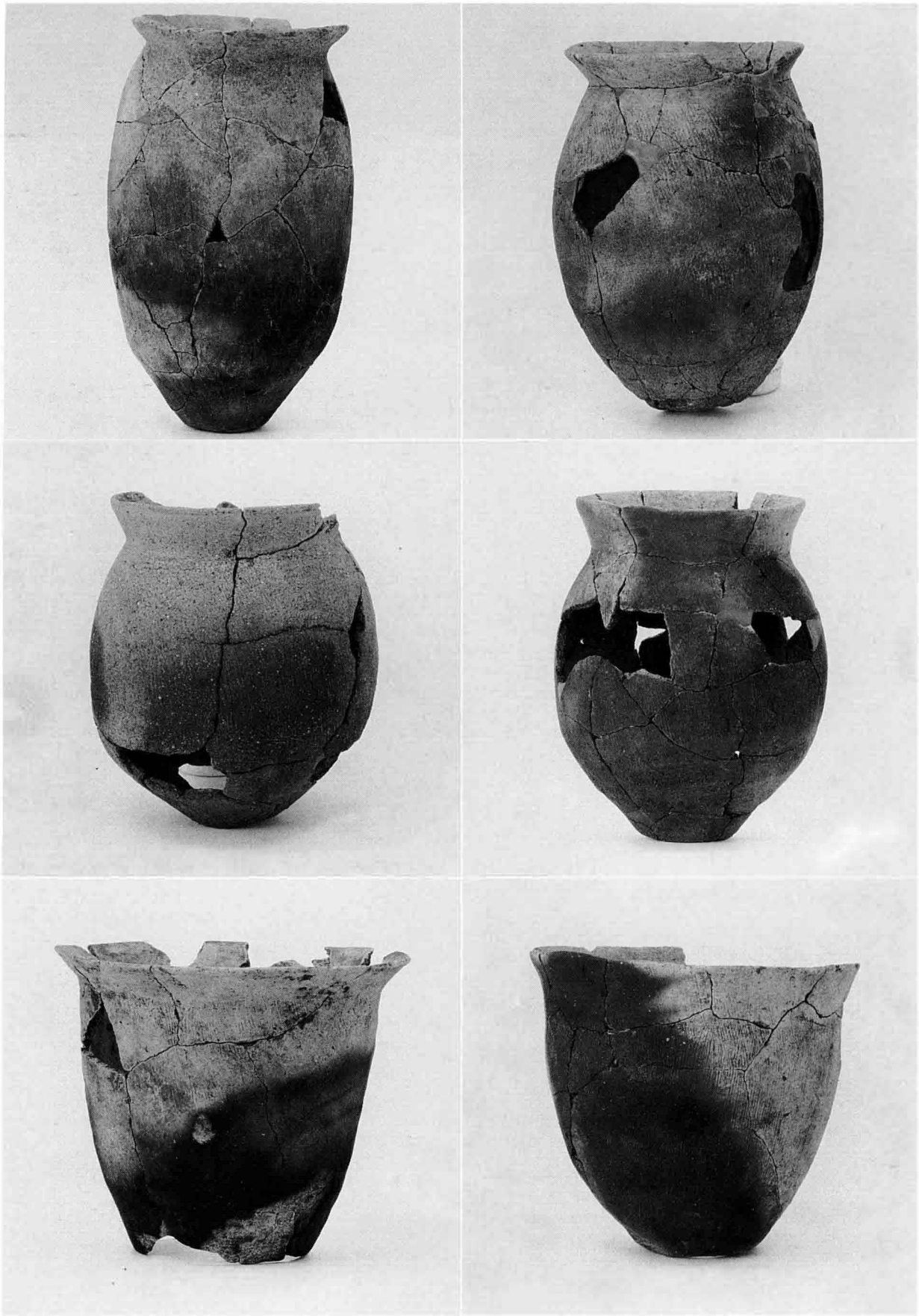
57号住居址出土土器



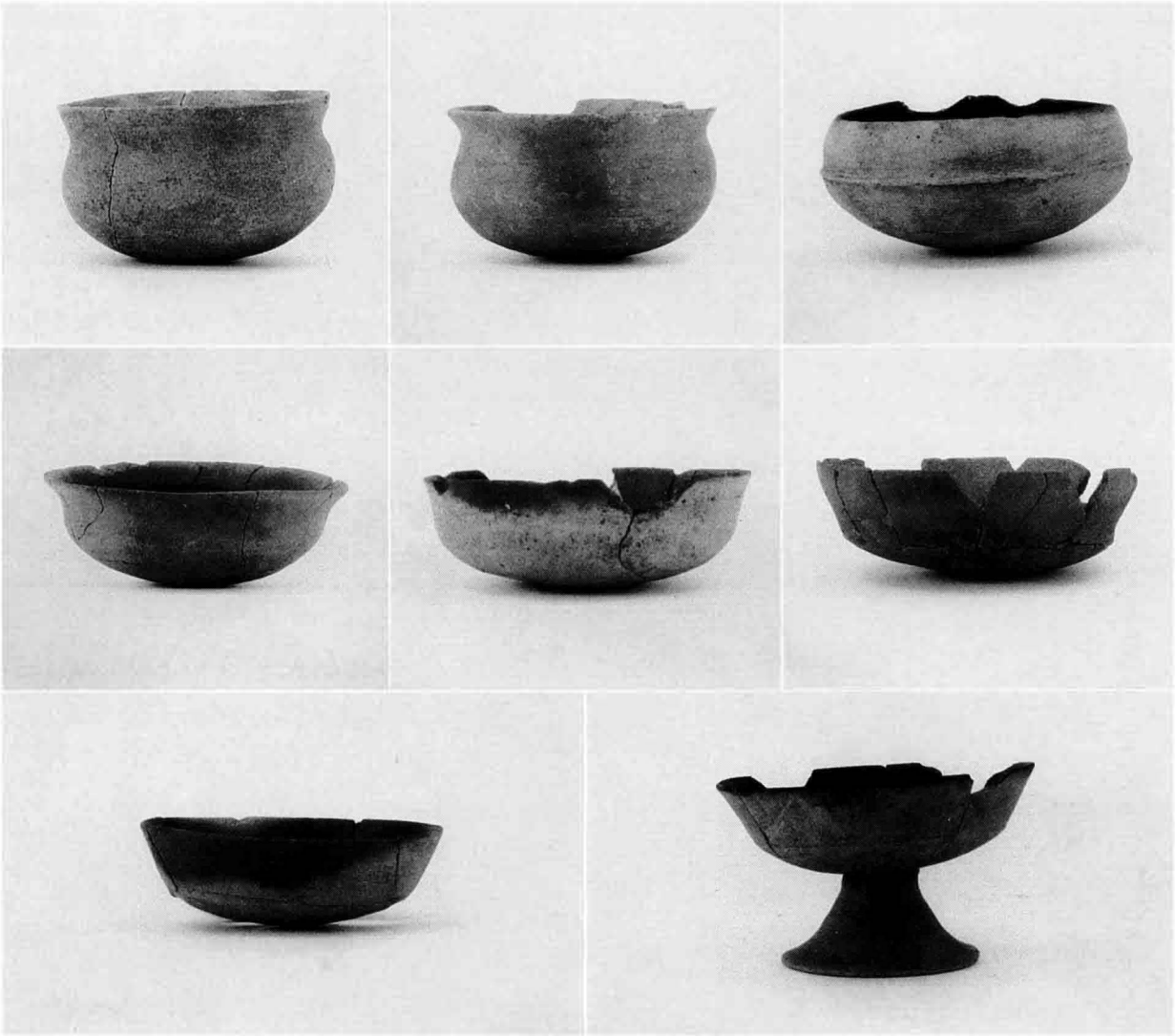
57号住居址出土土器

30号住居址出土土器

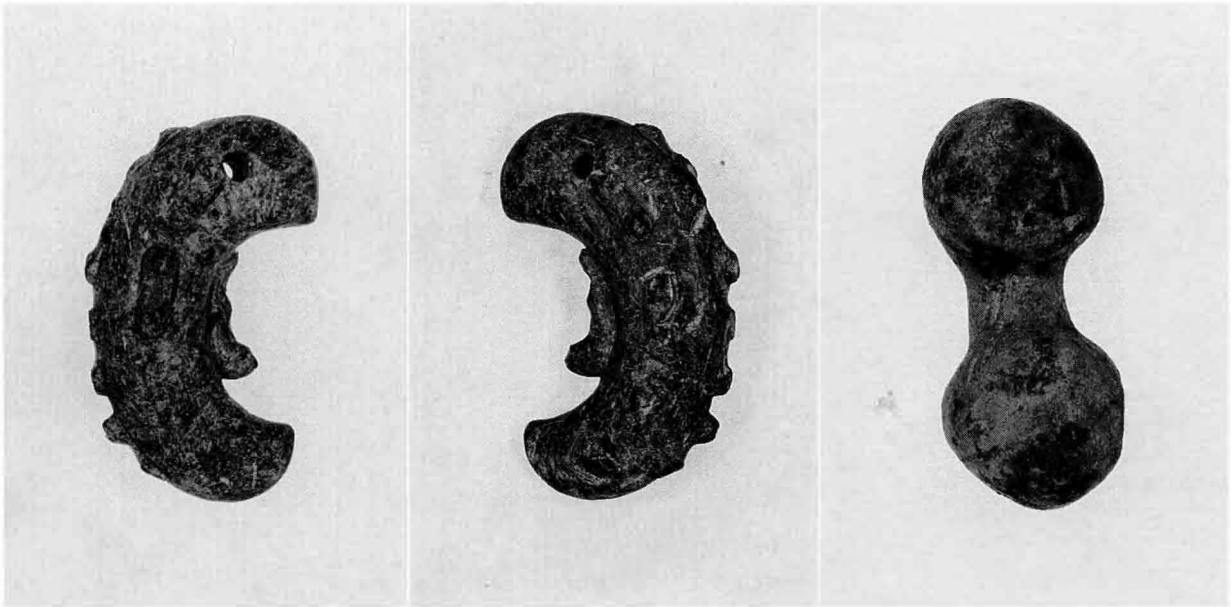
37号住居址出土土器



42号住居址上層出土土器



42号住居址上層出土土器



子持勾玉（31号住）　　土鈴（47号住）

長野市の埋蔵文化財第50集

本村東沖遺跡

平成５年３月25日　印刷
平成５年３月31日　発行

編　集　長野市教育委員会
発　行　長野市埋蔵文化財センター
印　刷　信毎書籍印刷株式会社